

インドネシア共和国宗教省

宗教的節度



研究開発教育研修
インドネシア共和国教育局

宗教的節度



インドネシア共和国宗教省研究開発教育研修局

2022

著作権 2020 宗教省研究開発教育研修局

発行者 : BADAN LITBANG DAN DIKLAT KEMENTERIAN
AGAMA RI

(インドネシア共和国宗教省研究開発教育研修局)

宗教省ビル

Jln. MH. Thamrin No. 6, Lt. 18, Jakarta Pusat, 10340

電話番号. : +62-21-3920663, 3920668

Eメール : sisinfobalitbangdiklat@kemenag.go.id

ウェブサイト : www.balitbangdiklat.kemenag.go.id

著作権は法律で保護されています

2020年10月初版発行

2021年11月第2版

2022年10月第3版

インドネシア宗教省起草チーム

ブラウイジャヤ大学文学部日本語学科教師チーム

カタログ ダラム テルビタン (KDT)

インドネシア共和国宗教省

研究、開発、研修および教育機関

宗教節度/インドネシア共和国宗教省の研究、開発、研修、および
教育機関による。

- 第1刷。 - ジャカルタ: インドネシア共和国宗教省、2020年。
xiv、148 ページ。 14.5×20.5cm

1. 宗教的節度

2. 宗教的調和

ISBN: 978-979-797-391-9

概要

この本は、宗教的節度に関連して、何を、なぜ、どのように、という問題を説明することを目的としている。宗教的節度とは何か？なぜそれが重要なのか？そして、それを実施する方法は？

前述の 3 つの質問に答えるには、主に 3 つの部分がある。宗教的節度の実証的な経験；宗教的節度の強化と実施のための戦略。

第一章には、その定義、基本的な価値観と原則、さまざまな宗教的伝統における参考ソース、および指標から始めて、宗教的節度に関連する概念的な説明が含まれている。このセクションでは、公正、バランス、緩和、包摂、寛容の原則についての議論が、節度の指標として重要な部分となる。

第二章では、宗教的節度の重要性の背景と社会文化的文脈、およびインドネシア社会の実証的な経験におけるその実施例について議論する。穏健さは、すべての宗教生活の実践における視点として使用される。

最後に、第 3 章では、宗教的節度を強化および実施するために必要な手順を示す。この強化は、国家プログラムとして宗教的節度を構造的に提唱することを目的と

している。したがって、それは個人または機関のいずれかの視点になる。

宗教的節度の強化は、次の 3 つの主要な戦略を通じて実行されます。第一に、社会のあらゆるレベルに宗教的中庸の考え、知識、理解を広めること。第二に、宗教的節度を拘束力のあるプログラムや政策に制度化すること。そして第三に、2020 年から 2024 年までの国家中期開発計画（Rencana Pembangunan Jangka Menengah Nasional - RPJMN）に宗教的節度の策定を統合する。

この構造的戦略は、これまでに取られた他の措置を補完し、強化するものであり、例えば宗教間対話の形で、包摂性と寛容の価値を構築するために、人々のグループ間の会合を促進することによってますます強化する必要がある。

本書は、多様性の中で調和のとれた平和な生活を望む一人でも多くの人々に参照されることを期待している。この宗教的節度の本は、すべての人のものでなければならない。特定の宗教に限らず。願わくば！



ご挨拶

インドネシア共和国宗教大臣

インドネシアは、民族、言語、宗教の面で非常に異質な国です。大国として、パンチャシラのイデオロギーを堅持するインドネシアは、これらの違いによる社会的資産を必要としています。貢献が大いに期待されるセクターの 1 つは宗教セクターです。インドネシア社会は、国家発展のための重要な社会的資産として、宗教生活における調和を必要としています。

政府のバックボーンとして宗教コミュニティを管理する宗教省は、宗教の調和を生み出すための正確なツールを必要としています。調和のとれた宗教生活を築くための宗教省の取り組みの 1 つは、宗教的節度の概念を高めることです。宗教的節度とは、部族、民族、宗教、および政治的選択に関係なく、社会のすべての構成員がお互いを尊重し、それらの間の違いを管理および克服するために自分自身を訓練することを学ばなければならないバランスを維持するための共有されたコミットメントです。

宗教生活におけるキーワードとしての宗教的節度は、宗教省によって引き続き反映されています。同時に、宗教的節度に対する一般の意識の高まりは、宗教的節度が単なる理論や空虚なユートピアではないことを強調しています。この目標を達成するために、この「宗教的節度」という本は、あらゆるレベルのコミュニティに対して宗教的節度の概念を明確に説明する取り組みとして出版されました。

宗教的節度の社会化は、少なくとも過去 4 年間で行われてきました。宗教的節度の主流化も行われており、現在も続いています。それをすべての宗教団体の視点にする必要があることは別として、この努力は国の開発政策の不可欠な部分にならなければなりません。ありがたいことに、その宗教的節度に対する私たちの努力は報われ、宗教省の任務となったRPJMN 2020-2024の国家政策と戦略の方向性になりました。我々は、宗教的節度が精神革命戦略と文化的発展の不可欠な部分になり、質と競争力のある人材を向上させる努力をすることを願っています。

この日本語版は、宗教的節度の概念で国際社会のリーチを拡大することが期待されています。この本は、宗教的節度のエージェントのためのハンドブックであるだけでなく、世界の宗教コミュニティの利益のために、世界のさまざまな地域の学者や社会学者によって行われる議論になることも願っています。

この本を編集するために尽力してくれた元宗教大臣/宗教穏健派のイニシエーターであるルクマン・ハキム・サイフディン様、研究開発訓練庁および関連団体のメン

バーに感謝しています。願わくば、この本が宗教的節度を促進し、宗教生活における社会を穏健さにするのに効果的であることを期待します。

ジャカルタ、2022 年 4 月
インドネシア共和国宗教大臣

H.Yaqut Cholil Qoumas



序説

研究開発及び教育研修局長 インドネシア共和国宗教省

Alhamdullilah、この宗教的節度に関する本を出版してくださって、心から感謝しています。2019年以来、数回印刷されています。この本の編集は、インドネシア宗教省の研究開発庁が、宗教大臣の様々な場面での参考として使用できる宗教的節度の本を編集するよう求めたことに対する回答からの回答です。この本は、宗教的中庸、その文脈、宗教生活におけるその重要性の理由、およびそれを実施するために必要な手順についての理解を提供することが期待されています。

これまでのところ、我々の研究開発の結果のいくつかは、宗教的節度を強化するための参照および基礎となるのに十分なほど強力です。たとえば、宗教的節度のテーマ別解釈は、ラジナ・ペンタシハン・ムシャフ・アル・コーランの作品であり、ジハードの意味を正すポケ

ットブックは、バリトバン・ディクラットとインドネシアのウラマ評議会との共同作業です。

本書の作成は、データ検索チームの結成から始まり、執筆プロセス、ディスカッション、フォーカス グループ ディスカッション (FGD) による妥当性テスト、最終段階での再読まで、いくつかの段階を経ています。このプロセスは、研究開発訓練庁とイスラム社会研究センター (PPIM) 国立イスラム大学 (UIN) ジャカルタの研究者が関与して実施されました。これを支援するために、インドネシア宗教省の宗教指導および宗教サービス研究開発センター、研究開発機関及び訓練の所長であるムハラム・マルズキは、宗教指導者、宗教の調和、活動家と女性活動家。ここに名前を掲載できなかったことをお詫び申し上げます。

また、研究開発訓練庁は、主な任務と機能に応じてプログラムと活動を編集することにより、この本のフォローアップを準備します。ブリーフ、および宗教的節度を強化するためのモジュール。このモジュールは、普及員、宗教コミュニケーション フォーラム (FKUB) の管理者、および宗教団体を対象としています。

さまざまな散在するソースを収集し、それらを完全な本に混ぜ合わせてくれた、この本の著者チームに最大の感謝を表明します。彼らは、オマーン・ファトゥラーマン、ムハンマド・アドリン・シラ、アニク・ファリダ、アブドウル・ジャミル・ワハブ、イスマトゥ・ロピ、ルマディ、リチャード・ドーレイ、ウング・センダナ・リンガラジャ、ナスルラ・ヌルディン、アブダラ・シー、フィクリ・ファールルです。また、支援をくれた

技術チームのアンショリ、ヘフソン アラス、ハリス ブルハニ、リズキ リヤドゥ タウフィク、イドリス タハ、スリ ヘンドリアーニ、ファフルディン、ムザッキ ナドフィ、アブドゥラ マウラニ、アクマル サリム ルハナに感謝しています。

最終段階で、この本はアリッサ・ワヒド、アリ・ザワウイ、ハディ・ラーマン、カマルディン・アミン、ムクリス・ハナフィ、ユディ・ラティフによって再読されました。彼ら全員に、心から感謝します。

この本が、宗教省自体の政策立案者によって実施されるか、他の団体によって実施されるかに関係なく、宗教の調和を生み出すことを目的とした他のプログラムを策定するための参考資料となることを願っています。

ジャカルタ、2022 年 10 月

インドネシア共和国宗教省
研究開発および訓練機関の局長、

Prof. Dr. Suyitno

目次

概要.....	iii
インドネシア共和国宗教大臣のご挨拶.....	v
研究開発及び教育研修局長の序説.....	ix
目次	xiii

プロローグ

Lukman Hakim Saifuddin

元インドネシア共和国宗教大臣（2014-2019）	1
---------------------------------	---

第一章

宗教的穏健さの概念研究.....	15
A. 穏健さの意味及び限界.....	15
B. 穏健さの基本原則:公正でバランスを保つこと.....	18
C.多様な宗教の風習における穏健さの創設	22
D. 宗教的穏健さのインディケーター	39
E. 極左と極右との間の穏健さ	43

第二章

宗教的穏健さ（節度）の経験.....	49
A. 多文化共生社会の背景.....	50
B. 宗教的節度という社会文化的の資本.....	57
C. 積極的寛容の強化のための宗教的節度.....	72
D. 非暴力のための宗教的節度.....	78
E. デジタルディスラプション時代の宗教的節度....	81

第三章

宗教的節度の強化及び実施する戦略.....	91
A. 宗教省における宗教的節度.....	98
B. 宗教的節度に関する社交.....	101
C. 宗教的節度の制度化と実施.....	108
D. 2020-2024のRPJMN における宗教的節度の 統合化.....	117
E. 宗教省の戦略計画.....	127

エピローグ.....	139
参考文献.....	145

プロローグ

LUKMAN HAKIM SAIFUDDIN インドネシア共和国宗教大臣 (2014-2019)

この本は、宗教的節度を説明し、宗教的節度とは何を意味するのかという質問に答えるために存在します。特にインドネシアにおける宗教生活の文脈において、宗教的節度が重要なのはなぜですか?そして、宗教共同体が穏健さになるために、宗教的節度を実施する際に可能なアプローチまたは戦略は何ですか?

手短かに言えば、穏健さという用語は穏健さという言葉に由来する形容詞であり、急進的でない、または過度に右翼的または左翼的ではないことを意味することをここで説明できます。インドネシア語では、インドネシア語公式辞書 (KBBI) で暴力の削減または過激主義の回避として定義されている *moderat* という単語に吸収されます。

KBBI では、*moderasi* という言葉はラテン語の *moderatio* に由来することも説明されています。これは、合理的な範囲内を意味します。多すぎない (多すぎず、少なすぎず)。それで、節度という言葉が宗教という言葉と並置され、宗教的節度になると、この用語は、

暴力を減らす態度、または宗教的慣行における極端を避ける態度を指すことを意味します。

したがって、この本全体には、すべての宗教団体が十分に理解できるように、宗教的文脈における穏健さと穏健さの意味の説明が含まれています。宗教的節度は実際には宗教の本質であり、宗教内および宗教間の調和を生み出すために、インドネシアのような多元的で多文化的な社会の文脈ではその実施が必要になるため、この説明は重要です。

インドネシアの多様性と多様性

インドネシアの人々にとって、多様性は宿命であると考えられています。多様性は求められたのではなく、それを創造した神によって与えられたものであり、交渉されるのではなく、受け入れられる（当然のことと見なされる）ものでした。インドネシアは、世界でも類を見ないほどの民族、文化、言語、宗教の多様性を持つ国です。コミュニティで最も広く受け入れられている 6 つの宗教に加えて、インドネシアには数百または数千の部族、現地の言語と文字、現地の信仰があります。2010 年の中央統計局（BPS）のデータを参照すると、インドネシアの部族と亜部族の総数は 1331 でしたが、2013 年には、この数は東南アジア研究所（ISEAS）と協力して BPS によって分類されました。）、633 の大規模な部族グループになります。

言語の数に関しては、言語委員会は 2017 年にインドネシアの 652 の地方言語をマッピングして検証することができました。これらの地域言語の中には、ジャワ

インドネシアの人々にとって、多様性は宿命であると考えられています。それは求められたのではなく、創造した神から与えられたものであり、取り引きではなく、受け取る（当然のことと見なす）ために与えられたものです。

語、古ジャワ語、スンダ語、古スンダ語、ペゴン語、マレー語またはジャウィ語アラビア語、ブギスカッサル語、ランブン語など、自然に独自のスクリプトタイプ

があります。これらのスクリプトの一部は、アチェ語、マレー語、ミナンカバウ語、ウォリオ語の記述にも使用される Jawi スクリプトなど、複数の異なる言語で使用されます。

インドネシアの人々が生き方として最も広く受け入れ、実践している宗教は、イスラム教、キリスト教、カトリック、ヒンズー教、仏教、儒教の 6 宗教ですが、一部のインドネシア人のこれらの宗教的信念は、何百もの言語で表現されています。祖先の宗教と支持者の信頼。インドネシアの信者または地元の宗教団体の数は、数百または数千に達することさえあります。

インドネシア社会の多様性の現実を考えると、国民一人一人の意見、信念、関心は、宗教を含めて非常に多様です。幸いなことに、インドネシア人はインドネシア語という統一言語を持っているため、多様な信念を伝え、お互いの理解を深めることができます。とはいえ、ダイバーシティのマネジメントを誤ることによる軋轢は、必ずしも発生するわけではありません。

宗教的な観点からは、多様性は神の賜物であり、神の意志です。神がそれを望んでおられたなら、神のしもべを均一で同一にすることは確かに難しくなかったでしょう。しかし、彼は明らかに、人類が多様で、部族的で、国家主義的であり、ダイナミックな生活を目指し、お互いから学び、お互いを知ることが望んでいるようです。そこに多様性の美しさがあります。私たちは、インドネシアの人々の多様性に感謝しなければなりません。

多様な宗教と信念に加えて、各宗教には、特に宗教的慣習と儀式に関して、宗教的教えの多様な解釈もあります。一般に、宗教的教えの各解釈には、彼らが実践している解釈の真実性を主張し、信じる支持者がいます。

イスラム教では、たとえば祈りの儀式、断食、ザカート、メッカ巡礼などで、崇拝の儀式にある主要な教えに含まれていても、異なる法律と崇拝の儀式の実施に関するFatwaを与えるさまざまなFiqhの学派が、この多様性は、さまざまな時代、時代、文脈におけるイスラム教の教えの発展とともに現れてきました。そのため、イスラームの伝統の後半には、一定の教え (qath' i) と不変の教え (tsawabit) と、時間と時代の文脈に応じて柔軟で変更可能な (dzanni) の教えがあります。イスラム教以外の宗教には、間違いなく、さまざまな教えや伝統のさまざまな解釈があります。

それぞれの宗教の教えの中で変えられないものと変わるかもしれないものについての知識は、それぞれの宗教の信奉者にとって信じられないほど重要です。真実と解釈の利用可能な選択は両立しません。極端な態度は通常、宗教の信奉者が別の解釈の真実を認識していない場

合に発生します。この文脈では、宗教的中庸は、宗教の視点として使用されることが非常に重要になります。

開かれた民主主義の時代のインドネシアでは、非常に多様な市民の間の意見や関心の違いは、すべての願望がそれに応じて導かれるような方法で管理されています。宗教においても同様に、私たちの憲法は、それぞれの信念と解釈に従って宗教の教えを受け入れ、実践する宗教の自由を保証しています。

わが国のイデオロギーであるパンチャシラは、宗教共同体間の調和の創造と維持を強く強調しています。インドネシアは、文化や宗教の多様性をうまく管理しているという点で、世界の多くの国々の模範となっています。小規模な紛争や社会的軋轢は依然として頻繁に発生していますが、私たちは常に紛争を平和的に解決し、大国としての団結と誠実さの重要性を再認識します。インドネシアは創造主の意志によって多様性を与えられた国です。

それぞれの宗教の教えの中で変えられないものと変わるかもしれないものについての知識は、それぞれの宗教の信奉者にとって信じられないほど重要です。真実と解釈の利用可能な選択は両立しません。極端な態度は通常、宗教の信奉者が別の解釈の真実を認識していない場合に発生します。この文脈では、宗教的中庸は、宗教の視点として使用されることが非常に重要になります。

開かれた民主主義の時代のインドネシアでは、非常に多様な市民の間の意見や関心の違いは、すべての願望がそれに応じて導かれるような方法で管理されています。宗教においても同様に、私たちの憲法は、それぞれの信念と解

釈に従って宗教の教えを受け入れ、実践する宗教の自由を保証しています。

わが国のイデオロギーであるパンチャシラは、宗教共同体間の調和の創造と維持を非常に強調しています。インドネシアは、文化や宗教の多様性をうまく管理しているという点で、世界の多くの国々の模範となっています。いまだに小規模な紛争や社会的軋轢が多発していますが、我々は常に紛争を平和的に解決し、大国としての団結と誠実さの重要性を再認識します。

インドネシアは創造主の意志によって多様性を与えられた国です。

しかし、我々は警戒を怠らないようにしなければなりません。我々を国として分断する最も深刻な脅威の1つは、宗教に基づく紛争、特に暴力行為を伴う紛争です。なぜ？宗教は、どこにいても感情的な内容と高い主観性を伴う偏見の性質を持っているため、ほとんどの場合、信者との感情的な絆をもたらします。狂信者にとっても、宗教は神聖で、価値があり、尊敬される「もの」です。平和で安心できる生活に導く代わりに、宗教的解釈の真実に対する極端な狂信は、信奉者間の敵意と喧嘩につながる可能性があります。

宗教に基づく紛争は、同じ宗教のさまざまなグループまたは学校（宗派間または宗教内）に降りかかるか、異なる宗教のさまざまなグループ（共同体または信仰間）で発生する可能性があります。通常、宗教対立の始まりは、お互いの宗教に対する解釈や理解を非難し合い、正しいと感じ、他の人々の宗教的解釈や見解に抵抗することによって引き起こされます。

我々は、異なる宗教的解釈に起因する社会政治的対立のために、生活が混乱し、場合によっては国家の解体が脅かされているいくつかの国の苦い経験から学ばなければなりません。多様性は、どのような状況においても違いを必要とし、あらゆる場所での違いは常に潜在的な対立を引き起こします。適切に管理され、賢明に対応されない場合、これらの対立の可能性は、各支持グループの異なるバージョンの真実の解釈を擁護する極端な態度につながる可能性があります。

宗教的解釈の主張の違いに基づく紛争の破壊力は、すべての人間の魂の最も深い感情的な窪みに触れる宗教の特性を考えると、確かにさらに強力になるでしょう。実際、論争の的となっている相違点が、人間によって生み出された限られた宗教的解釈の真実に実際に限定されていることは珍しくありません。唯一の最も正しい解釈であり、全能の神だけが所有している究極の真実ではありません。

前述のインドネシアの多様な宗教的状况を管理するには、宗教的節度を促進し、解釈の多様性を尊重し、過激主義、不寛容、暴力に囚われないことによって、宗教生活を遂行する上で調和と平和を生み出すためのビジョンと解決策が必要です。

宗教的節度の精神とは、宗教における 2 つの極端な極の接点を見つけることです。一方では、ある宗教的テキストの 1 つの解釈の絶対的な真実を信じ、他の解釈は誤解であると仮定する極端な宗教的支持者がいます。このグループは通常、超保守派と呼ばれます。一方で、理性を極度に神格化して宗教の神聖さを無視したり、他

の宗教の信奉者にはふさわしくない寛容のために宗教的
教えの基本的信念を犠牲にしたりする宗教家もいます。
彼らは通常、極度のリベラルと呼ばれます。どちらもモ
デレートする必要があります。

したがって、宗教的節度を解決策とするためには、そ
の言葉の意味を正しく理解する必要があります。そして、
この理由で、宗教的節度に関するこの本が書かれていま
す。

さらに、この本の存在は、一方では宗教的価値観を内
面化するための努力、他方では宗教の多様性と宗教的真實
の解釈を尊重するための努力において国家が存在している
ことを強調

することでもあります。宗教的価値観の内面化は、
宗教が常に個人、社会、国家、国家の生活における精
神的、道徳的、倫理的基盤になることを目的としてい
ます。宗教的信念と実践の多様性を尊重することは、
適度な宗教生活を奨励することであり、私たちの国家的
コミットメントを強化することです。

宗教的節度が重要なのはなぜですか？

これはよく聞かれる質問です。なぜ私たち、特にイン
ドネシアの人々は、宗教における穏健さの視点を必要とす
るのでしょうか？

一般に答えは、宗教の多様性を排除することは間違い
なく不可能だということです。節度の基本的な考え方は、
相違点を強調するのではなく、類似点を探すことです。

さらに詳しく説明すると、宗教的節度が必要な主な理由が少なくとも 3 つあります。

第一に、宗教の本質的な特徴の 1 つは、神の創造物の命を奪うことを防ぐことを含め、神によって創造された高貴な生き物としての人間の尊厳を維持することです。このように、すべての宗教は平和と繁栄の使命を担っています。

それを達成するために、宗教は常に人生のさまざまな側面におけるバランスについての教えを提示します。宗教はまた、人命を守ることが優先事項でなければならないと教えています。一人の命を奪うことは、人類全体を排除することと同じです。宗教的節度は人間の価値観を支持します。

過激派はしばしば神の名において宗教的慣行に巻き込まれ、人間的な側面を無視して神の威厳を擁護するだけです。過激派は、「神の名の下に」仲間の人間を喜んで鎮圧しますが、人間性を維持すること自体が宗教の中心的な教えの一部です。

一部の人々は、自分の情熱や基本的な本能の利益を満たすために宗教の教えを利用することが多く、まれに政治的欲求を正当化するためにも利用します。宗教の名の下に行われた搾取行為は、宗教生活のバランスを崩し、極端で過剰なものに傾倒させてきました。したがって、この場合、宗教的節度は重要です。なぜなら、それは宗教的実践を本質に戻す方法として機能し、宗教が人間の尊厳と価値観を維持するために真に働きをするためであり、反対ではありません。

第二に、宗教が誕生してから数千年が経ち、人口は大幅に増加し、多様化、部族的、国家的、多色化し、さ

まざまな国や地域に広がっています。人類の発展と分布とともに、宗教も発展し、広がります。アラビア語で書かれたこれまでの学術的著作は、人道問題のすべての複雑さに対応するにはもはや十分ではありません。

宗教的なテキストも複数の解釈を経験し、真実は枝分かれしています。一部の宗教信奉者は、もはや宗教的教えの本質と性質に固執せず、むしろ彼らが選択したバージョンの真実の解釈に熱狂的であり、時にはその解釈は彼らの政治的利益に一致しています。したがって、競争は避けられません。人間の生活と宗教の複雑さは、インドネシアとアジアだけでなく、世界の他の地域でも、世界のさまざまな地域で発生しています。そこには、宗教紛争による人類文明の破壊を防ぐための宗教的節度の重要性があります。

第三に、特にインドネシアの文脈では、インドネシアの価値観を維持するための戦略として、宗教的節度が必要です。信じられないほど異質な国家として、最初から、国家の創設者は、国家と国家のための1つの形態の協定、すなわちすべての宗教を統一することに成功したインドネシア共和国の統一国家のパンチャシラを伝えることに成功しました。民族的、言語的、文化的グループ。建国の父たちは、インドネシアは宗教国家ではないが、市民の日常生活から宗教を切り離していないことに同意した。宗教的価値観が維持され、地元の知恵と慣習の価値観と組み合わせられ、一部の宗教法が国家によって制度化され、宗教的および文化的儀式が調和と平和と絡み合っています。

それこそが、非常に宗教的で、礼儀正しく、寛容で、多様性と対話できる性格を持つインドネシアのアイ

デンティティです。過激主義と急進主義は、成長を許せば間違いなく私たちインドネシアの価値観の関節を傷つけるでしょう。したがって、宗教的節度は観点として非常に重要です。

前述の 3 つの点とは別に、宗教的節度は、個人の行動だけでなく、コミュニティや組織にも関連する共通の道徳的価値として理解されています。

穏健さは長い間、文明の歴史と世界のすべての宗教の伝統の重要な側面でした。すべての宗教の教えは、宗教に対する最も理想的な見方として、誇張ではなく、2 つの極端な極の間の中間の道を選ぶという 1 つの特異点に言及する傾向があります。

この穏健さの価値観の類似性は、2019 年 2 月 4 日の 2 人の主要な世界的宗教指導者、教皇フランシスコと大祭司アルアズハル、シェイクアフマドエルタイエブとの歴史的な会合を推進したエネルギーとなっています。この会議は人類の友愛に関する文書を作成しました。その主なメッセージの中で、現在の共通の敵は実際には深刻な過激主義（狂信的な過激主義）、お互いを破壊したいという願望、戦争、不寛容であることを強調しています。）、そして人間の間の憎しみ（憎しみに満ちた態度）、それらはすべて宗教の名の下にあります。

さまざまな国での多数の暴力事件は、過激主義とテロリズムが 1 つの宗教だけに限定されたものではなく、どの宗教にも居場所がないことを示唆しています。恐怖と暴力の脅威は、多くの場合、宗教の名の下にある個人の見解、態度、極端な行動の結果です。同時に、正

義とバランスを重視する穏健な態度は、宗教に関係なく誰からでも生まれます。

多元的で多文化的な国として、インドネシアは宗教に基づく紛争を起こしがちです。個人の生活、家族、コミュニティ、そして仲間の人間の生活の両方において、調和のとれた、調和のとれた、平和で、バランスを強調する宗教生活を創造する上で重要な鍵となることができるように解決策として宗教的節度が必要です。

それ以上に、宗教における穏健さの視点と実践は、インドネシアの人々だけでなく、国際社会からも必要とされています。宗教的節度は、極右と極左、超保守派とリベラルな宗教グループに、中立の平等と共通基盤の両方を求め、穏健な社会になるよう促します。

宗教的節度の誤解

モデレートという言葉は、インドネシアの宗教の文脈で誤解されることが多いです。多くの人は、節度のある人は堅実で気まぐれではなく、自分の宗教の教えを熱心に実践していないと考えています。中等度は、他の宗教の信者との宗教的神学的信念の妥協として誤解されています。

穏健な人は、宗教の教え全体を生き方として取り入れることを望まず、生活のあらゆる面で宗教指導者の行動を模倣するため、不完全であるとレッテルを貼られることがよくあります。中等度の宗教家は、しばしば無神経で、思いやりがなく、宗教的シンボルが侮辱された場合などに防御を提供しないと見なされることもよくあります。

人々の間で一般的なもう1つの誤った仮定は、宗教における節度と寛容の価値観を支持することは、リベラルであり、宗教のテキストに明確に書かれている基本的な規範を無視することと同じである。インドネシアの宗教生活では、穏健派はしばしば直面する。正反対に、保守的と見なされ、宗教の教えを固守する人々と。

宗教における穏健さの誤解と汚名は、コミュニティ内での反感の出現と、穏健な、あるいは非難的な中庸とさえ呼ばれることへの抵抗をもたらすことが観察されています。

しかし、穏健さが本当に宗教と対立するというのは本当でしょうか？そして、宗教において穏健さであることは、他の宗教の信条を尊重するために、私たちの宗教的教えの信条を抵当に入れることを意味するというのは本当ですか？

宗教において穏健さであることは、それが受け入れる宗教的教えの本質に自信を持っていることを意味し、それは正義と¹²バランスの原則を教えています、宗教的解釈に関する限り真実を共有しています。

答えはもちろん違います！宗教における穏健さとは、異なる宗教理解や異なる宗教を持つ人々を喜ばせるために、宗教の基本原則や基本的な儀式を妥協

することを意味するものではありません。宗教的節度は、誰かが自分の宗教的教えを真剣に受け止めない理由にもなりません。一方、宗教において穏健さあるということは、それが受け入れる宗教の教えの本質に自信を持っているこ

とを意味し、正義とバランスの原則を教えています。宗教的解釈に関する限り真実を共有しています。

宗教的節度の性質は、それぞれの異なるグループからの開放性、受容、および協力を必要とします。したがって、民族、文化、宗教、政治的所属に関係なく、宗教の個々の番号は、お互いに耳を傾け、宗教的理解の違いを管理および克服するための互いの能力を実践することを学ばなければなりません。

したがって、この本は、上記の目的のために書かれているだけでなく、宗教における穏健さの意味をめぐる誤解を明らかにすることも目的としています。

第1章

宗教的穏健さの概念研究

A. 穏健さの意味及び限界

Moderasi（穏健さ・節度）とは moderatio というラテン語が起源で、節度を持つ（過ぎることなく不足もない）という意味である。その言葉には自分自身を（行き過ぎやや不足から）コントロールするという意味も含まれる。インドネシア語大辞典（KBBI）によると、moderasi（節度・穏健）には二つの意味があり、1. n 暴力を抑える 2. n 極限状況を避けるとある。「あの人は穏健派です」と言われると、あの人は態度が自然で平凡であり、また過激な思想をもたないという意味になる。

英語では moderation（穏健・節度）という言葉は average（平均）、core（中心部）、standard（標準）、あるいは non-aligned（一方の側につかない）という意味合いで頻繁に使われている。一般的には穏健さとは個人として他人と接する時も国家機関に関する場合でも、信念や道徳及び性格のバランスのとれた状態である。

アラビア語では、穏健さは wasath あるいは wasathiyah という言葉が知られており、tawassuth（真ん中）、i'tidal（公平）及び tawazun（バランスがとれる）

という言葉と同じ意味を持つ。Wasathiyahという原則を適用する宗教的穏健さの概念研究人はwasithとよべる。アラビア語ではwasathiyahとは「最も良い選択」という意味も含まれる。どのような言葉が使われても同じくひとつの意味を表し、「公平」である。このような状況では、様々な極端な選択の中で中道を選ぶという意味である。Wasith という言葉はインドネシア語にも既に借用され、三つの意味を持つ'wasit'という言葉になった。それは1)仲介者(例えば貿易やビジネス);2)人間関係にトラブルのある人の仲裁者(メディエーター);また3)試合でのリーダーである。

アラビア語の専門家によると、wasath という言葉には「対象に適切で全てにたいしてよしとされること」という意味も含まれる。例としては、「慈善家」とはケチと浪費の間の態度であり、「勇気のある」とは臆病者(al-jubn)と無謀(tahawur)の間の態度という意味を持ち、その他のアラビア語での例も多数ある。

穏健さの反対の言葉はやりすぎる、またはアラビア語でいうとtatharruf、それは英語で extreme (過激な)、radical(急進的な)、また excessive (過度の)という意味が含まれる。Extreme (過激な)は「やり過ぎた;端から端まで行く;来た道を戻る;逆方向の道あるいは行為をとる」という意味も持つ。インドネシア語大辞典(KBBI)では、ekstrem(過激な)は「一番端;一番高い;一番固い」という言葉が定義された。

アラビア語ではextreme (過激な)と同じ意味を持つ言葉が二つあり、それは al-guluw 及び tasyaddudである。Tasyaddud という言葉はAl-Qur'an (コーラン) では

逐語宗教的節度 訳されていないが、他の語形のsyadid, syidad, dan asyadd の派生語が見られる。この三つの言葉は語根を指すときに限り、「固く、厳しく」という意味を持ち、extreme や tasyaddudという語義はもたない。宗教生活の場合は、「やり過ぎる」は過激な態度を持つ人、また宗教法の定めや制限を越えるということを目指す。

穏健さを分析すると、中心または軸へ向かう端からの動き(求心性)のようである一方、過激思想は逆に中心または軸から離れ、一番外側に向かい、過激である(遠心性)。過度に外側に止まらず、中心に向かう動的運動のある振り子時計のようである。

この分析に基づき宗教生活における穏健さを定義すると、あらゆる過激な行動の中で、中庸的立場や態度を取り行動することとなる。一方過激思想とは宗教の教えや教義の制限を越える態度や行為である。このことから、宗教的穏健さとはいつで中庸的立場をとる見識や態度、行為、また公平で宗教生活においては過激ではないということになる。

宗教的な見方、態度や行為が穏健であるか過激であるかを見分けるためには、適切な尺度や、定義づけまた指標が必要とされる。その尺度は信頼できる情報源、例えば聖典や憲法、地域文化財、双方の合意に基づくコンセンサスに基づかなければならない。

違う宗教を持つ人の信仰生活を尊重すること(寛容)、双方のバランスの取れた状態を指す。中庸で宗教的実践のバランスをとることにより、過激さや急進的で革命的な宗

教生活の態度は避けられる。前述のとおり、宗教的
穏健さは宗教生活において過激的な両極を為す超保守派
または極右と、自由主義または極左の存在を緩和するこ
とができる。

宗教的穏健さは現実的に、地方レベルから国内外の
広いレベルまで、寛容さと協
宗教的穏健さとはいつも
真ん中の立場をとる見
方、態度や行為、また、
公平で宗教生活において
は過激ではないというこ
ととして理解することが
できる。

調関係を築くキーとなる。
宗教生活における過激思想
や自由主義を断ち、穏健さ
を選択することは文明的な
社会を保ち、平和を築くた
めの重要なキーとなる。こ
の方法でそれぞれの宗教の
信者は他人を尊重し、多様
性を受け入れ、共に調和のとれた平和な社会で暮らす
ことができる。多文化社会のインドネシアにおいては宗
教的穏健さは選択の余地なく必要不可欠なものとなっ
ている。

B. 穏健さの基本原則：公平でバランスを保つこと

宗教的穏健さの基本原則の第1番目は二つの物事の間
で、いつもバランスを保つことである。例えば思考力と
啓示、肉体と精神、権利と義務、私利と社会的利益、し
なければならぬこととボランティア、聖典と宗教家の
合意、理想と現実、過去と将来の間でバランスをとるこ
とである。それで宗教的穏健さを保つためには、上記の
それぞれにおいて、考え方も態度も、また行動において
もに公平でバランスをとることが重要である。インドネ

シア語大辞典 (KBBI)によると、adil(公平)とは 1) 偏見のない/誰かの側につかない; 2) 真実の味方; また、 3) きちんとする/勝手にしない となっている。“Wasit”(リフリー)という言葉は試合を統括する人物を指し、この場合では、偏見のない真実を追求する人物という意味を持つ。

二つ目の原則で「バランスをとる」という言葉は、正義や人間性、画一性を重んじる見方、態度、約束を示す。バランスをとる傾向があるというのは自分の意見を持たないわけではない。バランスをとる人はいつも正義の味方になるため、厳しくはするが、激しいわけではない。どちらかの側につくと言っても他人の権利まで奪って危害を及ぼしたりすることはしない。バランスをとることは物事を適度に遂行し、やり過ぎず不足でもない、保守的でも自由主義でもない一つの見方と言える。

Mohammad Hashim Kamali(2015)は 穏健さ(wasathiyah)の概念において、バランス(balance)や正義(justice)という原則は宗教生活をするときに過激な思想を持ってはならず、一致点を見つけなければならないと説明した。Kamaliによると、wasathiyah はイスラム教徒に忘れられがちものだが、大切な要素であり、イスラム教の教えの本質となる。

穏健さはイスラム教だけでなく、他の宗教でも教えられている。さらに、穏健さは社会の調和を築き、人や家族、また社会の中で幅広い人間関係のバランスをとることができる善行である。

正義とバランスについて、人には三つのメインとなる性格があると、この二つの価値観を持ちやすくなる。

それは知恵 (wisdom)、純粹 (purity)、と勇氣 (courage) である。つまり、宗教的穩健さはいつも中道を選び、また宗教に関する幅広い知識を持てば実現しやすくなる。それで、人は知恵を使い、誘惑に負けず、負担のかからない誠実な態度を持ち、自分の真実の解釈に対してわがままではないため、他人の真実の解釈を認識し、科学に基づいて自分の意見を言うことができる。他の定義では、宗教的穩健さが満たされたと言えるようになるために三つの条件があり、それは幅広い知識をもち、行き過ぎないように感情をコントロールし、それらにいつも気を付けること。簡単にいうと宗教的穩健さの三つの条件の定義は三つの言葉で言える。それは、豊富な知識、徳が高いこと、そして用心深さである。

さらに詳細を述べると、宗教的穩健さを実践するためには宗教的儀式に関する広範囲な知識をもたなければならない。宗教的儀式を軽々しく受け止めたり、簡素化したりせず、礼拝の規範に関する広範囲な知識を持つことにより、他の方法を選ばなければならない場合でも、問題が少なくなる。この方法は宗教生活の簡素化の原則を重視し、できる限り行われる。信者は実際に聖典を総合的、コンテクスト的に理解しなければならないため、このような状況にするのは結構難しい。

例として、近年の麻疹・風疹のワクチン接種があげられる。感染拡大を防止するために Measles Rubella (MR) ワクチン接種の必要性が言われたが、宗教団体はワクチン接種を拒否した。それは宗教の規律に反するからという理由であった。しかし2018年のMUI(インドネシア・イスラム有職者評議会)Fatwa番号33では、緊

急事態として正しく証明すること(syar'iyah)、権威ある専門家の見解、更にハラールで清浄なMRワクチンが現時点では開発されていないという事実に基づき、MRワクチンはmubah(許容される行為)とされた。宗教的な配慮により、健康の重要性に対して穏健になれるよう、宗教家の多様な意見からなる広範な知識が必要とされる。

以上を書いてある条件を満たした宗教知識により信者たちは多様な状況を受け入れやすくなる。これこそが宗教的穏健さの本質といわれる。複合である上に多文化社会のインドネシアにとっては、各人が多種の宗教、信仰、人生哲学、知識、様々な風習や土地の習慣などの多様性に対する意見を交わすことができるように宗教的穏健さは非常に大切なことである。

宗教的穏健さの中で信者はそれぞれ決して自己に引きこもることなしに、排他的でなく寛容的で、社会に溶け込み、適合し、さまざまなコミュニティと仲良く、いつも何かを習ったり、教えたりすることができる。宗教的穏健さは多種の宗教や宗教的解釈を含む多様性に対して、やり過ぎや過激思想を持たず、公平でバランスをとり、双方の合意の中で暮らせるように各宗教の信者が助けあう。

国民生活においては国家独立の初期に、穏健さという原則こそが様々な考えや政治的利益、異なった宗教や信仰を持つ人々を独立運動の中で統一することができた。全ての人物は共に中心に向かっての一致を見出し、双方の合意としてインドネシア共和国という国の形態を受け入れた。これはインドネシアが国家として成立するために最終的に受け入れた、国の形態である。

ムスリムの学者、Ismail Raji al-Faruqi (w. 1986)はバランスのとれたこと(tawazun)あるいは“the golden mean”という意味の一致点を見出して、結合する努力をしながら得しない過激な2極から逃れる行為として詳細を詰めた。バランスがとれた行為とは自己中心性を全面的に避け、自分自身の幸せを追いかける上で、みんなの幸せを守ることである。その他諸々、いつもバランスのとれた中道をとる(Kamali 2015: 31)。

現代のような破壊的技術や情報が氾濫する時代では、各人が情報過多を経験し宗教的穏健さにおける公正な振る舞いやバランスの原則は情報の管理やフェイクニュースの排除に役に立つ。宗教的穏健さは他人や他の団体の宗教観に配慮せず、個人や団体の一つの宗教観を盲信することなく、狂信しない。知恵を使って考え、行動することを教えている。

C. 多様な宗教の風習における穏健さの創設

各宗教は唯一の神、創造主なる神に徹底的に服従することを説いている。神の奴隷になることは生活の中で心身ともに神の指示に従うことにより実現される。人間は何者からも奴隷にされず、何者をも奴隷にしない。すべての者は神様だけの奴隷となる。ここでの本質は神によって創造された生き物同士、人と人との正義の価値だけである。

優れた思考能力を持って創造された人間は他の生き物をリードし、神の奴隷として地球の管理をすることを命じられた。社会的利益が得られるように地球を管理す

る必要がある。これこそが宗教が説いている最強で一番大事な人生のビジョンである。

国・国家はこのような人間の任務の範疇になる:正義を持ち、裕福で、平和な国家を形成するという共通の利益のために、人間はどうやって地球を管理するのか。各宗教では国を愛することは信仰の一部であると説いている。宗教と国がバランスを保つことは国の利益のために大きな財産となる。

宗教的穏健さはインドネシアの利益を追求するために、最適な価値観や実践となる。穏健な精神を持ち公平でバランスをとることは我々の多様性を管理するキーである。国・国家を誠実に築き、インドネシア国民が共に平和で安心できる暮らしをするために「権利」と「義務」のバランスを保つこと、これを実現できたら、国民は完全なインドネシア人となり、宗教を完全に実践する人間ともなる。

前述のとおり穏健さの教えはある一つの宗教のものだけでなく、さまざまな宗教の習慣や文化の中にもある。公平でバランスをとることは前に説明したとおり、あらゆる宗教の教義の中で非常に尊重されている。残酷な/不公平な行為を勧めたり、やり過ぎることを説いている宗教の教義は一つもない。

意味を説明したとおり、Wasathiyahという教えは宗教の教えの一つの特徴及び本質となる。その言葉は少なくとも三つの意味を持つ。一つ目は真ん中、二つ目は公平、三つ目は最高という意味である。真ん中に立つ態度は公平な態度及び最高な選択を表すことだから、この三つの意味は単独あるいはお互いに無関係ではない。

日常生活において分かりやすい例としては、“wasit”という言葉がある。それは試合において仲介に入る仕事であり、いつも公平で当事者たちのために一番いい判定を下すことが求められる。他の例として、浪費とケチの中庸として慈善家がいいこととされる。また臆病と無謀の中庸で、勇気のあることもいいこととされる、などなど。

“Wasatha”という語は「選ばれる」「最高な」「公平な」「謙虚な」「穏健な」「しっかりする」「教えに従う」「世間的な物事でも来世的な物事においても過激ではない」「物心両面においても過激ではなく、両方の間にバランスを取ると」というように幾つかの解釈がある。詳しくいえば、wasathiyah とはいいことで過激な2極の間に立つということである。したがって、wasathiyah という概念を日常生活で実践すると、人は過激思想を持たない。

様々な研究において‘wasathiyat Islam’とは、‘justly - balanced Islam’（バランスの良いイスラム）、‘the middle path’（中道）あるいは‘the middle way’ Islam（中世の道のイスラム）と頻繁に解釈され、イスラムは仲裁したり、バランスをとる役目をしたりする機能となる。この言葉は公平性及びバランスをとること、また宗教生活においては過激派に陥らないための中道の大切さを示した。従来 wasathiyat という概念は 穏健さ (tawassuth), 寛容 (tasamuh), バランスをとる (tawazun), 及び 公平 (i’tidal) という原則を反響することとして把握される。それで ummatan wasathan という語は‘a just people’ あ

るいは 'a just community'、公平な社会あるいは公平なコミュニティという意味も持つ。

Wasath という言葉も khiyar (選択あるいは選ばれたもの) という意味を示すのに普段アラブ人が使用している。「彼/彼女は wasath の人です」と言われると、その人の kaum の中で選ばれた人のことである。それで、ummatan wasathan と言われるイスラム教徒はいつも仲介に入ったり公正に振る舞ったりする選ばれた信者になると期待する。個人として beribadah の場合も社会人として社会的交流する場合もイスラムはいつも穏健な態度をとることを説いている。この教えは非常に Al-Qur'an (コーラン) 及び 預言者の hadis (言行録) というイスラム教の教えの主な源の中心である。例えば、一つの韻文はこのように記される：

「このようにわれはあなたがたを中正の共同体[ウンマ]とする。それであなたがたは、人びとに対し証人であり、また使徒(ムハンマド)は、あなたがたに対し証人である。」(QS. al-Baqarah [2]: 143).

その韻文はムスリムのコミュニティにつく wasathiyah という特性は社会や他のコミュニティとの関係において位置付けなければならないことを示す。個人、またはムスリムのコミュニティは穏健さ及び人間性の価値観に対してコミットメントを持てば証人 (syahidan) といえる。

したがって、wasath という言葉を穏健さという概念として理解できれば、預言者ムハンマド SAW (に平安あれ) は全ての行動が正当であることを証明する人物であり、見習うべき模範的な人物とされると同時に、他の

共同体にも模範になれるようにイスラム教徒は証人になる上、他人に目撃されたりすることが求められる。

穏健さに対する個人の責任の重さや軽さは、正義という価値観に対してどこまで責任を果たすかによって決まるだろう。穏健でバランスをとるという態度を持てば持つほど、人は公正に振る舞うチャンスが増える。それに対して、穏健でなく過激派で偏見のある態度を持てば持つほど不公平に振る舞うチャンスは減る。

これこそイスラムの習慣において預言者ムハンマド SAW（に平安あれ）は最も良い道として信じられる中道をとるように勧めることを示した。あるhadis(言行録)で、預言者はこう言う：

「事柄の中で、中道をとるのは最優秀である」

インドネシアでは、wasathiyah あるいは 穏健さの合理性は三つの柱で詳しく説明される。それは穏健な思想、穏健な働き、そして穏健な行為である。

一つ目の柱に関しては、穏健な宗教思想は明文化されているものとされていないものを一体化する能力によって印づけられる。聖典のみを注視し、聖典の記述にのみとら

われるのではなく、実生活を含めダイナミックに言い交わすことができる宗教思想である。穏健な人の宗教思想は聖典にとらわれすぎず、同時に自由すぎて聖典をないがしろにすることもしない。

二つ目の柱は働きにおける穏健さである。宗教の勧誘の中で善行を推奨し、悪行から遠ざかるように説く。力を持って悪行を戒めるべきではない。

三つ目の柱は宗教の実践や習慣における穏健さである。それは宗教とその土地の風習や文化との関係を強化することである。宗教が文化と対立するのではなく、オープンに言い交わして新しい文化をつくることである。

穏健さの合理性は当然イスラムの風習だけではなく、キリスト教のような他の宗教のものでもある。インドネシアでのキリスト教はインドネシアの文化に適応しながら発展していったという特徴がある。インドネシアに適したイデオロギーの解釈により、インドネシアの多文化社会の一部となっていた。

Pancasilaには民族、宗教、人類、団体による差別はしない、国民として法律により平等な保護を受け、同じ権利と義務を持つという原則が謳われている。キリスト教徒はPancasila及び1945年インドネシア共和国憲法(UUD 1945)により保証された信仰の自由の中での信仰生活が保障されている。

実際、宗教的穏健さは外面的に宗教と宗教との建設的な関係を築くばかりでなく、内面的に一つの宗教の中にある様々な宗派との調和を築くのに大事である。宗教の内部の対立は外部の対立よりも決して軽くはない。したがって、全ての当事者を巻き込み、役目を最大にする戦略的なステップを通して内面的な宗教的穏健さを成長させるのも大切である。

宗教的穏健さ是一部のキリスト教徒の教義の解釈における過激思想を正す役割をはたしている。宗教的穏健さを推進する一つの方法としては宗教と宗教との交流、また信徒内でも宗派と宗派との交流をできる限り行うことである。

キリスト教徒にとって信仰の中心となる聖書の中には、イエスは平和の君ということがどんなに多く語られているか。聖書の中には、イエスが危害を加えたり乱暴な行為をしたり、戦争をしようと人を勧誘する文は一つもない。聖書の中では、地球上の平和を実現するための将来の目標を説く文は少なくない。平和というコンテキストを話題にするときに聖書の中で使用されるキーとなる言葉は「自由」「権利」「法則」「平和」「赦し」「誠実」「正義」「真実」である。

宗教的穏健さは教会は「信念、希望、愛と慈悲の集会である」と自ら主張したカトリック教会の視点に見ることができる。この三つの視点は基本的に一つで、基本的信念を持つ人の基礎的な態度である。信念は人生を動かし、希望に基礎をつけ、慈悲で示される。この三つのことは一つになりながらも、全く同じわけではない。

普遍的教会は第二バチカン公会議で、他の宗教との関係を築くために新しい視点での立案を行った。第二バチカン公会議は近代史の中で普遍的な人類愛を考える重要な出来事となった。「ノストラ・アエタテ」(Nostra Aetate)」という教令を出し、その中で「カトリック教会は他の宗教が正しく清浄なことを全く拒否しない」と記した。

「ノストラ・アエタテ」の教令を通して教会は宗教的多元主義を合理的に認め、新しい歴史の段階を創り上げ、キリスト教もほかの宗教の中に開き始めた。インドネシアの教会では、国家の強い人類愛に対して宗教同士の「違い」を認識しながらつなぐために強固な橋を架けることが、最重要課題とされている。そのためには宗教

を超えた対話が不可欠で、対話を通して頻発する主教上の対立が解決していくと考えられている。

インドネシアの宗教地図は多様な宗教が混在していることを示している。それぞれが寛容で調和のとれた生活を営み、互いに影響しあっている。時には対立しながらも、その関係性の中で成長を遂げている。直接的な関係だけでなく、言語や文化を通して影響しあっている。一つの宗教で使われる言葉や概念が、他の宗教でも使われることがあるが、往々にして意味や定義が異なる。他の宗教を知り認識することは、宗教間の良い関係を保つための対話に役立つだけでなく、自分の宗教を改めて見直す機会にもなる。

第二バチカン公会議により、カトリックと他の宗教との対話が促進され、関係性が前進した。カトリック教徒は「社会的価値の中で、自分たちが持つモラルや心の豊かさを認識し、それを守り成長させ、他の宗教の信者と協力し、対話を通して賢明で慈悲深く行動すること」を指導された。(NA.2)。第二バチカン公会議が行われた後では、宗教を超えた対話がいたるところで行われるようになった。

1991年の公文書、対話及び官報には「第二バチカン公会議の決定は、他の宗教の風習を忠実に守る個人の信仰生活だけでなく、多様な宗教の風習そのものを肯定的にはっきりと認めている」とある。第二バチカン公会議は「教会のフェローシップの外にも神聖化及び真実の要素は多数ある」(LG.8)と強く言う。それで対話は宗教と宗教との良い関係という意味にしか限らない。対話では、キリスト教徒でも他の宗教の教徒でも全ての人を

Allahへの信仰を深めようと勧誘する。他の宗教の集会では、違うからこそ人々が実際の信仰、信念の方向を見つけるように、決まりきった不活発な生活から起こされた。

カトリック教会では、「穏健な」という言葉は一般的に使われない。使用されるのは「原理主義者」及び「伝統主義者」（カトリック教会では改革に対する拒否反応という意味で使用される）に対する「寛容な態度」である。カトリック教会で最も大事なものは第二バチカン公会議である（1962-65年；ほとんどの司教—ほぼ3000人—が集まった）。その公会議はカトリック教会内部に対する定義やオープンなキリスト教あるいはより「穏健な」キリスト教への長い旅を承認した。

ヒンドゥーの風習の中の、宗教的穏健さは霊の根源にあり、中道は数千年前まで遡ることができる。それは以下の4つの時期からなっている。サティヤ・ユガ（Satya Yuga）、トレーター・ユガ（Treta Yuga）、ドヴァーパラ・ユガ（Dwapara Yuga）、そしてカリ・ユガ（Kali Yuga）です。各ユガの中でヒンドゥー教徒は宗教の教えを穏健さの形として適応させてきた。時代の困難を乗り越え、時代の特徴と宗教の教義をうまく適応させるために、穏健さを避けることはできず、歴史の中で刻まれてきた。

近現代インドネシアのヒンドゥー教徒が行う宗教儀礼はプジャ・トゥリサンディヤ（Puja Tri Sandhya）及びパンチャ・スンバ（Panca Sembah）である。1960年にParisadha（最高評議会）が建てられたときから、両方ともインドネシアのヒンドゥー文化を築く主軸となってい

る。この二つの神学は他の多数のヒンドゥー教の実践と関連を持っている。芸術や儀式はプジャ・トゥリサンディヤ及びパンチャ・スンバを活性化する助けとなっている。

プジャ・トゥリサンディヤ及びパンチャ・スンバでは、神は最高の崇拝対象となる。さらに先祖崇拝も先史時代から守られている。インドネシアのヒンドゥー教徒の崇拝の習慣から、主な神々及び自然を排除することはできない。Parisadhaの開催前はヒンドゥー教徒の崇拝で目立ったのは祖先崇拝だったが、Parisadhaの後には真実の神を見つけ出すことが信仰の対象になった。しかし、先祖崇拝はヒンドゥー教徒の中では信仰の実践であり、近代はこれを解決するために、コーチングモデルのSa Dharmaあるいは六つのDharmaが立ち上げられた。ダルマ・トゥーラ(Dharma Tula)、ダルマ・サダナ(Dharma Sadhana)、ダルマ・ヤトラ(Dharma Yatra)、ダルマ・ギータ(Dharma Gita)、及びダルマ・シャンティー(Dharma Shanti)である。その上でダルマ・ギータ(Dharma Gita)はインドネシアのヒンドゥー教徒のコーチングモデルの一つとなっている。

宗教的穏健さはヒンドゥー教徒が信仰生活の中で個々の自覚を高めるために用いられる。従来ヒンドゥー教徒は共同で宗教実践を行うことが多いが、宗教実践は共同でも個々人でも必要とされている。近代では複雑な人間関係の中で、人は様々な問題を抱え、宗教はその問題に解決策を与える役割を担っている。社会の中での孤独感や差別に対しては、個々が信仰を高める必要があり、

神の聖句を暗唱することは、個々人ができる宗教実践である。

個人的な宗教実践では普段、より瞑想的な宗教の教えの実践を優先しなければならない。近代に似ているといわれるカリの時代に、邪悪な性格が全ての人の中にも染み付いた。人は宗教に興味をもたず、財産、権力、女性に興味を示した。カリ時代の特徴に適合し、内向的な人は瞑想的な宗教実践を行った。一方、社交的な信者には共同での宗教実践が提供された。この道全ては人の心に莫大な満足感を与えた。

宗教実践はサティヤ・ユガ時代から何回も穏健さを経験した。Parisadhaは一般大衆が行う宗教の教えの実践やプジャ・トゥリサンディヤ及びパンチャ・スンバが行われた後で積もった宗教実践に満足していないようである。それで新しいプログラムがつくられた:それは将来の社会の社会動に直面するヒンドゥー教徒を準備させる努力とするグランドデザインという。その中には穏健さのプログラムが含まれる。

もちろん、グランドデザインで創始された穏健さは以前に比べてより複雑である。その穏健さは政治、社会、文化、国防を築く側面でヒンドゥー文明を築く枠組みに沿って行う。宗教実践を近代性と応用するため、この穏健さはより複雑である。残念なことに、穏健さは政治的関与が求めることだから、この先、ヒンドゥーの政治路線はなくなる。マハトマ・ガンディーの言ったとおり、政治と宗教は一つのものである。

宗教的穏健さに関して、最も大事なヒンドゥーの教えはスシラ(susila)/行儀のいい、それはどうやって人

間同士の関係を保つかであり、福祉が創造される三つの理由の一つである。愛情は全ての宗教の穏健さにおける中心となる。愛情は全ての事柄/様相で実現できる。つまり、ヒンドゥー教徒はインドネシア国民協議会(MPR RI)の決定となった国の四つの柱(パンチャシラ(Pancasila)、ビンネカトウンガルイーカ (Bhineka Tunggal Ika)、インドネシア共和国、そして1945年インドネシア共和国憲法(UUD 1945))を徹底的に支持する。

仏教の習慣に穏健さという教えの本質を見つけることもできる。仏のさとりはガウタマ・シッダールタ(Sidharta Gautama)からのさとりである。ガウタマ・シッダールタ(Sidharta Gautama)は仏教の教師であり、創始者でもある。そして王様の子として生まれた王子でもあった。ガウタマ・シッダールタは四つの誓願を立てた。それは生き物全てを助ける努力をし、世俗的なものに対する欲望全てを拒否し、ダルマを習い、それを全心全霊で打ち込み実践すること、また完全なさとりを達成する努力をすることである。

仏教における神はいくつかの名で呼ばれている。それはマハヤナ宗派のタタガタガルバ(Tathagatagarba)、トリダルマ宗派のティアン (Thian)、日蓮宗宗派の南無妙法蓮華經 (Nam-myoho-rence-kyo)、マハヤナのAisvarika宗派の本祖仏(Sang Hyang Adi Buddha)というのがインドネシアの仏教徒が普段呼ぶ神の名である。仏教における神は完全な虚しさである。御恵みを与えたり世界を管理したりすること、またその他の仕事は天帝たちと菩薩(Bodhisattava)が行う。この天帝たちは悲惨さ

を経験した普通の人間だが、神聖なものであり、永遠に生きることはないが、長生きする。(編集チーム、インドネシアにおける様々な宗教と信仰をもっと知る百科事典(Tim Penyusun, Ensiklopedia Mengenal Lebih Dekat Ragam Agama dan Kepercayaan di Indonesia, 2018:40)

止まることのない技術の進歩は、全ての人類の幸せのための存在だと意味づけなければならない。「一生成仏」(Isyo Jobutsu)と「広宣流布」(kosenrufu)という仏教の将来の目標には、「全ての生き物の幸せであり、全ての生き物を幸せにする」とある。したがって、このような様々な進歩は目的ではなく、人間にも世界にも幸せを与えるために最大に利用しなければならないツールやメディアに過ぎない。

仏の教えによると、宗教の精神はメッタMettaであり、それは人間の価値に基づく平等な愛と慈悲である：寛容、社会的連帯、平等、そして非暴力。仏教徒の生活は愛情、寛容、平等でつづける人間の価値の上を歩む。ブッダダルマ(Buddhadharma)は2つの過激的な両極を非常に避ける仏教徒の精神性の大切な様相、「中道」である:苦行(attakilamathanuyoga)及び甘やかすこと(kamalusukhalikanuyoga)。ブッダダルマは永遠の幸せ及び知恵を最後の目標とする清潔への精神性の道である。

ブッダダルマの中道はNirvana永遠の幸せ、人生の最後の目的を達成するために、欲望や利己主義に基づくdukkhaを消す一つの方法である。アヒムサ(ahimsa)という概念はヒンドゥー教の宗教的精神となり、暴力を使わない原則を教えるーマハトマ・ガンディーの戦いの指

針としてずっと使用されたのと同じである一。この時点では、全ての宗教の教えの概要は一点を最後の目標とした:中道、あるいは穏健さである。

宗教的穏健さは儒教の風習にも根付いた。Junzi（信仰を持ち、徳の高い）の儒教の信者はこの人生をyin yang という目で見ると。Yin yang はdaoで生きたい儒教徒の哲学、思想、精神性となるからである(Sendana 2018: 129-132)。Yin yang は過激ではなく、真ん中の行為である。何かが足りないのは何かが多すぎるのと同じく、悪いことである。

この「真ん中」とは原則なしの行為ではなく、原則にしっかりと従う真ん中の行為である。愛と慈悲及び人間性の味方になるという原則(ren)は他ではなく正義、また真実 (fyif) に限られる。味方になるというその原則においては、信仰を持って徳の高い人間はいつも礼儀が正しく(li) 賢明(zhi)なので、信頼できる人間 (xin) 及び勇気がある(yong)人間となる。

Mengzi は“真ん中の行為ができる人はできない人を教えるべし。上手な人は上手ではない人に教えるべし。それで人は賢明な父と兄弟を持って幸せだ。真ん中の行為ができる人はできない人を、上手な人は上手ではない人を、賢明な人は賢明ではない人を無視すれば、実際は1インチの差もない」と言った。(Mengzi IVB: 7)

儒教における中道の行為は聖なる王たち、古代の預言者、その他の聖なる人物たちによって教えられ、模範を示す行為であり、そして預言者Kongziによって完了された。中道の行為は一つの道のりにしかつかまない行為ではなく、様子を考慮する能力が必要とされる。

対話と協力が築かれたのは両方の中に巻き込まれた人々は中道の行為をして過激ではないのである。対話と協力において、中道はいつも必要とされる。中道は必ず合意に達するわけではなく、同意しないという合意も「中道」である。中道は真ん中の行為で築かれた。ずっと多様性を受け入れる努力や善行を優先したり、欲望や利己、頑固な態度や他の人を倒したり支配したりすることをコントロールしたりする私たちの能力で真ん中の行為が築かれる。

“幸せ、怒り、悲しみ、好きな気持ちが現れる前は「真ん中」と言われ、現れた後の時でも「真ん中」の限りの中にあるのは「調和」と言われる；真ん中こそが世界の大きな原理であり、そして調和こそがDao(聖なる道)を歩む方法である。(Zhong Yong 本編: 4).

我々は人間として個人的な存在だけでなく、社会のなかでの一員として役割も担っている。肉体的存在ばかりでなく、精神的存在でもある。人間は永遠の存在ではないため、何かをするための時間には限りがある。そして年齢的にも限りがある。場所や環境にも影響される。人間は理性的な側面だけでなく、感情的な側面も持つ。yin yang は神の法則だから yin yang法則からは逃げられない。

人間としての我々は限りがあるから限りを知る必要があり、限りに対する自覚を持つことで、建設的な協力につながる。したがって他の人間を支配しようとすることは我々の人間性を示す行為ではなく、それは人間性を越えたことである。神の法則に従い、人間としての限界にとどまれば、調和のとれた社会を築くことができる。

調和こそ世界におけるDao(聖なる道)を歩む人間の生き方である (Zhong Yong 本編: 5)。

戦争、植民地化、天候の変化、過激思想、自爆テロ、貿易戦争、私利私欲、他の人や国を支配する意欲、洪水、対話、対話の放棄、冒涇、ヘイト発言、他人を否定したり嫌ったりすること、自分が正しい、他人は正しくないという考え、捏造、嫌っていることにあるいいことも気に入ったことにある悪いことも知らないこと、などなど、のように中庸の行動や調和をとることができず、社会的正義(福祉)、調和、世界の平和から遠ざかることは、中道を取らない我々の失敗である。

根元と末節、始まりと終わり、そしてさっきのことと次のことを知ることはdao に近づいたことを示した行為である。「それぞれのものには根元と末節があり、各事柄には始まりと終わりがある。さっきのことと次のことのどちらかを知っている人はdao(聖なる道)に近づいた (Zhong Yong 本編: 3)。真ん中の行為はその行為を表すものである。

他人の意欲をわかって、把握しようとするのはもちろん犠牲が求められ、時には少ないこともあるが、犠牲的行為は調和的な関係がとれるようにしなければならないことである。預言者Kongziは「一緒に習うように勧誘できるのは一緒にdao (聖なる道)を歩むように勧誘できるわけではない。一緒に聖なる道を歩むように勧誘できるのは一緒にしっかりとるように勧誘できるわけではない。一緒にしっかりとるように勧誘できるのは概念と適応できるわけではない」と言った(Lunyu. IX: 30)。

儒教の風習において調和が得られたのは、様々な違いがあるからである。しかし調和をとるために、異なるそれぞれのものはピッタリと適切で、釣り合いをとらなければならない。@roporsio-nafl。

Zhong あるいは真ん中とは量、時間、温度、距離、速度など、全てのものがピッタリと適している。Zhong とは速すぎることもなく遅すぎることもない、遅すぎる

インドネシアは合成的に結構強い文化的根本も、また宗教的穏健さの創設とする社会関係資本も持つ。

こともなく早すぎることもない(時間)、多すぎることもなく少なくすぎることもない(量)、高すぎることもなく低すぎることもない(

位置)、遠すぎることもなく、近すぎることもない(距離)、厚すぎることもなく薄すぎることもない(形)、熱すぎることもなく冷たすぎることもない(温度)、などなどと意味付けられる。

つまり、Zhong とはピッタリと適切した全てのもの、あるいはピッタリと適切な時間、場所、サイズだという意味である。したがって、Zhongは時間、場所、サイズという要素に関わり、あるいはある言葉で言われた「時間ピッタリに」である。したがって Zhongには調和を達成する機能がある、あるいは様々な違いで対立することを調和状態にさせる機能を持つ。

以上がインドネシアにある様々な宗教の風習における穏健さの創設である。この時点では、インドネシアは合成的に結構強い文化的根本も、また宗教的穏健さの創設とする社会関係資本も持つ。

D. 宗教的穩健さのインディケーター

前に述べたとおり、穩健さは端から動き、中心部あるいは中核に向かう(求心性)傾向がある、時計の振り子のようなものであり、静止したことはない。穩健さという行為は基本的には、動的な状態でいつも動いている。穩健さは基本的に社会的な生活においてずっと行われている闘いのプロセスである。穩健さと穩健な行為はいつも左右の価値と競争しないとイケない。したがって、宗教的穩健さを測定するためには価値の闘いや競争はどのように起こったかを言い表せないといけないのである。

時計の振り子の対比はこのように説明できる:個人の宗教的行為は二つのことに非常に影響される。それは思考力と啓示である。思考力の側に過度につく行為は左翼的過激思想とされ、聖典を無視する行為をもたらすことが少なくない。一方、聖典に対し宗教解釈の絶対的な真理しか受け入れない場合は聖典に対する文字通りの理解も保守的な行為をもたらす。

穩健な人は双方と妥協しようとする。思考力を利用すれば左に動けるが、その位置に留まることはなく過激ではない。コンテクストを常に理解して聖典に導かれるために右にゆれる。

それで、宗教的穩健さのインディケーターは何か。

我々はある宗教的な見方、態度や行為は穩健なのか、逆に過激なのかを判断するために、できるかぎり多くの測定、限界、インディケーターを定式化する。しかし、本書の目的に合わせ、使用する宗教的穩健さのインディケーターは四つある。それは:1) 国へのコミットメ

ント; 2) 寛容さ; 3) 非暴力; そして 4) 現地文化に対して融通の利くことである。この四つのインディケーターはインドネシアである人が実践する宗教的穏健さがどれだけ強い、または脆弱性はどれだけ大きいかわかるために使用できる。宗教的穏健さを強化するために脆弱性を認識し、適切なステップをとることができるようにその脆弱性を知る必要がある。

国へのコミットメントは国の基本コンセンサスに対する誠実性、特に国是となるパンチャシラの受け入れ、パンチャシラに反するイデオロギーへの態度、そして愛国心がどの程度まで個人の見方、態度、宗教実践に影響を与えるかを見るために最も大切なインディケーターである。国へのコミットメントとしては1945年インドネシア共和国憲法(UUD 1945)及びその下の法則に記載された国の原則を受け入れることである。

この国へのコミットメントは宗教的穏健さのインディケーターとして使用するために大事である。それはルクマン・ハキム・シャイフディン(Lukman Hakim Saifuddin)宗教大臣がたびたび伝えたとおり、宗教的穏健さの視点においては、宗教の教えを実践することは国民としての義務を果たすことと同じであり、国民としての義務を果たすことは宗教の教えを実践する形となる。

寛容さは自分が信じるのと違って、他人にスペースを与えて信仰を持つ権利を邪魔しなかったり、信念を言い表わせたり、意見を言わせたりする態度である。それで寛容さは多様性を受け入れることに対してオープンで、心が広く、快く、優しい態度を示す。寛容さはい

つも尊重したり、自分の一部として違う人を受け入れたり、ポジティブに考えたりすることに付随する。

多様性に対する態度として、人は自分の意見を保留し、他人の意見を受け入れることだけで民主主義が実践できるため、寛容さは民主主義における最も大切な基礎となる。したがって、国家として成熟した民主主義の中では、その国の寛容さはどの程度までかということによって測定できる。多様性に対する寛容さが高ければ高いほど、その国はより平等である傾向があり、逆もまた同様である。寛容さの様相は実際は宗教に関するだけでなく、人類、性別、違う性的指向、民族、文化などにも関わる。

本書の場合はプレッシャーとなる宗教的寛容さは社会的及び政治的な寛容さも含め、宗教間あるいは宗教の中での寛容さである。これは宗教的な問題以外における寛容さを重視しないわけではないが、本書は宗教的穏健さのみに注目し、寛容さはその核心となる。宗教と宗教との関係を通して、我々は他の宗教の信者に対する態度を見たり、快く対話したり、協力したり、礼拝所を建設したり、他の宗教の信者と交流する経験をもつことができる。一方、ある宗教の中での寛容さは宗教の本流からそれるような少数派に行為をとるためである。

急進主義、あるいは暴力、この宗教的穏健さの場合の一つのイデオロギー(アイデアや考え)として把握し、暴言や暴行、また心理的虐待を含め、宗教の名を使って過激/暴力という方法を使って政治や社会制度を変化しようとする考えである。急進主義の行為の本質は変化を求める上で、個人や集団で暴力に訴える態度や行為であ

る。過激派集団は一般的には短時間での大幅な変化を求め、既存の社会制度に反発する。急進主義は頻繁にテロリズムと結びつく。過激派集団は目的を達成するためにはいかなる方法でも使い、自分たちと考えが合わない相手にはテロを含む行為を行う。急進主義は宗教と関係があると考え人が多いが、基本的には急進主義はある特定の宗教と関係を持つだけでなく、あらゆる宗教と結びつく可能性を持っている。

急進主義は個人や集団が経験した不公平や脅威から生まれることがある。不公平や脅威への認識はすぐに急進主義を生むわけではない。不公平や脅威を感じさせた相手に対して、憎しみを抱くことによって生まれるものである。

不公平な行為は広い範囲に広がっている。例えば社会的不公平、経済的不公平、政治的不公平である。不公平や脅威を同時に感じることもありそうではないこともある。不公平を認識することや脅威を感じる人が過激な行為やテロを進んで実行するとは限らないが、急進主義やテロリズムに賛同する立場をとる可能性はある。

地域文化やその土地の風習にどこまで寛容になれるかも大切なポイントになる。穏健な人は現地の文化や風習に対しては教義の本質に反することでないかぎり、より柔軟に受け入れる傾向がある。それはもちろん、もう一度言うが、その実践は宗教の教義の原則に反しないというただし書きがつく。逆に、現地文化に対して融通の利かない集団もある。それは信仰生活において、風習や文化を実践するのは宗教の純粋性を汚す行為であるという考えからである。

そうとは言うものの、この宗教生活の実践はすぐに本人の穏健さを説明することができない。これは一般的な傾向を見るためにしか使用できない。人は現地文化に対して融通が利けば利くほど宗教生活においてはより穏健であるという視点を証明しなければならない。宗教的穏健な態度は地域文化に対して融通が利くことと同じ関係がないかもしれない。

E. 極左と極右との間の穏健さ

宗教的穏健さに関する書き物の一部の中で穏健さという行動を宗教生活での保守的な態度、または極右と呼ばれ、問題の解決策として位置することとして注目されている。これは宗教的穏健さに関する理解は未だに完全ではないことを示している。宗教的穏健さとは実際、超保守的な宗教的考えを持つ傾向がある人を仲裁する目的だけではなく、自由主義の宗教的行為、態度や見方を持つ集団、あるいは極左も含まれる。

極左も極右も両方とも、中心部から一番端の一つの側に向かう遠心性のようなものである。自由主義の宗教的行為、態度、見方に止まる人は宗教の教えを解釈するに上で極端に思考力を神格化とする傾向があり、聖典から遠ざかる一方、逆の側に止まる人はコンテキストを考慮せず聖典に極端に固執する。宗教的穏健さは実質的な宗教の教えを内面化する重要性を強調する一方、聖典を文脈で捉え、これらの過激な二つ極を仲裁する目的を持つ。

例えば婚前交渉はハラールが許容するものと決めたムスリム学者の一部の視点は自由主義の解釈の例であ

り、極左と分類することができる。この解釈はコーラン聖典に基づくmilk al-yamin (奴隷)に関することだが、現在のコンテクストのにおける適用は文化的には奴隷制度の風習は消されたことだから、ほとんどの宗教家によって聖典の意味から遠く離れる、あるいは極端すぎることである。

逆に、聖典を理解する上での白黒の宗教的な視点も自分だけが正しいと考える外側で頻繁に捕らわれる。宗教生活の場合はこのような見方、態度、そして過激な行為は他人の視点を受け入れることを拒否し、自分の真実の解釈を強調するように教徒を促す。ここで「ハードコア」(garis keras)という言葉が生まれた。それは超保守的宗教実践と関係があると考えられる過激思想である。

宗教的保守派の特徴の一つは、一つの宗教的解釈を熱狂的に支持する態度や行為を持つ度同時に、違う視点の存在を知りながらも拒否したり、超保守的な人の場合は拒否するどころか、その存在を責めたり消そうとしたりする。これらの人々にとっての信仰生活上での良し悪しは、様々な解釈で悩むことより、自分の信念に付き従うことなのである。

そのころから、なぜ少数の過激的で超保守的な個人が、大人しく思慮深い傾向のある穏健な人々より「大きな声」で公衆の注目を集めることができるかが分かる。過激派集団の勝利は人数が多いからでなく、穏健な共同体が静かなる多数派(silent majority)だからである。

概念的には、超保守的視点を持つ態度や宗教実践は、宗教生活の中での極端な神中心の視点から生み出され、人間中心の幅をもつことを無視している。神中

宗教的穏健さとは実際、超保守的な宗教的な考えを持つ傾向がある人を仲裁するという目的するだけではなく、自由主義の宗教的行為、態度や見方を持つ集団、あるいは極左も含める。

心の視点では、礼拝や宗教儀式を行うことは狭い意味で神（だけ）を「喜ばせる」ためだという考えを信徒たちに植え付けてきた。「神のため（だけ）に立ち上がる」ことを強

いられてきた集団は信仰と礼拝は人間のためであるという価値観を無視し「神性の欲望を満たす」ことに意義を見出してきた。(Masdar Hilmy、宗教生活における人類中心“Antroposentrisme Beragama”, Kompas 4/7/2018)。

人が集団をつくり、宗教生活において過激で厳しいイデオロギーを拡大する理由は多数ある。彼らの一部は善行によびかけ、善行を防ぐ行為を行う、あるいは amar ma'ruf nahyi munkar と自ら述べ、誤った方向へ導びかれたと彼らの考える共同体の考え、態度や行為を導く;他の一部は過激派の集団の一人になり、宗教の教えに反する彼らが思う不公平な国の指導者に対する反対運動を行ったり(thagut)、他の一部は他人の支配や過激な自由主義の運動が行われたことに脅かされたり(the others)する。

過激思想及び暴力はどの宗教でも教えの本質の一部とはならない。なぜ過激思想が多数の教徒に確実に影響を与えることができないかは、宗教の本質が実際は人間性の名誉と尊厳を守るためであり、その価値は多くの共同体に必ず受け入れられるからである。彼らは宗教生活における過激思想や考えを普段少数の集団で行ったり、

合理的な対話や話し合いを避けたり、より過激な行為や運動を選んだりする傾向がある。

過激派の集団が実際よりずっと「大きく」見えるのは公衆の場で宗教的視点や声が「うるさく」、普通ではない行為を行って注目を集め、共感を得ることを目的としているからである。一回かぎりのその計画で、この集団は社会を怖がらせたり、不安にさせたりすることを達成するかもしれないが、最終的には絶対に成功はしない。預言者のイスラムへの招待(Dakwah)も愛情一杯で行われた。

それを防ぐために、穏健な宗教的集団の合同を育てなければならない;より大きな調和のために、そして宗教的過激思想がより成長しないように集団の利己を避ける。インドネシアの社会政治的な制度の場合は、ほぼ20年、宗教的過激思想は全ての相手方から注目を集め、インドネシア国内だけでなく、世界的な現象となった。幾つかの国で起こった宗教の名を使っている暴力行為は全てのグループの間で緊張感を感じ、ある程度暴力の源となる一つの宗教の集団がお互いを疑う現象を生んだ。

過激思想の現象はインドネシアにとっても苦い経験であった。いくつかのテロ行動は罪のない数百人の命を奪った。暴行を振るう宗教的過激思想は世界平和という宗教のメッセージに悪いイメージを与える。これは多様な国家の枠組みから見ると、大いに懸念される。

以上述べた通り、極左でも極右でも過激思想は悪い結果を招くことから、宗教的穏健さのビジョンを持つことは必要不可欠なものとなる。

国・国家での生活の場合も宗教的穏健さのビジョンも必ず必要とされる。説明したとおり、宗教的穏健さのインディケーターの一つは国へのコミットメント、一つの宗教を国是にすることを過激に押し付けないと同時に、国是の全てから宗教の精神的価値観や魂を追いたてる。

宗教的穏健さは宗教の精神的モラルの価値観を内面化する努力を強化するためにも暴力なしの宗教生活を築くためにも解決策になれる中道という宗教実践を強調する。

* * * * *

第二部

宗教的穩健さ(節度)の経験

社会的にも政治的にも、インドネシアは宗教的節度という考えを発展させるための強力な基盤を持っている。インドネシアが採用した国の基本原則は少なくとも3つあり、国民の穩健な気質の成長を大いに可能としている国家、愛国心、宗教において、

第一に、インドネシアは世俗的な国ではなく、神權的な国でも宗教的な国でもない。しかし、信念または宗教を持つ国民の国である。国が一つの宗教の戒律を国内法として制定する場合、それは宗教国家と呼ばれる。宗教を持つ国民または敬虔な国としてのインドネシアは、特定の宗教法を執行しない。インドネシアは政教分離を完全に実施していないため、世俗的な国でもない。

第二に、国は信教の自由の保証と保護を、風通しの良い責任ある形で提供する義務を負っている。宗教とは、宗教的な教えを、それが正しい道であるという信念に基づいて、人生の指針とすることである。それは自己信念か

ら来ているので、宗教において最も決定的なことは良心である。したがって、宗教は最もプライベートな問

題で、人が宗教の教えを信じて実践するかどうかは、個人的な信念と動機によって決定され、その結果は個人に帰する。

第三に、国は、宗教、文化、人種の多様性または多様性(異質性)を保護する。社会における複数の国の保証は、宗教的節度の成長のための良い媒体となった。各宗教の信者は、他の信者から圧力を受けることを心配することなく、宗教を表現することができる。さらに、各宗教信者は、他の信者の宗教の表現に対しても称賛する。これは、社会で起こる宗教的節度の具体的な表現である。

このセクションでは、多元的で多文化であり、上記のように国の基本原則を持つインドネシアの背景における宗教的節度の適用の経験を説明する。

A. 多文化共生社会の背景

特にインドネシアにおける宗教的節度の存在に関する重要な議論の1つは、インドネシア社会が非常に多元的で多文化であるという事実である。我々の国は、多様な部族、民族、宗教、言語、文化で構成されている。その自然の法則、多様性の中でさまざまな違いが存在し、潜在的な違いは摩擦や紛争を引き起こし、不均衡を引き起こす可能性がある。宗教的な節度は、宗教生活のバランスをとるために存在する。このバランスが欠かせないのは、神が自然にこの世のすべてを二人一組で創造されたからで、宗教的節度は、宗教的な教えを実践する際に、宗教的な人が創造された一方の側に極端な方法で閉じ込められないようにしている。

多元的で多文化な国として、インドネシアは模範となるべきバランスを見せてきた。イスラム教は多数派の宗教であるが、国は他の宗教の人々の利益をバランスよく促進してきた。

これはインドネシアがイスラム教、キリスト教、カトリック、ヒンズー教、仏教、儒教のそれぞれ大切な日を国民の祝日として制定している事実のなかに見ることができる。伝統、習慣、地域の知恵に根ざしたさまざまな文化的儀式も、調和とバランスを維持するために広く保存されている。このバランスを維持する上での国の役割は、節度を生み出すうえで、非常に重要である。

様々な歴史的記録、遺産、および地方の情報源は、インドネシアにおける1つの宗教の普及が、異なる宗教の民族のおよび人々の助けを借りて行われたことを示している。宗教を広めるという名目での大きな紛争や戦争はなかった。平和的共存が主なメッセージである。ある宗教の礼拝場所の建築で、他の宗教の影響を受けた建築様式やモチーフが拒絶されることはない。彼らは調和のとれた対等な立場にまっすぐに立つことができる。

それぞれの信者は自分の宗教の基本的な教えを信じ従うが、それでも異なる教えと対話し、協力することができる。私たちは、異なる宗教的同士が植民地主義に反対し、宗教を国のイデオロギーであるパンチャシラから

分離しないという集団合意で団結できることさえ知っています。これが私たちのかけがえのない社会資本になっている。

時折、摩擦や爆発することはあるが、一般的にインドネシアの宗教団体は、相互信頼に基づく関係、肯定的な思考、異なるグループに対する否定的な偏見の排除という形で、基本的な社会資本を保っている。このポジティブな基本的社会資本は、共感、相互の愛情、地域社会の協力の態度を生み出すための基礎として非常に重要である。これらの多様なグループ間の関係は、通常、政治的争い、地方選挙、大統領選挙など、他の要因に影響され緊張が高まる。

インドネシアは確かに宗教的に多元的な国であり、非常に大きな人口を持っている。最後の国勢調査である2010年の人口調査を参照すると、インドネシアの総人口は237,641,326人。イスラム教はインドネシアで最も広く支持されている宗教である。インドネシアの人口の2億720万人(87.18%)がイスラム教徒であり、次いでキリスト教プロテスタント教徒が1,650万人(6.96%)、カトリック教徒が690万人(2.91%)、ヒンズー教徒が400万人(1.69%)、仏教徒が170万人(0.72%)、儒教信者が111万人(0.05%)でその他の宗教が0.13%(2010年国勢調査、BPS)となっている。

宗教の多様性は、宗教的解釈の分野では依然として複数と結びついているので、各宗教内に多くの学校、または宗派があることは驚くことではない。これはすべて、各人の思考能力と能力、視点、またはアプローチの違いによるもので、さらに、ある宗教の教義は、実際に

はさまざまな解釈を持ち、様々な矛盾した宗派や宗教グループにつながる可能性がある。

多様性の中で人々が互いに挨拶し、認識し、コミュニケーションを取り、連帯することは神の御心であるため、それらは必要不可欠である。しかし、宗教同士や宗教内での多様性は、宗教問題の背景に対する紛争の可能性として認識されなければならない。自分たちの宗教が最も正しい説、他方が間違っているとすれば、多宗教を背景とするインドネシアでは、宗教紛争が起こりやすい問題として分類される。

Luc Reyckler氏(2006:7)は、宗教の違いを管理するうえで、多くの条件が必要であると述べ、平和の構築の理論を提唱した。第一に、社会集団間の緊張を引き起こす可能性のある情報や噂の普及に対する議論の明確化、修正のプロセスを可能にするための効果的で調和のとれたコミュニケーションチャネルの存在。第二に、裁判所のように公式であろうと、慣習的な宗教的機関のような非公式なものでであろうと、問題を解決する機関の役割、第三に、紛争支持派の人物による大衆動員を阻止する影響力、資源、効果的な戦略を持つ平和派の人物の存在。第四に、社会における正義の実現を支える社会政治的構造、第五に、社会統合の存続のためだけにある社会政治的構造である。

これは、宗教における暴力的紛争を予測し防止するのを怠ることがないように国家が機能する役割を果たしている。また、宗教的調和を管理するのは、政府からのトップダウンだけでなく、コミュニティからのボトムアップの必要性も強調している。

多文化的背景を持つインドネシアでは宗教に関する問題は続いており、宗教省の宗教市民教育と宗教サービス研究開発訓練庁の研究開発センターは、インドネシアの宗教生活に関する年次報告書の中で、宗教事件の複雑さを報告している。年次報告書は2010年から開始され、毎年発行されている。

宗教生活に関する年次報告書の記録によると、紛争が表出しやすいのは、宗派、理解、宗教活動、礼拝所の建設、過激主義、テロリズムに関連するものである。

これらの様々な宗教問題の出現は、この国の多様性の中で生活するためには個人の強化が必要であり、複数での集まりは依然として脅威とみなされる。

それらを注意深く追跡すれば、対立の根本的な原因は同じではなく、経済的不平等、政治的確執、または宗教的な争いによって引き起こされるものもある。それにもかかわらず、近年の紛争では、社会に対する宗教的理解が引き金になってなっていることを示している。残念なことに、社会的に緩衝材であるはずの宗教が、実際にはさまざまな紛争の引き金となる要因の一部になっている。

これら現実の宗教的問題を解決するには、違いに対応し、文化に適応(柔軟)し、その教えの原則と本質を失うことなく、宗教的な価値を背景化できる包括的な態度に基づく戦略とアプローチが必要である。この場合の、宗教的節度の視点は、これらの宗教的な問題に対応するために適用することが重要で、インドネシアは宗教的節度を実施するための強力な社会文化的な資本を持っているので、非常に幸運である。

インドネシアは、米国とインドに次いで世界最大の多文化・複合国家の一つとして知られている。これは、インドネシアの多様で複雑かつ広大な国土および社会文化背景から見るができる。それは非常に複雑で、専門家はインドネシアを解剖して正確に記述することは非常に難しいと主張している。インドネシアの多様性は、水平または垂直に見ることができる。

インドネシアの多様性は、水平に見ると、民族性、宗教、飲食、衣服、地域の言語・文化の違いを示し、垂直には、社会・文化・経済・教育レベルの違いを示している。この国は多民族であるだけでなく、多面的な影響を受けてきた舞台でもある。（ヨーロッパ、中国、インド、ポルトガル、仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教など）。これはインドネシアにとって豊かさと独自性になっている。

建国の父たちは、パンチャシラを基盤にインドネシア共和国の建国準備する際に、多文化社会の多様性を貴重な財産として強く認識していた。したがって、国の統一と団結において多様性を維持することは大変重要で、このような多様性は、何百年も前の祖先から受け継ぎ成長し、発展してきた。様々な研究が、東南アジア地域、特にインドネシア、シンガポール、マレーシアにおける文化的多元主義が印象的であると説明している。この地域のような文化的多元主義を持つ地域は世界でもごくわずかである。したがって、1930年代および1940年代の西洋の政治理論では、東南アジア、特にインドネシアは、複数性社会の概念の「古典的な軌跡」（最良の場所/参照）と考えられていた。

インドネシアが多元的社会を説明するのに最適な場所であるという見解は、国の多様性を考えると大げさなものではない。インドネシアの多様性に関する研究は、多文化主義の概念として知られるようになり、文化の違いの中で成長する調和の概念として解釈することができ、誰もが地域社会のさまざまな文化を尊重し、尊重する態度を持っている。

多文化共生社会は、世界観、歴史、価値観、社会組織の形態、習慣など、さまざまな文化からなる社会と解釈することもでき、多文化主義は、文化的な多様性を社会生活における基本的な現実として見るための知恵と見なすこともできる。この知恵をもとに、一人一人がともに生きるために進んで心を開くならば、うまく成長することができる。

したがって、生命力学の現実における多様性は、避けることも否定することも拒否することもできないという認識がもたらされている。政治的観点からは、多文化主義は存在し、国家的民族的差異の背景で成長する。

多文化主義は、より包括的で寛容な民主主義のためのより大きな闘争の一部で、インドネシアに反映された多文化主義と多元主義は、「Bhinneka Tunggal Ika（古ジャワ語で 多様性の中の統一）」というモットーとして知られ、団結と統一を大原則としている。ガルルダ・インドネシアの国章のリボンに込められたモットーは、宗教、人種、民族性、言語、文化の点では異なっている意味を持ちながらも、インドネシア共和国統一国家「NEGARA KESATUAN REPUBLIK INDONESIA（NKRI）インドネシア共和国」の名のもとに一つの国家

として統一されている。セサンティまたは賢明な文章として、Bhinneka Tunggal Ikaはインドネシアの違いを統一する巨大な力を持っており、この文章は、エンプ・タントゥラー による14世紀のスタソーマ書から引用されたものである。これは、インドネシア社会が民族のおよび宗教的両面の多様性を長い間認識してきたことを示している。

植民地時代には、この多様性の精神が復活し、インドネシア国民の統一の精神が育まれた。1928年10月28日の青年の誓い会議では、多様性を気にせずに違いの中で団結するというインドネシアの人々の精神が示された。寛容さが統一の精神を実現するためのキーとして大変重要な役割を果たした。

しかし、神からの憐れみとして、インドネシア社会の多様性によってしばしば起こる問題を避けて通ることはできない。多様性を国家の恵みと財産として受け入れなければ、多文化社会の中での違いによる口論や紛争が引き起こされる可能性は否めない。これは、多様性を分裂した空間として認識し、他の人は自分たちのグループの一部ではないと考える場合に起こりうる。インドネシア国家にとって、多文化社会の背景は、節度の種、さらには民主主義の種を蒔くための肥沃な土壌のようなものであり、この土地は非常に高価な社会文化的の資本となるので我々は共に耕していかなければならない。

B. 宗教的節度という社会文化的の資本

宗教はインドネシア社会の生活、特に社会規範を築くうえで重要な役割を果たしている。一方では、信奉者

が排他的であることを要求し、また一方で、包摂的またはオープンな態度も教えている。宗教は人々の生存権を維持、保護し、人間の命を守るために存在している。宗教はインドネシア国民の生活において非常に重要な位置づけと役割を担っている。

宗教の地位と重要な役割を認識することは、パンチャシラの国家哲学の第一の教訓である神への信仰の原則の確立に反映されており、他の戒律を活気づける教訓としても理解されている。したがって、宗教分野の発展は、国家発展の不可欠な部分であるだけでなく、2005年から2025年の期間に「独立し、発展し、公正で繁栄したインドネシア」のビジョンを実現するための努力につながる国家開発の全体的な方向性と目標の根底にあり、活気づけるべき部分でもある。

他の国々と比較し、インドネシアは調和と民主主義の強化に大きく貢献する多数の宗教共同体組織(CSO)を持っていることは非常に幸運である。これは国際社会、特に多文化で多様性のある

インドネシアのような宗教団体を持たない国々からも広く認められている。インドネシアの民主的な人物、宗教指導者、学者もインドネシアの宗教団体が国家および宗教生活の持続的可能性に無限の貢献をしていると信じている。

これまでインドネシア共和国が統一国家として存在してきたことは、この国がまだ既存の紛争を克服するための強力な社会関係資本を持っていることの証明である。

これは、インドネシアのほとんどすべての宗教団

体が国民の間に根ざしているためである。国民は、自分たちが持つ文化的、社会的ルーツから引き離されるのではなく、常に新しい文化に適応するために、様々な分野での考え方を更新していく義務を持ち貢献すべきだと考えられている。

インドネシアの宗教団体は、宗教的な価値観に確固たる姿勢を示すとともに、国籍、インドネシア共和国、民主主義、そして昔から培われてきた伝統や文化の崇高な価値観にも大きなこだわりを持ち、宗教的節度ある国家としての国民性を形成している。

これはさらに、極右と極左という両極に傾いている宗教は、国民生活と国家の継続に適していないことを証明している。我が国は、5つの戒律(パンチャシラ)に具現化された穏健な道を選び、それが公共の道徳的価値であると合意している。

インドネシアのあらゆる宗教の視点から、パンチャシラは確かに調和しており、宗教的な教えを伝えるという目的に沿っている。これは、宗教的な価値を拠り所として公共の利益(公益)を実現する精神を蓄えている第1の戒律に反映され、第2の戒律は人間にとって基本的な生命の尊重を、第3の戒律には子孫の繁栄を、第4の戒律は理性/知恵の保護を、第5の戒律は財産の安全を保証している。

これらを考慮すると、インドネシアは国家と宗教が調和の取れた関係であるため理想的な形をとっている。

この良い習慣は、宗教的節度の理解が私たちの国の性質であることを大衆に大規模に提唱し、宣伝しなけ

ればならない。これは私たちがともに守るべき遺産である。

宗教は非常に、重要な役割をもち、国民の生活の中で独特な位置づけを持っている。これは、インドネシアにおける宗教と国家の関係の中で広く知れ渡っている。

「インドネシアは神権国家ではないが、世俗国家でもない」。この定式は、国家と国民の生活における秩序が、特定の宗教的な理解や信念に基づいているのではなく、宗教に含まれる高貴さ、美德、善の価値が、国家と国民の生活の源泉と精神的、道徳的、倫理的な基盤として認識されていることを意味している。私たちは世界で最も多元的な土地、インドネシアにおり、この非常に高い多様性は、崩壊の可能性も非常に高い。複数性は、適切に維持・管理されれば正の方向へ動くが、文化の強い理解と多様性を維持するという約束を守らなければ、紛争の源になる可能性がある。これまでのところ、インドネシアの人々は団結と誠実さを維持するために多くの地域の知恵を示してきた。そして、そのような地域の知恵は、宗教的節度の視点、態度、行動を構築するための非常に貴重な社会資本である。

既存の宗教の多様性により、インドネシアでは宗教的ニュアンスの対立を避けることはできない。インドネシアの多くの地域で発生した事例は、インドネシアにはまだ容認できない特定の個人またはグループが存在することを示している。また、多様性の中で何百年も生きてきたインドネシア社会は、宗教問題を含む対立や紛争に対する免責を保証するものではないことも確認している。しかし、インドネシアがこれらの問題に立ち向かう

ことができるという楽観主義は、依然として育成されなければならない。インドネシア共和国の建国は、これまでのインドネシアに、既存の紛争を乗り越えるための強力な社会資本が今なおあることの証左です。

インドネシア国家を特徴づける社会資本の1つは、社会のあらゆる層で長年にわたり愛着されてきた、ゴトン・ロヨン「相互協力」の文化である。ゴトンは持ち上げたり肩を並べたりすることを意味し、ロヨンは一緒にいることを意味する。ゴトン・ロヨンとは、何かを持ち上げたり、一緒に何かに取り組んだりすることを意味し、ゴトン・ロヨンは、インドネシア国家の団結と統一の精神の具体的な現れである。この態度は、団結、共感、相互扶助、共通の利益の優先順位付けなど、高い道徳的な価値を持っており、この態度は、祝賀活動、社会福祉、農業活動、災害や死の出来事、さらには宗教的な社会など、インドネシアの人々の日々の活動に見いだすことができる。この態度は、インドネシアの国が違いよりも人間性と平等を優先していることを示している。

例えば、2019年8月26日に中央ジャカルタのケマヨラン、チェンパカバルの住民が示した連帯感は、お互いの信念を乱すことなく、社会宗教に関連する相互協力の一形態である。

当時、亡くなったクリスチャンの納棺の儀式が、牧師の司式のもと、ダルサラームモスクの中庭で行われ、モスク周辺の家族やキリスト教徒が出席した。この活動は、家族がモスク繁栄評議会(DKM)に、モスクの中庭を納棺に使用する許可を求めた後に行われた。その理由は、葬儀場に通じる路地が狭すぎ、棺が葬儀場に出

入りしづらいからである。DKMダルサラームの管理下で、モスクの中庭をクリスチャンの礼拝活動に使用することができ、他宗教の信者を含め、互いに助け合うために善を行うことを意図していた。

このことについて、ルクマン・ハキム・サイフディン宗教大臣は感謝の意を表し、モスク管理者と地元住民にとって、このことは当然のことながら、市民権の相互扶助の一部であると説明した。しかし、より広いコミュニティと世界の目にとって、それはインドネシアの宗教団体間の寛容さが非常に高いという例である証拠である。

また、インドネシア国民が所有しているもう一つの社会資本は、インドネシア国民が昔から実践してきた審議文化である。インドネシア国民は、社会生活におけるあらゆる形態の問題を解決する上での審議の重要性を強く認識しており、この方法は、誰もがお互いに与え合い、意見を聞くことができる場所になる。熟考すれば、いかなる人や集団をも、自分の意志を支配し、押しつけることはできない。この文化は、共通の利益を実現する上での相互の合意(コンセンサス)を達成するためにインドネシアの人々によって実践されている。

常に共通の利益を優先することにより、違いの問題に直面することができるインドネシアの人々の経験のおかげで、インドネシアはしばしば地域で起こる紛争の調停者および平和の創始者として行動する。例えば、インドネシアはかつてベトナムがカンボジアを占領したときに起こった紛争を調停者し、1988年から1989年にかけてジャカルタ非公式会合(JIM)を開催することで、調停

努力はベトナムが最終的にカンボジアから軍隊を撤退させるという肯定的な結果をもたらした。

インドネシアはまた、フィリピン政府とモロ民族解放戦線(MNLF)の間のミンダナオ紛争の調停にも成功している。インドネシアの支援により、和平合意が最終的に実現され、それはミンダナオ・ムスリム自治区を創設する合意の署名によって特徴付けられた。それに加えて、インドネシアは、ミャンマーでのロヒンギャ紛争に積極的に意見を提供する平和へのイニシアティブをとっている。ゴトン・ロヨン文化は、審議を優先し、常にインドネシア国家の共通の利益を優先し、宗教的節度を適用する上で重要な資本なのである。

さらに、もう一つの重要な資本は、インドネシア人が多くの新興宗教問題を解決する上で宗教的節度を実施した経験があることである。ここで述べるができるケースの一つの例は、東ヌサテンガラのカパン市アラク地区のバトゥプラト村にヌルムサフィールモスクを建設することで、モスクが、キリスト教徒が大多数を占める居住地の真ん中に建てられた。このモスクを建設する目的は、279人に達するイスラム教徒のための地域にモスクの必要性から来ています。これらのイスラム教徒は礼拝するには、比較的遠く離れたカパンの街に行かなければならなかったからである。

ヌル・ムサフィール・モスクの建設は問題を避けることができなかった。2011年、モスク建設の起工式が行われ、この建設は、村長の許可、カパン市の宗教調和フォーラム(FKUB)からの勧告、市長からの法令、カパン市の衆議院からの承認書、地元の非ムスリムコミュニティ

ィからの支持の手紙など、モスク建設委員会がすべての必要な書類を完了した後に開始されたが、キリスト教徒のコミュニティと地元のカラン・タルナの若者が、建築許可証の管理書類の完全性に詐欺があると考えたため、ヌル・ムサフィール・モスクの建設に抗議し、建設を拒否した後に紛争が起こった。彼らによると、要件として使用された65人のキリスト教徒からの支援の署名データは、モスクの建設のためではなく、犠牲祭の肉の受領者に関するデータで、2002年、ある住民はモスク建設のために土地を寄付したが、住民によって拒否された。紛争の激化を避けるために、クパン市の議会はモスクの建設を一時的に停止するよう勧告した。

この紛争を調査し、フォローアップするために、地方自治体はクパン市の警察が率いるチームナインを結成した。この紛争は、クパン市の市長選挙中であったために後回しにされた。選挙後、紛争を解決するための努力が再開され、新たに選出されたジョナス・サレアン市長は、宗教省、FKUB、クパン市警察のチームナイン、カサティンテルチームからなる事実調査チームに、ヌル・ムサフィール・モスク建設紛争を調査するよう依頼した。2013年6月27日、クパン市の国家政治統一機関およびコミュニティ保護庁は、バトゥプラット住民のすべての構成要素、村の役人、宗教指導者、青少年団体「カラン・タルナ」、地域リーダーフォーラムの両方で審議を開催した。この会議の結果、バトゥプラットのキリスト教徒は、すべての行政が適用規則に従って完了されなければならないように、ヌル・ムサフィール・モスクの建設を強く支持した。

2015年4月、国家人権委員会(Komnas HAM)は、市長とそのスタッフ、宗教省、FKUB、ティモール福音主義教会のシノデ牧師、青少年指導者を巻き込んで調停活動を実施した。この調停の目的は、平和的で非暴力的な妥協点を見出すことで、2015年8月31日には、お互いの過ちを忘れ、許し合うための伝統的な儀式も行われた。これらの会合の後、ヌル・ムサフィール・モスク建設は継続することができた。

2016年4月11日、ヌル・ムサフィール・モスクの起工式が行われた。この式は、クパン市長と宗教省のイスラム共同体指導局長、キリスト共同体指導局長によって直接主導された。式には、東ヌサ・テンガラの宗教指導者評議会の議長、クパン市の警察官長、クパン市のアンソール青年運動、クパン市の異教徒の若者、地域リーダー調整フォーラムなど、社会のあらゆる層から出席者が集められ、宗教間の調和を示した。ヌル・ムサフィール・モスクの建設は、インドネシア国家が宗教問題に基づく紛争を解決するために非暴力的アプローチによる審議を優先することを強調している。

宗教的節度の問題を解決する方法であることを示すもう一つの事例は、スラメット・ジュミアルトとその家族が、宗教の違いを理由にバントウルのプレレット地区、プレレット村、カレット村に住むことを拒否されたことに始まる。適切な価格で販売されている家の広告をみたスラメットは、ブローカーや住宅所有者に連絡を取り、すぐにその家を購入した。ブローカーや住宅所有者は、彼が非イスラム教徒であることを確認し、イスラム教徒が

多数を占めるコミュニティではあるが問題を抱えていないことを確認した。

翌日、スラメットは町内会の会長と会い、身分証明書、家族構成カード、結婚証明書のコピーを提供した。しかし、町内会長がスラメットと彼の家族がカトリック教徒であることを知り、スラメットと家族がカレット村に住むことを拒否した。町内会長によると、その拒否は、非ムスリムがプレレット村に滞在することを禁止する法令番号03/P0KGIAT/Krt/Plt/X/2015に基づいていた。その後、スラメットは地元の村長に会ったが、彼と家族はまだ滞在する許可を与えられていなかった。地元のドゥクーの長は、非ムスリムがプレレット村に住むことを禁止する規制は、イスラム教徒と他の宗教の間に墓が混在することを予期する意図で、約30人のコミュニティと宗教指導者によって作られたと説明した。

バントゥール市の政府は、ジョグジャカルタ市の宗教省とともに、バントゥール市の書記官事務所で調停のための会議を開始した。スラメットだけでなく、この会議にはドゥクーの長、町内会の会長と地元の村長も出席した。調停の後、会議はまた、非ムスリムがプレレット村に住み、定住することを禁止する規制が解除され、規則を作った村の役人が謝罪することで合意した。フォーラムは、この規制がインドネシア共和国を傷つける可能性があり、異なるアイデンティティの出会いの場を閉じ、異なるアイデンティティを見ることに懸念、疑い、恐怖、ショックを引き起こす多様性に反していると考えています。このような規制は、実際には社会的な排除を

奨励し、不寛容を合法化し、権利を侵害し、マイノリティに道徳的損害を与える可能性がある。

宗教的な問題を解決するための最善の解決策として参考にするべきもう一つの事例は、ジャカルタ大聖堂教会がイスラム教徒の祝日にミサのスケジュールを変更した事例である。2017年6月25日の日曜日、インドネシアのイスラム教徒はイードル・フィトリを祝っていた。ジャカルタの多くのイスラム教徒は、午前中に導かれた祈りを行うためにイスティクルモスクを使用し、同時にカトリック教徒は、通常6回、06:00、07:30、09:00、11:00、17:00、19:00に大聖堂教会でミサを持つ。イスティクルモスクと大聖堂教会は隣接する場所にあるため、ジャカルタ大聖堂教会の教区評議会がミサの開催を10:00、12:00、17:00、19:00時の4回のみに変更することにした。大聖堂の教会管理者は、イードル・フィトリの祈りに集まるイスラム教徒の駐車場として教会の庭を使用するように申し出た。この異宗教間の寛容の物語は、2019年8月11日にイスティクル・モスクで行われたイードル・アドハーの祈りでも再び繰り返されることがわかった。

このように、この国における寛容さと多様性を編むための動きは成長し続けている。異宗教間、部族、人種コミュニティの出会いのための空間である対話の場だけでなく、人道的な連帯行動においても多くの地域で、コミュニティはパダン市の平和鳩記念碑、サンピット市の平和記念碑、北カリマンタンのタンジュンセロールの平和愛の記念碑など、平和の象徴として記念碑の建設を開始した。さらに、北スラウェシ州のミナハサには愛の丘

もあり、これはミナハサ族とトモホン族の寛容な態度を象徴している。沈黙の象徴としての様々なモニュメントや平和モニュメント、さらには壁画でさえ、調和と寛容を維持することの重要性を人々に思い出させている。

国の隅々から、寛容の結び目が流れ、調和の艤装を編みだした。バリ島ブラバトゥ・ギャニャール県ケラマス村のヒンズー教徒とイスラム教徒が並んで調和して暮らしていることがわかっている。調和を保つためには双方のグループが積極的に許与範囲を構築していく必要がある。ヒンズー教徒がニュピの日に宗教活動を行うとき、イスラム教徒はオゴオゴのパレードに参加し、ヒンズー教徒に飲み物や食べ物を寄付する。一方、イスラム教徒の断食期間中は、ヒンズー教徒の隣人は礼拝を行っているイスラム教徒の前での物を喫食、喫茶、喫煙を慎む音により。断食の習慣を尊重する。ムスリムが預言者のマウリッドを祝うとき、ヒンズー教徒は食物を寄付をし、イードル・フィトリの間、ヒンズー教徒は訪問に来る。これは、相互尊重が調和の場であると同時に、双方が関わる社会問題が発生したときに対話の場として利用できる社会制度であることを示している。

実際に、ケラマス村の耐性モデルは、他の場所でも簡単に見つけることができる。イードルフィトリなどの宗教的祝日に関する、ジャワ島の地方のさまざまな場所、ウンジュンという用語が知られている。これは、隣人や親戚との集まり、お互いを許し合う活動であり、宗教に関わらず社会のあらゆるレベルで使用される。同様に、共同パトロール、お互いの礼拝所を守り、誰かが亡くなった場合のお互いの死を悼む。

さらに、他のモデルは、Huda氏(2015)によってバルンラモンガン村で発見された。バルン村はラモンガン県で最もユニークな村で、おそらく全インドネシアでも同様である。この村には、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教の3つの宗教が共存しているが、社会文化的、社会宗教的生活の関係は、宗教の違いの中で比較的な平和で寛容に満ちているため「パンチャシラ村」または「包括的な村」として知られている。もちろん、この現象は、宗教の違いの真っ只中に平和で調和のとれた社会文化的生活システムを構築することができるので興味深い。一方、他のところでは、宗教や信念の違いが正当化され、社会におけるグループ間の紛争や暴力の引き金となっている。

バルン村の寛容のパターン化されたモデルは次のとおりである:第一、多元的な村の役人は、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教など、さまざまな宗教社会のあらゆる層から構成されている。第二に、家族は1つの屋根の下に、さまざまな宗教(イスラム教、ヒンズー教、キリスト教)からなる多文化の家族である。第三に、多文化ケンドゥリ/「ンパトゥリ」は、ライフサイクル(妊娠、出産、生計を立てる、死)または社会の重要な行事(インドネシア共和国の独立記念日、断食、祝日)に対応するための活動であり、祈りの儀式で宗教指導者が率いるお祝いを開催することによって行われる。食べ物を提供し、ケンドゥレンの「祝福」を得ることによって、宗教的背景に関係なくすべての居住者を招待することである。そして第四に、包括的な布教は、人々に善を行うよう招き、礼儀正しく、寛容で、感謝し、敬意を払った

方法で悪をしないように人々に警告する方法である。バルン村に建てられた寛容のモデルが、紛争を起こしやすい他のインドネシアの人々のためのインスピレーションと事例となり、団結し、寛容で、発展し、平和で調和のとれたインドネシアを築くという私たちの希望が実現できることを願っている。

首都ジャカルタから約20キロほど離れたところに、調和が習慣に変わったため、非常にユニークな寛容のモデルを持つカンブンサワ(ブカシ市の地域)がある。ベタウィ族に支配され、通常、ベタウィ族はイスラム教と同義語であるカンブンサワの人々は、互いに宗教的に異なる生活をするように慣れている。一緒に生活を保つことからの教訓は、ジャカルタの端にいるイスラム教徒、プロテスタントキリスト教徒、カトリックキリスト教徒から学ぶことができる。ここのベタウィの人々にとって、寛容はスローガンであるだけでなく、習慣になっており、すべての新しい市民は、単に共通の富としてカラフルな違いを受け入れることによって、ここで簡単に調和を感じることができる。

カンブンサワでは、3つの礼拝所が互いに近くにあり、すべてジャラン・ラヤ・カンブンサワ、ジャティム・ルニ村から西ジャワ州ブカシ市のジャティメラティ村にあります。礼拝所は、アル・ジャウハル・フィサビリラ教育財団の大モスク、カンブン・サワ会衆のパスンダン・キリスト教会、聖セルヴァティウス・カトリック教会である。

カンブンサワの習慣は、宗教団体間の調和を維持するために他のコミュニティに適用することができる。第

一に、彼らの祖先は子供の頃から寛容な態度を教えていた。調和を学ぶことは学校からではなく、家族から始めることで、第二に、宗教間のコミュニティは、宗教の祝日にお互いを訪問する。これは、他宗教の崇拝に参加する活動ではなく、同胞としての友情である。

そのような実践では、寛容は単なるアドバイスとして止まるのではなく、むしろ実践になる。その後、その実践は習慣となり、その習慣は世代から世代へと受け継がれました。カンブンサワでは、新年の雰囲気がいつものにぎやかで、住民は握手をしたり、周りを回ったり、交流したりする。

宗教団体間の紛争の可能性が検出された場合、その可能性はすぐにこの村の礼拝所の管理者によって議論される。紛争は、早い段階ですぐに抑制することもできる。クリスマスが来ると、イスラム教徒は近所の安全を守るのを助けます。イードアル・フィトルやイードアル・アドハーの祈りの間、クリスチャンもそれを確保するのを助ける。教会でイベントがあるが、会衆に駐車場がない場合、会衆はモスクの中庭に駐車することを歓迎する。相互の平和を維持するために、モスクの管理者も教会の管理者も、宗教団体間の敵意の雰囲気を醸成する宗教的な講義を禁止する。

上記のコミュニティの多様性の経験は、社会における良い価値観に根ざした宗教的節度を反映しているため、地域の知恵とも呼べる社会制度である。

宗教的節度のこのモデルは、他の場所で促進され、発展させることができ、調和の理論家としての社会的モダリティである。地域社会によって行われたイニシエー

ションは、地元の知恵と呼ばれ、他の場所でモデルとして適用されるべきである。

上記の寛容のモデルのいくつかは、間違いなく宗教的節度の見解に根ざした行動を反映している。これに対して、国は調和の枠の中でこの国を建設するために、社会関係資本としての宗教的節度のモデルを促進する役割を果たすべき時である。上記の経験のいくつかの小さな例は、インドネシアの人々が常に熟考、人間性、寛容、そして地元の知恵を優先することによって違いに対応することにどのように熟練しているかの例である。

インドネシアは、実際に発生する多元的と多様性の問題に直面するための強力な社会資本を持っている。社会で生じる紛争やサスペンスは、必ずしも宗教における不寛容と保守主義の深刻さを反映しているわけではないが、これは、ミスや誤解を引き起こし、サスペンスを引き起こすデータがないために発生することがある。

多様性への対応は、神が人間に与えた5本の指に似ている。各指には独自の機能と特性がある。5本の指が一つになれば、どんなに重くてもどんなに仕事をこなせる大きな力が生まれる。

C. 積極的寛容の強化のための宗教的節度

宗教的節度は寛容、または寛容という用語から切り離すことはできません。これまでの様々な議論から、宗教的節度はプロセスであり、節度が適用された場合、寛容は結果またはoutcomeであると言える。

寛容という言葉は、誰かを好きになり、人々に他の意見や議論を持たせ、思考の自由や他の信念を妨げたく

ないという意味での広さとして解釈することができる。この背景における寛容は、異なる見解を聞くための開放性の態度として定式化することができ、寛容は二つの方向に機能し、すなわち、意見を表現し、特定の範囲内で見解を受け入れるが、互いの宗教的信念を損なうことはない。他の宗教に対する寛容性は、国の調和を実現するための主要な前提条件の一つである。

一方、国家の調和は、国家発展の実現の柱である。宗教的信者間の寛容と相互尊重の実質的な態度を通し

宗教的節度はプロセスであり、節度が適用された場合、寛容は結果です。て、安全で穏やかで調和のとれた生活システムが実現できるように、宗教コミュニティ間で良い相互作用と理解が実現される。

宗教指導および宗教サービス研究開発センター(2019),が発表した宗教的調和指数では、寛容は宗教的調和を生み出すための最も重要な指標の一つであり、すなわち、調和的に、寛容に、平和的に相互作用し、お互いを尊重し、宗教の違いとそれぞれの崇拝を実践する自由を尊重する宗教的な人々の生活条件である。インドネシアは、宗教的社会的暴力の様々な紛争を経験し、これらの紛争は、財産と命の両方、非常に貴重な損失をもたらした。多くの礼拝所、家屋、さらには社会施設さえもが損傷、焼失、破壊され、犠牲者は少なくなかった。これらの暴力的な出来事はしばしば発生し、印刷メディアと電子メディアの両方のメディアによって広く報道されている。これらの出来事に関わった加害者は、多様性や

多元的が神の恵みであり、適切に管理する必要があることに気付いていないようである。

歴史的に、この多元的なインドネシア国家は、何世紀にもわたって調和のとれた共同生活の原則を実践してきたため、暴力的な紛争の事件は実際にはインドネシアの人々の生活全体を表しているわけではない。島国である領土は、以前まだ政治的国家とは呼べない頃から人々は「Bhinneka Tunggal Ika」というモットーを固守してきた。

多様性は、強制的な寛容や見せかけに包まれた寛容ではなく、寛容の真の文化を発展させることができる場合にのみ、長期間続くことができる。ここでいう真の寛容とは、異なる信念の信奉者を尊重し尊重するだけで受動的ではなく、社会文化的生活において積極的にコミュニケーションをとり、団結と協力を構築する寛容である。インドネシア国家は、この積極的な寛容姿勢を通じて多様性を維持できなければならない。それがなければ、多くの多様な信念と何百もの種類の部族や民族性を持つこの国は、内戦によって破壊される可能性がある。

宗教間の調和と寛容を改善するための努力は、宗教省を通じて政府によって長い間行われてきた。例えば、1970年代の時代には、意見の相違で同意する、不承認で同意するという概念が知られており、後に宗教間調和プロジェクトと言うようになった。このプロジェクトには、異宗教間の性質を持つ多くの活動が含まれ、もと宗教省大臣ア・ムクティ・アリによって始められたこの概念は、宗教的な人々に、この国の生活の中で人々がただ一つであるだけでなく、多く、異なっていることをよ

り認識するように勧めている。政府は、調和を国家統合と開発支援の安定の実現のための重要な要素と見なし、国家の調和は、発展の目標と理想を達成するために、団結と統一を実現するための主要な資本である。

最も深刻な宗教的ジレンマは、コミュニティ外の人々との関係で、ほとんどすべての宗教は、他の宗教を劣ったものと見なしており、自分たち以外のコミュニティについて話すときは見下す傾向さえある。これは、真理または救済は信者が固執する宗教にのみ存在するというすべての宗教的信者の信念と不可分である(真理の主張)。実際、宗教知識の理解の違い、さらには宗教的な違いでさえ、人生の現実の不可分な部分である。違いは潜在的な場合もあるが、問題になることもある。人生の意味をさらに豊かにするために建設的によく理解され、管理されていれば、排他的かつ不寛容に扱われれば問題になる。

一方的にのみ真理と救いを認める排他的な宗教的態度は、宗教団体間の摩擦を引き起こす可能性がある。インドネシアで起こる宗教紛争は、一般的に排他的な宗教的態度と、寛容な態度に基づいていない人々の支持を得るための宗教団体間の争いによって引き起こされている。宗教の真の顔は平和で冷静であり、幸福への希望のオアシスは争い、敵意、さらには虐殺でいっぱいになる。

この記述から、調和を築くための努力は単純ではなく、政策、戦略、そして社会学のおよび神学的の両方における様々なアプローチが必要である。社会の調和を築くための努力には、ソーシャルキャピタルが必要です。

多くの専門家が、社会が平和な状況を作り出すのを助けることができるソーシャルキャピタルを説明してきた。

社会における市民権のネットワークが強ければ強いほど、市民間の共同暴力が起こる可能性は低くなるという人もいる。市民同士の相互信頼を育むことができるこの市民参加ネットワークは、貴重なソーシャルキャピタルで、社会における市民権のネットワークが強ければ強いほど、潜在的な紛争を減らすための調整を含む、共通の目標を達成するために市民が協力する可能性が高くなる。

市民権ネットワークには、公式および非公式の市民権ネットワークの両方が含まれる。正式な市民権ネットワークは、協会の形をとることができるが、一緒に夕食をとったり、お互いを訪問したり、屋台で会議したり、路上で会ったりするなどの非公式な市民の関与もある。社会における市民ネットワークが多ければ多いほど、人々が平和な状況を作り出すのを支えることができるソーシャルキャピタルになる可能性を秘めている。

さらに、共同活動への市民参加という形でのコミュニティ間の市民権のネットワークは、潜在的な紛争を防ぐことができる。非公式で日常的な性質の市民コミュニケーションは、農村部では社会的結束を維持するのに十分強いかもしれないが、大都市では不十分である。都市部における民族間平和の創出には、結社的な正式な国家的結びつきが不可欠である。

Suprpto氏 (2013: 19) は、インドネシア、特に調和のとれた雰囲気の中で行われているロンボク島におけるヒンズー教徒とイスラム教徒の関係を調査し、次の3つ

の要素があれば、調和と社会的統合のプロセスが形成されると結論付けている 第一に、包括的な宗教的理解すること。 第二に、律法への従順。 第三に、市民同士の過去、信頼、絆を許すこと。 Suprapto氏はまた、共同体における紛争勃発は、地元の知恵の衰退と公共スペースの欠如によって引き起こされたと付け加え、住民の絆を弱めた二つのことを挙げた。 歴史的、政治的、経済的、文化的などの他の要因と絡み合う市民の絆の弱体化は、市民間の様々な紛争を個人的なサスペンスから共同体の紛争に容易に移行させ、民族のおよび宗教的紛争につながる。

したがって、社会的調和を実現するためには、宗教的信者の積極的な寛容さが必要であり、宗教的信者間の調和を築くための努力は、違いを断片的な社会的事実として見るだけでなく、各宗教的信者が他の宗教の存在と権利を認識するだけでなく、熱烈な社会的相互作用を通じて相違点と類似点を理解する努力に関与し、野心通りの多様性の調和を達成するためにも、積極的な関与を必要としている。

インドネシア国家の長い歴史は、多くの宗教が後にインドネシアに入り、当時すでに宗教を持っていた人々に受け入れられたことを示している。長い歴史の中で、彼らは相互作用し、そのような相互作用のプロセスは、ほとんど大きな混乱なしに起こった。これは、各宗教的な信者の積極的な寛容さによるものであり、彼らがお互いを受け入れて一緒に暮らすことができるようにし、各宗教的信者によってしっかりと保持されている穏健な態度の存在と不可分である。

節度派は、他の宗教の人々を、保護され尊敬されなければならぬ神の被造物と見なし、節度あるグループの見解では、多様性はスンナトゥッラーであるため、社会的調和が実現されるように常に提唱されるのは、複数に対する寛容と尊重の態度である。

D. 非暴力のための宗教的節度

歴史的に、宗教における節度(中道)のビジョンは、インドネシアの歴史の中で新しいものではない。例えば、政策の面では、宗教的節度のビジョンの本質は、前述のように、宗教生活の調和に関連するインドネシア共和国宗教省のブレークスルーから見る事ができる。

例えば、「不承認で同意する」という考えに頼り、宗教省は宗教的な人々が受け入れられている宗教が最善であると信じるよう奨励する政策を実施した。それにもかかわらず、すべての宗教家は、ある宗教と別の宗教の間には二つの側面、相違点と類似点があることを認識している。この認識は、ある宗教団体と別の宗教団体に対する相互尊重につながる。

さらに、宗教省には寛容の三部作の概念もあり、宗教者の内的調和、宗教間の調和、政府との宗教間の調和という三つの調和を創り出そうとしている。宗教大臣アラムシャ・ラトゥ・ペルウィラネガラが唱えた調和の三部作は、パンチャシラと1945年憲法に基づくインドネシア共和国の傘下で、社会、国、国家の生活の中で協力が促進されるように、寛容、相互理解、相互尊重、尊敬の態度を作り出すことを意図している。

1990年代には「中道」という概念もあり、宗教の調和に関連するプログラムに翻訳された。例えば、タルミジ・タヘル宗教省大臣は、1993年に宗教調和研究所(LPKUB)を設立し、本機関は、宗教団体間の調和のとれた関係を見据えた宗教思想研究を行う場であり、その成果から政府への貢献が期待されている。LPKUBはまた、国内、地域、国際規模での宗教的調和に関連するバロメーターとなることが期待されている。タルミジは、宗教的調和は、宗教的節度の信仰を参照した「中道」の宗教的信念の肖像画であるという見解を持っている。

上記の政策の実績は、宗教的な節度の教えの精神に基づく宗教的中道が、長い間実質的に宗教省の関心事であり、ほとんどすべての宗教大臣の注目を集めてきたことを示している。2014年以来、宗教省大臣のルクマン・ハキム・サイフディンが反響を呼んでいる宗教的節度など、主要なビジョンとして体系的に策定および構造化されていないというだけである。

宗教に加えて、脱過激化アプローチを通じて急進主義に対抗するための精力的な努力もある。しかし、このアプローチだけでは、本当にすべての人間の基本的なニーズである宗教的な教えを内面化しようとする努力を無視する傾向があるという欠点がある。すでに述べたように、宗教的節度には二つの目的がある:第一に、宗教的教えの実質的な内面化、第二に、宗教の名のもとに暴力の問題を克服するのを支えることである。

実践、節度、または中道の指針として、非暴力戦略の一環として合意されれば、それは3つの方法で提唱さ

れ、キャンペーンすることができます(パンガベアンとアリ・ファウジ、アブ・ニマーに、2010)。

第一に、宗教の中道は、非暴力的な方法で平和をよりよく支援する新しい倫理と精神性の発展を通して、宗教自体の内部側面を見ることによって、宗教内のメカニズムを使用してキャンペーンすることができる。これは、人間の価値に基づく寛容で包括的な態度を強調する宗教的なテキストの解釈を使用することによって行うことができる。宗教的なテキストの再解釈に加えて、宗教的人物や指導者の権威を利用して、信者を平和を促進するために招待することによって、内部宗教メカニズムを実行することもできる。

第二に、「中道」の多様性は、宗教間のメカニズムを使って行うこともできる。この段階では、行動にもっと重点が置かれ、多文化インドネシアの背景では、コミュニティ活動における協力を通じて調和のとれた協会を構築し、宗教の日を祝うために訪問し、違いの負担なしに交流することによって、宗教間の個人、グループ、コミュニティ間の対話を通じて平和を促進することによって実践することができる。この宗教間の協力は、健康、教育、経済、政治、文化の分野など、共通の利益に基づく団体で実践することができる。インドネシアの背景における良い習慣は、すべての宗教的信者を受け入れるコミュニティ、すなわち現在34の州と市に設立された宗教調和フォーラム(FKUB)の存在です。このフォーラムは、将来の調和のアジェンダのための重要な資本である。

第三に、宗教の「中道」は、宗教外のアプローチを用いて行うこともできます。このアプローチは、実際には、国際規模での体系的なメカニズムをより重視している。現在のグローバルな背景では、共通の使命、すなわち世界平和に結びついた国境を越えた協会を創設することによって、それを行うことができる。

インドネシアの様々な経験
インドネシアの様々な経験は、宗教の名の下に過激主義と暴力が脱過激化活動によって十分に克服されるのではなく、節度活動との相乗効果も必要であることを示しています。

インドネシアの様々な経験
インドネシアの様々な経験は、宗教の名の下に過激主義と暴力が脱過激化活動によって十分に克服されるのではなく、節度活動との相乗効果も必要であることを示しています。右端の振り子を、左端のもう1つの極端な振り子と一緒に中央に引っ張ることができるようにする。

宗教的極端さが一方にあり、宗教的節度が存在しない限り、宗教的不寛容と紛争は依然として「籾殻の中の残骸」であり、特に政治的軸で点火された場合、いつでも爆発する可能性がある。

E. デジタルディスラプション時代の宗教的節度

現在の宗教生活の複雑さは、世界が今混乱の時代に入っているため、以前の時代とは対照的に非常に極端な問題と変化に直面しており、宗教生活でさえ宗教的ディスラプションと呼ぶことができる。

インドネシア語大辞典(KBBI)では、ディスラプションという言葉は「そのルーツから根こそぎにされたも

の」と定義されている。通常、ディスラプションは、デジタル産業革命4.0に突入している通信および情報技術の急速な発展に関連しています。ディスラプションの時代は、宗教生活の分野を含む人生のあらゆる側面に根本的な変化をもたらした。破壊的技術という用語は、情報技術、コンピューティング、自動化、およびロボット化の進歩によって特徴付けられ、この状態は、その後、非常に速く、宗教的行動を含む異常に大規模なドミノ効果をもたらす根本的な変化を生み出した。インターネットはまた、宗教的行動のパターンを変えている。

2017年の全国調査PPIM UINジャカルタの結果は、インターネットがミレニアル世代またはZ世代の不寛容の増加に大きな影響を与えることを示している。インターネットにアクセスできる人は大変多く、84.94%にもなるが、残りの15.06%の生徒/学生はインターネットにアクセスできない。どうやらミレニアル世代は、宗教学習の源としてサイバースペースにもっと依存しているようである。生徒と学生の54.37%が、SNS、ブログ、ウェブサイトなど、インターネットから宗教に関する知識を学んでいる。

デジタルコミュニケーションと情報技術の発展は、なぜ宗教的行動を含む社会的行動にそれほどの影響を与えているのだろうか？このデジタルメディアはネットワーク構築型であり、公平でインタラクティブなもので、人間の積極的な役割に伴い、しばしば操作することさえできる。標準的なルールを持たないインターネットアクセスに簡単にアクセスすることは、自由市場のようなもので、誰でも情報を書き込むことができ、個人的な記録

さえも公開され、広範な消費を得ることができる。実際この情報源の豊富さは、Z世代によってますます好まれる学習媒体にもなっている。

宗教的な情報源の嗜好におけるこの変化は、確かに宗教における「敬虔な」概念の理解にも影響を与えている。「慣習的な」世代にとって、敬虔な人々は、熱心に礼拝所に来たり、モスクで祈ったり、教会で祈ったりする人々に執着するかもしれない。

しかし、今や敬虔さの象徴は、礼拝所からインターネットへ、モスクからSNSへと移ったのかもしれない。これは、クントウィジョヨの文化主義者がモスクのないイスラム教徒として記述したものを連想させ、以前は礼拝所としてモスクに執着していた人々の意味が、大衆組織、パーティー、ビジネスユニットなどの近代的な機関のアイコンにシフトした時期があった。このデジタル時代の背景では、「新しい人々」はソーシャルメディアの形をしており、独特の「ミレニアル世代の敬虔さ」の特徴を持っている。

問題は、SNS上のコンテンツはよりアクセスしやすく、魅力的な形で提示されていますが、真実と偽の情報はますます制御不能に混同されていることである。これは宗教的な内容に関して深刻な影響を与え、さらに、人々の態度の瞬間的な変化によっても支えられている。このデジタル革命によって生み出された瞬間的で実用的な文化は、人々がマスメディアよりもSNSを通じてニュースを好む傾向を持たせる。

さらに、デジタル革命は人々の読書パターンにも影響を与えた。人々は挑発的で興奮しているニュースの見

出しを好む傾向があり、ほとんどの人は、ニュースに含まれるコンテンツを検証せずにすぐに信頼してしまう。これが、多くのデマニュース(デマ)が至る所で流布する原因になっている。

デマは、他人を凌駕し、欺くための計画的な嘘として定義することができる。デマが害を及ぼす場合、特にデマが宗教的な仮面を使用する場合、デマはすべての人間の感情的な側面に触れる宗教的性質のために、戦闘性に満ちた紛争や戦争を引き起こす可能性がある。デマが、宗教的な説教者であると主張する人々によって伝えられるならば、間違いなく彼らの言葉が彼らの人々によって聞かれるので、非常に破壊的になるであろう。それは宗教の崇高な価値を低下させる可能性があります。邪悪な影響を考慮すると、デマは殺人よりも凶悪であると考えることができる(Komaruddin Hidayat氏、「デマと宗教」、Kompas、8/1/2019)。

デマ事件の発生に加えて、インターネットの二重の顔はまた、宗教の名の下に憎悪に満ちたコンテンツの拡散のためのスペースを提供している。このようなコンテンツは、宗教教育を担当するコンテンツにさえ浸透している。現在のようなソーシャルメディアブームの時代には、インターネット上に広まる様々な情報や意見を、検証・確認せずに参考資料や宗教に関する知識の近道にしたいという誘惑に

駆られる人も多いだろう。多くの人はインターネットやその他のソーシャルメディアを通してイスラームを学ぶという善意を持っていますが、不注意であるか、誰

も指示していないため、本来なら避けるべきコンテンツを選択してしまう危険性をはらんでいる。

したがって、技術の発展は、特にすでに技術に精通している人々において、学習の場を変えてしまった。かつてペサントレンの宗教指導者（KIAI）から宗教を学んでいたが、現在では「グーグルkiai（指導者）」がある。デジタルの人々は、説明や豊かさなしに、唯一無二の真実を見つけることに慣れつつある。これらの特徴を持つデジタルの人々に直面して、特にインドネシアの社会は非常に多元的で多様であるため、宗教的節度の視点はフレーミングとして使用することが非常に重要である。

インドネシアの宗教生活に対するディスラプションの時代の影響の問題は、2018年12月末にジャカルタのアンチョルで一緒に対話を行った宗教家、文化家、学者、ミレニアル世代の主な関心事の1つである。この会議の結果、ジャカルタ議事録が成立し、ディスラプションの時代がインドネシアの宗教生活に変化をもたらしたことに同意した。このディスラプションの時代の行き過ぎは、知的および文化的混乱を生み出し、グループのアイデンティティの排除と強化を奨励します。破壊的な媒体としての情報通信技術は、瞬時に新しい文化をもたらすため、ゲームチェンジャーである。

その後、アンチョルフォーラムは、宗教的な人物、文化家、学者の実質的な資料やコンテンツを、コンテンツの重みを失うことなく若い世代が理解しやすいコンテンツやプレゼンテーションに変換するプログラムを開発するための戦略を提案した。

好むと好まざるとにかかわらず、このデジタルディスラプションの時代は、宗教における社会の複雑さの誕生を確かに奨励してきた。宗教的知識の源が浅いため、一部の人々は聖書の理解にテキストが多すぎ、過度の狂信を伴い、排他主義、過激主義、さらにはテロリズムにつながる。あまりにも怠惰で、聖文の内容を解釈できず、神の聖句とそうでない聖句を区別できない人がいて、他の人たちは、神のメッセージに興味に満ちたプライベートメッセージに再生する。これらすべての交差点は、人生の調和を引き裂く可能性のある紛争を引き起こす傾向がある。

この立場では、宗教的節度はもはや必須であるだけでなく、より良い宗教生活のために実施される必要性となっている。

残念なことに、このデジタルディスラプションの時代に、宗教界指導者と学者の両方から宗教的知識の権威を持っていると考えられている人々は、実際には深い知識を持ち、宗教的道德と精神の崇高な価値を提示する能力が非常に高いにもかかわらず、SNS空間を通じて公共の多様性の渇きを満たすためにあまり存在していないと感ぜられる。

この時代には、SNSに基づく保守主義を補うために、教義的な内容を含む宗教的リテラシーの発達が緊急に行われている。なぜだろうか。現在、浅い宗教的理解の繁栄に寄与する要因はますます複雑になっているため、家庭環境、

友情、または学校での授業から生じるだけでなく、止められないのはインターネット上で入手可能な情報からも生じる。

したがって、ディスラプションや変化の時代として知られるこの時代には、誰もが彼らが固執してきた宗教的实践を再考する必要があります。古い習慣になった習慣は、新しい習慣の存在によって挑戦され、現代との関連性を再び失う。

ディスラプションは、古いプレイヤーを新しいプレイヤーに置き換える可能性を秘めたイノベーションであり、古いプレイヤーや既存のプレイヤーにとって脅威と見なされる。この変化は、信念の中心にある古い習慣を殺すことになるので、時には心配で、要するに、ディスラプションという言葉から、ディスラプションとは、古いシステム全体を新しい方法で置き換えるイノベーションである。ディスラプションは、古いプレイヤーを新しい方法で置き換え、古いオールフィジカルテクノロジーを、まったく新しい、より効率的で、より有用なものを生み出すデジタルテクノロジーに置き換える可能性を秘めている。

ディスラプションの時代にあって、ミレニアル世代の存在感は勢いを増している。インターネットとソーシャルメディア(SNS)の設備により、ミレニアル世代は宗教当局(キヤイ、ウスタツ、宗教教師)を日常生活の重要な部分とは見なさない傾向にあり、前の世代とは異なり、ミレニアル世代はしばしば個人のニーズに焦点を当て、伝統的な価値観や宗教に非常に批判的である。彼らは道徳的理想が

危機に瀕しているときに宗教的権威に疑問を投げかけるように教えられてきた。その結果、彼らはより自立し、宗教的な指導のために様々な情報源に相談しました。私たちはしばしば、宗教的信念の客観的な説明が、権威のない情報源から得られた個人的な選択によって打ち負かされるのを目撃する。そうすれば、真理は特異なものではなく、多様になる。

過激で極端な宗教的コンテンツは、既存の伝統的な宗教当局との協議なしに消費することが容易になる。

その結果、一部のミレニアル世代のグループの宗教的思考は過激で極端な傾向がある。真実の源がもはや単一ではなく、多様であり、重要ではないとさえ考えられている状態は、ポストトゥルースとも呼ばれ、客観的事実の状況が世論の形成における個人の感情や信念に影響を与えるものよりも影響が少ない現在の時代を記述する条件である。

このミレニアル世代のグループにおける宗教的権威の確立は、非伝統的な宗教的権威の形成の上に構築することができる。宗教的経験における個人の経験のますます重要な役割のこの一般的な受け入れは、宗教的権威を創造する新しい方法になりつつある。この新しい宗教的権威は、宗教的権威の従来 of 構造に挑戦してきた。宗教的な背景では、宗教的な問題に関連する真理は、通常、教師によって与えられた教えに基づいている。モスク、スーラウ、ペサントレン、その他の宗教的な礼拝所で学ぶことは、宗教的な知識を得るための媒体である。人々は宗教の理解を見つけるためにこれらの場所で勉強する

だろう。実際、彼らの多くは、教師と一緒に勉強するためだけにわざわざ来なければならない。

宗教に対する善良で正しい理解に対する人々の必要性は、現在のディスラプションの時代(産業革命4.0としても知られている)においても必要である。宗教はインドネシアの多宗教社会の生活の中で強い地位と役割を占めているので、公共生活における宗教の実施は国家と憲法の基礎に従順でなければならない。近年、インドネシアの宗教生活は、排他主義や宗教的過激主義の強化という形で深刻な課題に直面している。この現象は、社会、国家、国家における生活のさまざまな空間で症状がある。混乱の時代はインドネシアの宗教生活に変化をもたらした。

では、ディスラプションの時代と宗教的な挑戦とのつながりはあるのだろうか。確かにある。ディスラプション時代の行き過ぎは、知的、文化的混乱を生み出し、集団アイデンティティの排除と強化を奨励した。情報通信技術は、瞬時に新しい文化をもたらすため、ゲームを変える媒体になった。ミレニアル世代の若者は、もはやそれぞれの専門分野の専門家である宗教指導者に宗教を学ぶのではなく、インターネットで学び、適切な宗教的科学的権威を持たないかもしれないオンライン/デジタルベースのサイトに尋ね、Google検索エンジンを通じて宗教的解釈をネットサーフィンする。このままでは、伝統的な宗教当局に脅威を与えることになるだろう。

このような背景から、ミレニウム世代がディスラプションの時代に直面して戸惑うことなく、集団的常識を強化するための文化活動を構築するためのコミュニケー

ション戦略を策定する必要がある。宗教的な人物、文化主義者、学者からの基本的な資料やコンテンツを、ミレニアル世代の若い世代がコンテンツの重みを失うことなく理解しやすいコンテンツやプレゼンテーションに変換するには、手順が必要である。

宗教は、儀式や形式的な側面だけでなく、霊性と道徳性へのガイドとしての役割に必ずや

我々は、ミレニウム世代の宗教リテラシー活動をリードし、彼らが宗教的に識字率を発揮できるようにするための具体的な措置を講じる必要があるが、それはすべての宗教を強化

化することを目的としている。宗教は、すべての人が簡単にアクセスできる儀式や形式的な側面だけでなく、霊性と道徳性へのガイドとしての役割に必ずや必要がある。それに応えなければ、ディスラプションの時代はドミノ効果をもたらし、宗教生活の秩序を損なうだろう。

宗教分野におけるディスラプションの時代のドミノ効果に対するこの対応は、宗教省の背後にあるものであり、宗教調和センター(PKUB)を通じて、2018年12月末に宗教家、文化家、学者、ミレニアル世代、メディア実務家の間の宗教間対話を促進し、人々の団結を維持するための解決策を見つけるために一緒に対話した。その後、この対話は「ジャカルタ議事録」として知られる相互合意につながり、2019年に宗教省のプログラムを策定するための精神として使用された。

第3章

宗教的節度の強化及び 実施する戦略

第2章では、宗教的節度とは何を意味するのか、そして宗教的節度がインドネシアの宗教生活の文脈において重要である理由について詳しく述べてきた。最後の第3章では、個人、家族の生活、社会、国、国家の双方において、宗教的節度を強化、制度化、および実施する戦略を探る。

社会の最小単位として、国民のすべての市民にとって教育の最初で最も重要な場所である家庭は、宗教的節度の実践を教え込み、育てる大きな可能性を秘めている。すべての伝統を伴う宗教的節度の実践は、自然に起こると仮定することはできませんが、国家の個々の市民の価値が形成されるため、種をまかななければならない。

「サキナ家族」という宗教省の概念は、サキナ家族が家族を安心させ、社会、国家、国家に莫大な利益をもたらす平和な家族であることを示している。もちろん、そのような家族は、正義、無視、バランスの価値観に基づいて構築されている。

これらの高貴な価値観は、宗教省のオフィスでのカウンセリングとガイダンスから、各地区の宗教事務局（インドネシア語でKantor Urusan Agama/KUA）のサービスレベルに至るまで、あらゆる面でのさまざまな家族開発プログラムを通じて、宗教省によって浸透させることができる。宗教省は、有効な宗教情報源から思考の枠組みと枠組みを開発している。

宗教省の任務は、生き物の命令の派生物として、インドネシアの福祉を実現することであるという信念地球の福祉を実現するために、その一つは、コミュニティ教育を通じてインドネシアの家族に謙虚なサービスを提供している。

宗教省は、この人道的謙虚さを実行することを楽観視している。なぜなら基本的に、この省の人々は、正義、バランス、寛容、不寛容の価値などの宗教的節度の重要な概念を非常によく理解しており、非常に高価な初期資本を持っているからである。暴力、そして地元の伝統の知恵への敬意です。この理解は、公教育の貴重な内容に強化される。

省の人々を巻き込んだ家族ベースの宗教的節度の観点を強化するモジュールテストでは、次のフレームワークが得られた。

人間は宗教的な存在として、国家の利益を通じて地球の利益を実現するために、地球の管理者としての任務を受け入れる神のしもべ。宗教省の場合、この任務は、サキナー家の優れた教育戦略を通じてインドネシアの人々に最大限のサービスを提供することで実施される。

宗教省は、インドネシア社会の最小単位が、自国の尊厳を愛し、その尊厳を守り、行動し、寛容に振る舞うという強いコミットメントを持っている市民を生み出すように、家族を介した宗教的節度の世話と強化の先鋒となるよう努力し続け、先住民族の伝統や慣習を積極的に尊重するだけでなく、公平でバランスの取れた方法で誰に対しても、平和の態度を促進し、暴力から遠ざける。

宗教は、精神的、道徳的、倫理的な国民的および国家的生活の基盤になることができません。なぜなら、インドネシアは宗教的価値観と切り離すことができないからです。すべての宗教は、創造主である全能の神に完全に服従することを教えていて、この神への奉仕は、神のすべての指示に従う準備ができていているという形で表される。人間は神のしもべとなり、他人の奴隷にはならず、他の人間の奴隷にもなりません。ここに、神の被造物である人間同士の正義の価値の本質がはっきりと見て取れる。

人間は優れた考えをもって創造された生き物として、地球を導き、管理する使命を与えられた神のしもべにもなります。たとえば、カトリックの宗教的伝統では、人間は世界における神の像と呼ばれている。

仏教は、人間の義務は善を行うこと、善を広めることであると主張している。イスラームの教えでは、人間はカリフフィルアード、つまり地上における神の代表者であると定められている。これは、相互利益を生み出すために地球を管理する必要があることを意味します。こ

れは、宗教によって教えられる人生の最も重要で最も強力なビジョンの1つである。

人間の限界のために、国家と国民は、このタスクの範囲の文脈となり、相互利益、公正で繁栄している国家と国民の繁栄、相互利益を達成するために、人間が住んでいる地球の断片をどのように管理するかということになる。この思考のパラダイムは、国を愛することが信仰の一部であるという信念の形で、すべての宗教に見ることができる。

我々の前任者である宗教家たちは、一般的に、ナショナリズムと宗教は相互に補強し合う一対の翼のようなものであると教えています。宗教と国籍のバランスは、実際には国家の利益のための大きな資本になる。

宗教的節度は、インドネシアの地球の利益を実現するために実践するのに最も適切な価値と実践で、インドネシア国民の多様性を管理するには、適度で公正なバランスの取れた精神的態度が鍵となる。国と国家の発展に貢献する中で、すべてのインドネシア国民は、平和で平和な生活を共に発展させる平等な権利と義務を持っており、これが実現できれば、すべての国民は間違いなく完全なインドネシア人になり、同時に完全に宗教を実践する人になることができる。

国レベルでの実施に関して、最初の議論で使用された命名法は、実際には宗教的節度の「主流化」であった。検討の結果、この言葉は「強化」に置き換えられたが、そのプロセスの実質を完全に排除することはできなかった。主流化自体は、最初は余白にあり、限られたサークルだけが知っていて、重要性が低いと見なされていた

たもののアイデアを共通の財産にし、公に知られ、平等に扱われ、注目の的となるための努力として理解されている。

ジェンダーの主流化は、例と類推として使用できる。ジェンダーの主流化は、経験、願望に注意を払う政策やプログラムを通じて、人間の生活の多くの側面（家庭、コミュニティ、国）でジェンダーの平等と正義を達成し実現するために合理的かつ体系的に実行される戦略として定義されている。それは女性と男性のニーズと問題である。

同じ論理を借りれば、宗教的節度の主流化は合理的に実行される戦略であり、インドネシア政府の人材開発（Human Resources/HR）を構築する際に相互に受け入れられる視点と思考のプラットフォームとして、適度な宗教的視点、態度、行動を体系的に行うということである。

「主流化」という言葉の使用は、これまで宗教における節度の考え方や実践が広く知られていなかったり、ほとんどの宗教家によって実践されていなかったりすることを示すためのものではない。穏健な命名法、またはイスラム教の文脈におけるワサティヤは、長い間公の言説でえあったが、それは依然として個人的なものであり、インドネシア政府の人材開発（HR）のマクロ政策の一部ではありませんでした。次に、宗教における適度な視点、態度、および行動が国家政策の不可分な部分になるように強化するための努力として意図されている。

将来の州の予測では、人材の育成が重要であり、国家はその分野の専門家であるテクノクラート、科学者、

および専門家を生み出す可能性がある。奨学金も彼らに与えられた。これは国家に破壊的な影響を与える可能性があるためである。

2019 年 1 月 31 日時点の財務省のデータに基づくと、ファンド管理機関 (LPDP/ Lembaga Pembiayaan Dana Pendidikan) の奨学金プログラムは 20,255 人に達した。この合計のうち、9,882 人が現在も在学中で、7,108 人が卒業している。彼らは、民族や宗教に関係なく、インドネシア国民が支払う税金から国が教育資金を調達している優れた人材で、彼らが排他的な宗教的信念のために国に破壊的であったとしたら、それは確かに皮肉なことになる。そこに含まれる価値観は、国の穏健な性格を構築する上での主要な変数の1つでなければならない。インドネシアは実際に宗教的価値観と切り離すことができないため、宗教は国と国家の生活の中で精神的、道徳的、倫理的な基盤になることができないからではない。国家の義務を果たすことは宗教の教えを実践することの一種であるため、インドネシアが宗教の教えを実践することは国家の義務を遂行することと同じであるというグローバルな宗教コミュニティを導き、鼓舞することである。宗教の教えのために戦うという名目で国家を拒絶する必要はない。

インドネシアの宗教の顔が世界平和の顔をも決定することは否定できない。2010 年から 2050 年までの植物の世界人口あたりの予測に関するピュー リサーチ センターの研究結果に基づくと、世界全体のイスラム教徒人口は 23.2% から 29.7% まで急速に増加し、同じ時期に、インドネシアは人口ボーナスを受け取る。つまり、

世界の一般人口が高齢化しているとき、インドネシアには生産年齢の人口が豊富にあり、イスラム教徒が過半数を占めている。

生産年齢とイスラム教徒が適切な宗教的考えを持たない場合は、人口ボーナスは人口統計学的災害に変わり、インドネシア共和国は分裂の脅威にさらされることは想像に難くない。それ以上にインドネシアは世界で4番目に人口が多いため、確実に世界の状況に影響を与えることになる。その結果は選択の余地がない。私たちは、この国が世界に積極的に貢献できるように、私たちの社会の視点、態度、宗教的行動を形作ることに介入しなければならない。

これは、宗教的節度がイスラム教徒のみを対象としているということだろうか?確かにそうではない。前述したように、宗教的節度は他の宗教のすべての信者に適用される。宗教的過激主義への解決策は、イスラム教徒グループだけで表明するのに十分ではない。すべての宗教、すべての国、学者、文化人、政治家、そしてあらゆる職業の人々もそれを話さなければならない。

宗教省自体は、穏健、本質的、包括的、寛容、調和的、非暴力的な宗教的価値観の内面化と、多様性と多様性の尊重を伴うインドネシア人的資源開発の創出に大きな関心を持っている。

したがって、宗教省は、主要な主流化の取り組みにおいて主導的な部門となった。宗教的節度という言葉は、命名法上は今しか知られていないが、実際に調和を維持するという実質的な使命は、宗教省の誕生当初から実行されており、現在に至るまでその勢いを増し続けて

いる。より体系的かつ構造化された方法で宗教的節度を強化している。

A. 宗教省における宗教的節度

宗教省（以前は宗教局）の設立の歴史は、占領中の日本の政策に関連している。3年半にわたる占領（1942年から1945年）の間、日本は宗教事務局（シュムブ）とインドネシア・ムスリム・シュロ・カウンスル（マシュミ）を導入し、ムスリムに最初の宗教を実現する機会を与えました。彼らの願望の制度化である。1946年1月3日に設立された宗教省は、イスラム教徒の政党の主張の結果である。

実際、宗教省は宗教を定義することによって信教の自由の保証に制限を設けている。この観点から、インドネシアは宗教の自由という問題において「宗教」と呼ぶことができるものの定義が、信仰のさまざまな伝統や倫理観によって異なるという貴重な教訓を提供している。

1952年に宗教省は、信仰の流れとして知られる新しい宗教運動と闘うための特別機関を設立した。この信念の流れは「宗教」ではないため、団体はPAKEM (Supervisor of Community Trust Flow)として知られている。これまでのところ、この機関は、宗教の公式の教えから逸脱していると見なされる宗教団体を監督および抑圧するための州固有の局として活動している。

Alamsjah Ratu Perwiranegara宗教大臣の時代、インドネシア政府は1980年6月30日に宗教団体間のコミュニケーションフォーラムを設立した。このフォーラムは、対話、討論、セミナー、討論などの一連の活動を、国

際、国内、地域、地区レベルまでの地域レベルで実施している。

さらに、一部の地域では、さまざまな宗教的背景を持つ宗教団体の間でコミュニケーションフォーラムが形成された。たとえば、北スマトラでは宗教間協力庁(BKSAUA North Sumatra)として知られており、この機

宗教省は、宗教的節度を政府の観点から、国の発展を計画し、その人的資源を構築する際の一部にすることを目指している。

関は1969年に設立され、現在も機能している。地方政府から定期的に資金提供を受けているこの機関は、州、地区、準地区、村のレベルで形成さ

れている。北スマトラには、宗教間コミュニケーションフォーラム(FKPA)と呼ばれるものもある。FKPAはサブ地区レベルで設立され、(地方歳入歳出予算) APBDからの資金によって支援されました。一方、南スマトラには、南スマトラ人民コミュニケーションフォーラムまたはFOKUSSがある(Sila, 2017:122)。

一方、ジョグジャカルタ、メダン、アンボンの3都市には、宗教の調和を研究するための3つの機関が設立された。この機関は、宗教調和研究所(LPKUB)と呼ばれており、本質的に新秩序政府全体を通して、多元的なインドネシア社会の真っ只中に調和を築くことを目的としたいくつかの政策が生み出された。いずれも、先に説明したAlamsjah Ratu Perwiranegaraが提唱したハーモニー三部作のコンセプトの実現を目指している。

宗教省が時々、この国の生活の中で人々が一人であるだけでなく、多くの異なる人々であることをより認識

するよう宗教団体に呼びかけようとしていることは明らかで、さらに、政府は、宗教的調和の創造とそれを社会化することを奨励する法律や規制の存在を積極的に促進している。

制定された法律および規則の一部を以下に示す。まず、宗教放送の手続きを規制する枠組みの中で、政府は、宗教放送の実施手続きに関する1979年の宗教大臣および内務大臣令第1号を発行した。および1979年1月2日付のインドネシアの宗教機関に対する海外援助。第二に、宗教を保護するために、宗教の誤用および/または冒涇の防止に関する1965年のインドネシア共和国大統領令第1号と、冒涇に対する刑事罰を規定する刑法第156a条です。宗教的調和の維持、FKUBのエンパワメント、および礼拝所の設立における地域首長の義務に関して、政府は2006年のPBM 第9号および第8号を発行した。

さまざまな宗教政策の出現は、認めざるを得ないが、宗教における穏健な態度を完全に高めたり、紛争を回避したりするわけではない。しかし、宗教的規制がなくなると、宗教紛争がより頻繁に発生する。確かに、政策の誕生は、宗教対立を防ぐことができる単一の変数や万能薬ではない。しかし、宗教的多元主義の管理を維持し、インドネシア社会の文化的小および宗教的に多様なグループ間の摩擦を回避するには、他の多くの要素が必要である。

Lukman Hakim Saifuddinが宗教問題大臣として指導していた間、少なくとも3つの戦略を通じて、宗教的節度を強化するための努力が体系的かつ継続的に行われ

た。a) 宗教問題の考え方； b) 拘束力のあるプログラムや政策への宗教的節度の制度化； c) 国家中期開発計画(RPJMN) 2020から2024までの宗教節度の視点の統合である。

B. 宗教的節度に関する社交

インドネシア人の間で、思考、態度、宗教的行動の中間の道を持つことの重要性を認識させるために、宗教的節度のアイデアと物語をできるだけ多くの聴衆に広めることが行われている。これらのさまざまな形態の社会化は、宗教的節度が何を意味するのか、なぜ宗教的節度が必要なのか、そしてそれを個人、コミュニティ、国家、および国家の生活にどのように実装するかを説明することを目的としている。

インドネシアの文脈では、特に宗教省の範囲内で、宗教的節度の社会化が体系的に始まり、少なくとも当初から、Lukman Hakim Saifuddinは、JokowiとJusuf Kalla政権の間、再び宗教省大臣を務めた。

良い意味で、宗教における「中道」という考えは、実際に、「中道を目指す:インドネシアにおける宗教の調和」(1997年)という本を出版したTarmizi Taherなど、以前の宗教大臣によって提唱されてきた。この本は、もともとTarmizi Taherが宗教大臣(1993年から1998年まで)を務めていたときのスピーチのテキスト集であり、4つの主要なテーマ、すなわち、パンチャシラと宗教の関係、インドネシアにおけるインドネシアのイスラム教徒の地位と貢献を反映している。グローバルな文脈、中道の人々（アラビア語でウンマトンワサン）とし

でのイスラム教徒の概念、および科学と技術に関するイスラム教の見解である。

なのでこの本では、節度の考えは、Tarmizi Taher が提起したテーマの1つとしてのみ言及されている。Suryadharma Aliが宗教大臣としてリーダーシップを発揮するまでは、節度の考え方は宗教省の主要なビジョンとして実際に使用されておらず、国家レベルでそれを強化する努力もなかったので、依然として宗教コミュニティ間の調和と調和を維持するという文脈では非常に部分的に反映されている。

Lukman Hakim Saifuddinのリーダーシップの時代に、宗教的節度は、常に中間の立場を取り、常に公正に行動し、宗教的理解と実践において極端にならないようにすることによって、視点、態度、および行動として策定された。それ以来、宗教省は、国の発展を計画し、その人的資源を構築する上で、宗教的節度を政府の視点の一部にしようと努めてきた。

なぜこれが行われるのか？考慮事項の1つは、国としてのインドネシアの独自性によるもので、それは宗教的な国家ではないが、日常生活、コミュニティ、国家のすべての側面を宗教的価値観から切り離すことはできない。したがって、宗教国家ではないが、インドネシア政府は、特に宗教省を通じて、宗教に含まれる高貴な価値観を浸透させようとしている。それはパンチャシラの哲学に基づいて、高貴で、道徳的で、倫理的で、文化的で、文明化されている。

政府は、知識と宗教の両方に基づいて、インドネシアの人々の身体的および精神的発達のバランスをとる

というビジョンを持っており、宗教的価値観の内面化は、国家のコミットメントを強化するものであり、そうでなければそれを弱体化させるものではないと期待されているため、植え付けられる価値観は包括的、寛容、調和的、非暴力的であり、違いを喜んで受け入れ、多様性を尊重するものでなければならない。これこそが宗教的節度に込められたメッセージであり、宗教の本質に立ち返って人間の尊厳を守ることである。

宗教的節度には、バランス、単純さ、礼儀正しさ、兄弟愛の原則があり、宗教的な表現は丁寧に表示され、宗教は兄弟愛を強調している。それぞれの違いの中で、礼儀正しく、お互いに共感している。宗教的節度の本質は、列島全体のコミュニティによって長い間実践されており、多様性を管理するメカニズムとして機能する地元の知恵になっている（Sila, 2017）。本質的に、地元の知恵は、祖先の遺産の宝物としての宗教的価値観に由来し、太古の昔から宗教紛争を解決できることが証明されてきた。宗教的節度は、群島の人々の基盤と哲学を形成する基本的な価値観です。すべての宗教は基本的に同じ人間的価値を教えているため、この価値はすべての宗教に存在する。

Lukman Hakim Saifuddinは、宗教的節度のビジョンを持った宗教大臣として、スピーチのたびにそれを挿入しただけでなく、全員スタッフにそれをさまざまなプログラムに翻訳するよう指示した。彼はまた、調和と相互理解を生み出すために、宗教的人物、文化的人物、学者、およびミレニアル世代の激しい対話を開始した。

例えば、2018年11月、宗教省はジョグジャカルタで宗教的集会と文化オブザーバーを開催し、宗教的および文化的発展の利益を調整しました。会議は「ジョグジャカルタ協定」を生み出し、それは国と州、文化と宗教の文脈で争われないことを求めました。インドネシアにおける文化の発展は、宗教の原則的価値観を尊重しなければならない、逆に宗教の発展は、インドネシアの文化的多様性、伝統、慣習の破壊につながるものであってはならない。

文化のおよび宗教的人物の同意に応え、宗教問題大臣のLukmanHakim Saifuddinは、彼の反応を具体的に伝えた(Kompas、2018年6月11日)。国と州、文化と宗教は争わず、文化の発展的価値を尊重すべきであり、宗教の発展は慣習や文化の多様性を破壊するものでもない。

宗教コミュニティの調和と調和をさらに強化するために、2018年末に向けて、宗教省はジャカルタのアンチョールで別の宗教間および世代間の対話を開催した。50人以上の宗教指導者、文化人、学者、ミレニアル世代、およびメディアが出席し、宗教の高貴な価値観を減らし、出生、法的小説および政治的形式主義の側面を強調することに限定される傾向を示す宗教的生活行動の現象について議論し、精神的な側面を無視しながら宗教の道徳的であった。

アンチョール対話は文書「ジャカルタのインドネシアにおける宗教生活の議事録」を作成し、その大部分において、宗教的節度を強化することの重要性についての議論を補強した。たとえば参加者は、インドネシアの国

民生活や共同体生活の文脈において、宗教は価値観の非常に重要な源であり、日常生活から切り離すことはできないと考えられていることに同意した。

現在の文脈における宗教生活はまた、教化とソーシャルメディアでの瞬間的でペースの速い読書の利用可能性による知識の沈滞の現象を示しているため、味覚ではなく感情を前面に押し出している。その結果、この現象は宗教における保守的な態度を生み出し、確かに、宗教の基本的な性格としての保守主義は、宗教の教えと伝統を維持する努力として理解される限り、問題にはならない。しかし、保守主義が宗教的排除や過激主義に変わり、政治的利益の道具になると、深刻な脅威になる可能性がある。宗教的排他性と過激主義は、道徳的な道徳的ガイドであるだけでなく、文化的創造とインスピレーションの源でさえある宗教の主な役割を実際に遠ざけている。

さらに、排他主義と宗教的過激主義は、宗教の教えそのものの本質を縮小し、否定し、現在の文脈では、創造性を抑制し、宗教的価値観の内容を挿入することに創造的であったデジタル空間に若い世代の安心感を排除した。

宗教的排除と過激主義につながる保守主義は、必ずしも宗教的ではなく、不正(政治的または経済的)、法的形式主義、宗教の政治化、および文化のあり方のために不安定な要因によって引き起こされることがよくある。文化圏での戦いは戦略的な戦いになります。したがって、宗教を文化から切り離すことはできません。この最

後の点は、節度の精神が宗教的および文化的関係を再接着させる強力な理由になる。

宗教と文化の関係を強化することは、一緒に追求することが非常に重要で、インドネシアは、多様性と社会資本のおかげで、多くの文化的儀式、祭り、さまざまな宗教儀式を受け継いでおり、それらを文化媒体として管理し、普及の手段とすることができる。寛容、国民的連帯、平等に基づく国民的価値はたとえば、西ジャワ州ボゴールのチャンペアにあるホクテクビオ寺院などに見ることができる。毎年この寺院では、グループ、民族、宗教を超えた出会いと対話を象徴する征服祭または中国の祈りが開催される。中国のアイデンティティー、キリスト教、カトリック、仏教とイスラム教のアイデンティティーとの出会いは、宗教的な人々を枠組みの中で結びつけ、包括的な市民にする。

ジャカルタ議事録文書はまた、国家イデオロギーに取って代わる宗教イデオロギーのために戦ういくつかのグループの宗教的見解の強化に特別な注意を払った。これは、たとえば、多くの地域の国家政策における宗教の正式化の強化、または公共サービスと市民権を規制する政策において明らかである。

それは宗教的節度の本質を強く示しているため、ジャカルタ議事録の精神と精神は、2019年に全体的な宗教省プログラムに翻訳されることが合意された。つまり、一方では宗教の本質的な価値を内面化し、もう一方の宗教共同体の調和と調和である。

2019年は、宗教的節度を強化する機運のピークと見なすことができる。2019年1月23日から25日にジャカル

タで開催された宗教省の全国作業会議（インドネシア語でRakernas/Rapat Kerja Nasional）において、Lukman Hakim Saifuddin宗教省大臣は「人々の団結のための節度:宗教問題全国作業会議の2019年省の解釈」と題するブリーフィングスピーチを行った。

演説の中で宗教省大臣は、宗教省職員のすべての指導者に理解され、社会化され、プログラムに具現化され、そしてもちろん実行されるように、3つのマントラを広めた。3つのマントラとは、宗教的節度、コミュニティの団結、データの統合である。その説明の中で宗教省大臣は、2019年に宗教省のプログラム全体を活性化する精神になるように、宗教的節度を要求した。その後、彼は2019年を宗教節度の年と宣言した。これは、2019年を「国際節度年」とした国連の設立に沿ったものである。

宗教省大臣は、宗教省が宗教的節度のビジョンを通じて達成しようとしている成果の1つは、団結と人々への完全な奉仕であると説明した。そして現在浸透しつつあるデジタル時代において、宗教省が所有する宗教データを統合することなしに、それを実現することはほとんど不可能である。

それ以来、宗教的節度の社会化が激化し、宗教的節度の概念的な定式化を最終化するために、さまざまなワークショップ、フォーカス グループ ディスカッション、およびその他の活動が実施されてきた。宗教的節度に関するこの本は、宗教的節度に関する質問と回答に関する本でもあるが、作成された製品の1つでもある。クライマックスは、以下で具体的に説明するように、2020

年から2024年までの国家中期開発計画 (RPJMN) に含めることにより、宗教的節度を促進し、取り組みを強化することである。

C. 宗教的節度の制度化と実施

宗教的節度の制度化とは、宗教的節度を、測定可能で持続可能なプログラムや活動に変換するために、この概念を実装するための戦略を具体的に考える機関、機関、構造、またはユニットに変換することを意味している。宗教的節度の実施は、宗教的節度の指標で述べられているように、宗教の教えの本質的な価値を内面化する、国家へのコミットメントを強化する、寛容を確認する、宗教の名の下にあらゆる種類の暴力を拒否するなど、いくつかのことは通じて行うことができる。

宗教的節度の実施は、宗教的節度の指標で述べられているように、宗教の教えの本質的な価値を内面化する、国家へのコミットメントを強化する、寛容を確認する、宗教の名の下にあらゆる種類の暴力を拒否するなど、いくつかのことは通じて行うことができる。

特に宗教的本質的価値の内面化に関連して、これは個人の生活、社会、そして国家や国家の両方で実施されるべき非常に重要なことであり、宗教的節度は、ハルフィヤや形式主義的な宗教的理解ではなく、実質的な強化に重点を置いているため「不可欠」というキーワードには下線を引く必要がある。宗教の本質的な価値観の内面化は、宗教的節度の際立った特徴でもあり、脱過激化運動は、宗教を内面化するのに十分な部分を与えずに、超

保守的な宗教的理解、または穏健であるという正しい線を回復しようとする傾向があるだけだ。

宗教的節度の文脈において、宗教的教えの本質へのコミットメントは非常に重要で、宗教的見解、態度、行動を緩和することで、宗教の教えの本質が強調される。例えば、宗教の存在の本質の一つは、神の造られた高貴な生き物としての人間の尊厳を維持することで、宗教の名の下に人間の尊厳と尊厳を損なうような見解、態度、行動がある場合、それは実際には宗教的節度の価値に反している。

宗教の本質は、宗教的教えのあらゆる儀式に確かに存在する。それぞれの宗教儀式の形式は異なるが、本質的なメッセージは同じで、宗教の教えの本質を知ること、それぞれの違いの出会いの場を見つけるために重要である。この儀式は、宗教信者と宗教内の信者の間の関係の両方の文脈で適用される。宗教的節度は、すべての宗教共同体がその宗教的教えの本質を理解するときに、より簡単に作成できる。

今まで述べたように、国家へのコミットメントは、国家のイデオロギーとしてのパンチャシラの受け入れ、およびパンチャシラを脅かすイデオロギー的挑戦に対する態度に特に関連する、国籍の基本的なコンセンサスへの忠誠度を確保するための非常に重要な指標でもある。国家へのコミットメントの一部として、憲法および以下の規則に含まれる国家の原則を受け入れることで、ある人が国家協定へのコミットメントを失った場合、その人は極端な協定から抜け出したため、穏健な性格を失ったと見なすことができる。

周知のとおり国家の基礎としてのパンチャシラは、さまざまな宗教的背景と思想を持った国の創設者たちの崇高な合意として解釈できる合意の集大成で、高貴な国民的合意が持続可能であることを確実にするために、国家のすべての要素はそれを可能な限り強固に保つ必要がある。多くの調査が示しているように、最近ますます多くのコミュニティグループが、一般の人々だけでなく、ASN (国家民事機関) やBUMN (国有企業) の従業員、学生、学生などの間でも、パンチャシラのアイデオロギーに疑問を呈している。パンチャシラのアイデオロギーを破壊するグループは、彼らのアイデオロギーを継続的に売り込むための非常に広い社会的空間を手に入れ、国家が所有する機関や施設を衰退させることさえある。

国家のコミットメントは、結果として、インドネシアにおける宗教的節度の基盤と見なされなければならない。インドネシア人の創始者が部門別のエゴイズムを提唱した場合、アイデオロギーの妥協はない。イスラム教グループは、イスラム教を国家の基盤にしようとするイスラム主義のアイデオロギーと、国家の領域に宗教を激しく拒否する「世俗的なナショナリスト」グループを必死に擁護する。

この状態でのコミットメントは、さまざまな問題と戦うための基盤であり、持久力になる。コミットメントが強い場合、彼はアイデオロギーの問題を中和することができる。逆に、国家の関与が弱いと、さまざまなアイデオロギーウイルスが簡単に攻撃して麻痺させる。したがって、国家のコミットメントは、インドネシアの国家アイデオロギーの強さに影響を与える免疫力として明らかで、

国家のイデオロギーを守る努力は、すべての市民と国家機関の普遍的な義務である。

その取り組みの1つの形式は、民事および軍事機関(TNI) 内の両方で、国家民事機関(ASN)の募集に宗教的節度の観点の条件を付加することである。なぜASNなのか？ 彼らは、憲法の義務を確実に履行するために国に雇われている人々だからである。彼らは国の存在の守護者でなければならない。国家警備隊が実際に宗教的節度の基盤を弱めているとすれば、これは国家的コミットメントの脆弱性をさらに加速させるだろう。

多くの調査で、依然としてパンチャシラに疑問を呈し、不寛容な行動をとるASNの数が確認されている。したがって、政府は、基準の1つとして宗教的節度に関する洞察を含む国家公務員(TNIおよびPolriを含む)の募集システムを作成する必要がある。この間、ASNの採用、キャリアの多様化、および役職の昇進は、この問題に強い圧力をかけていなかったため、ASN自体が国のアイデオロギーを弱体化させたという皮肉がある。

寛容の実装は、人または人々のグループが、さまざまなグループ、さまざまな民族、人種、文化、宗教、さらにはさまざまな性的指向と共存する精神的準備として解釈できる。したがって、寛容とは、他の人が信じる権利、信念を表明する権利、意見を表明する権利を妨げないように、スペースを与える態度である。

前のセクションで寛容について話したが、寛容とは、違いを受け入れる際に、オープンで、寛大で、自発的で、穏やかであることを意味することを強調した。ここで強調しておく必要があるのは、他の人に違いを楽しん

でもらうだけでは寛容ではないということで、この態度は寛容であると言えるが、このタイプの寛容は、ある日異なるグループ間で問題が発生した場合に脆弱になる。したがって、寛容に続いて、対話、相互学習、理解に心を開いて、これらの異なるグループからの社会的結束が構築されるようにする必要がある。それ以上に、寛容が築かれ続けると、さまざまな人や集団も自分の一部であり、その存在を守らなければならないという態度が築かれます。したがって、傷ついたグループがあれば、基本的に私たちも傷つく。

インドネシアの人々は、寛容な国家になるための強力な社会関係資本を持っていて、この性格は国際外交におけるインドネシアの重要な政策になる。インドネシア社会は、宗教、文化、その他の社会的側面の両面で非常に多様性に富んでいるが、インドネシアの人々は調和して生きることができる。これは非常に長い社会的プロセスを経て形成されており、節度で寛容というのは、いきなりの性格ではなく、長い歴史の過程を経て構築されたものである。

インドネシアは寛容な国として知られているが、不寛容な種が損害を与えることを許すと、インドネシアは損害を受ける可能性があります。当たり前だと思っている様々な違いがいきなり問われ、相手を処刑する手段として利用されることもある。不平等多数多数関係は、不寛容の成長に影響を与える。その結果、社会的寛容の余地が狭まった。これは、異なるグループ間の相互理解のための対話を構築し続けることによって、違いをありの

ままに受け入れ、寛容の地平を開拓し続けることによって、注意を払う必要がある。

寛容は、宗教の問題だけでなく、社会的および政治的寛容など、多くの側面に関連している可能性がある。実際、政治的アイデンティティが強化される中で、政治的寛容と宗教の問題は、エージェントと強化のためにますます重要になっている。同様に、宗教間の寛容、つまり宗教間の寛容と、1つの宗教内の異なる宗派や流れに対する寛容の両方が、注目を集めるために重要である。

宗教的節度の実施は、これらの相互に関連する側面で明らかで、この場合、国家のコミットメントは、宗教の名の下に不寛容と急進主義のリスクに対する解毒剤となり得る持久力の強さとして位置づけることができる。持久力が強い人は、不寛容や過激主義の影響に耐える傾向がある。逆に、言質が低い人は、不寛容や急進主義の影響を受けやすくなる。パンチャシラ、1945年憲法、多様性における統一、インドネシア共和国など、国民的コンセンサスを強化することによって国家への言質を強化することの重要性がここにある。宗教的節度には、市民としての義務を果たすことが宗教的教えの実践の表れであるのと同様に、宗教的教えの実践がインドネシアを保護するというコミットメントの不可分な部分であるという宗教的認識を平等にするという使命を持たなければならない。

この取り組みは容易ではない。最初に、特に州当局からの宗教的節度の考え方の合意と相互承認が必要であり、次にコミュニティからの同意が必要だからである。なので第一の強化戦略、すなわち前述の宗教的節度の概

念の社会化と普及は、すべての関係者が緊急性と重要性を理解できるように、一貫して継続的に実施することが非常に重要である。千歩は常に最初の一步から始まる。認識と頻度が同じである場合、次の取り組み、つまり宗教的な星座モードの制度化に踏み込んで、より構造化および計画することができる。

宗教的節度を制度化する先例を他の国で見つけるのは、実際、存在しないわけではないが、容易なことではない。たとえばクウェート政府はかつてクウェートのアウカフ・イスラム問題省の監督下に形成されたシンクタンクである国際節度センター(al-Markaz al-amiAlami lil Wasathiyah)を設立した。この機関は、研究や学術活動を行うだけでなく、節度ネットワークの提唱、トレーニング、開発も行っている。

言説の主流化に加えて、宗教省における宗教的節度の制度化は、イスラム教育総局（インドネシア語で Pendidikan Islam/Pendis）に宗教節度作業部会（インドネシア語でKelompok Kerja/Pokja）を設立することによっても行われている。宗教節度作業部会は、宗教省のプログラムおよび活動、特に教育局の支援下にあるプログラムおよび活動における宗教節度のビジョンの実施を監督する任務を負っている。

RPJMN（国家中期開発計画）に宗教的節度を統合することは非常に重要です。なぜなら、この文書は省庁や機関が戦略計画を準備する際の指針となるからです。

2019年6月、Lukman Hakim Saifuddin は、宗教大臣として、今回はイスラム高等教育の文脈で、宗教的節度の制度化

の方向性を再び伝えた。ルクマン氏は、インドネシア国際イスラム大学（UIII）の初代総長としてKomaruddin Hidayat氏を就任させた際に、次のように述べた。

就任式のスピーチで、ルクマンは、Jokowi-Jusuf Kalla政権の2014年から2019年までの間に国家戦略計画（インドネシア語でProyek Strategis Nasional/PSN）となったUIIIの設立は、本質的に3つの相互に関連する事柄の現れであったことを思い出した。インドネシアらしさ、イスラーム、人間性である。したがって、Lukmanは、UIIIがイスラム教の文脈で「House of Moderation」として機能できることを望んでおり、これはイスラム教の価値観を集め、研究し、広める場所になる。それ以上に2016年の大統領令第57号により建設が国家戦略プロジェクト(PSN)の地位を与えられたUIIIは、実際に、インドネシアにおける穏健なイスラム文明の研究の中心になることが期待されて、世界へのインスピレーションを与えた。

Lukman、UIIIの「House of Moderation」が、国家中期開発計画（RPJMN）の2020年から2024年までである。これは確かに長いプロセスであり、忍耐を持って従う必要があり、2005年から2025年までの国家長期開発計画に関する2007年法律第17号に従い、2020年から2024年までのRPJMN自体は長期計画の国家長期開発計画（RPJPN）の最終段階になる。国家のRPJPNの2005年から2025年までの実施は、実際、RPJMNの期間化における開発計画の段階に分割されている。

RPJMNへの宗教的節度の統合は非常に重要で、この文書は、政府作業計画（RKP）を準備する際の政府のガイ

ドラインであり、地域RPJMの戦略計画、準備および調整資料を準備する際の省庁または機関のガイドラインとして役立つからである。またRPJMのモニタリングと評価の基本的な基準となり、さらにRPJMNはコミュニティが国家開発の実施と監督に参加するための参考資料にもなる。

省庁のガバナンスの文脈では、宗教的節度の制度化は、宗教的節度に関する宗教省の規則などを通じて、その法的傘としての規則を作成する必要があることを意味することも理解しなければならない。2016年40号、宗教省における省令制定の手続きに関するインドネシア共和国宗教省令第40号を参照し、宗教的節度に関する宗教省令(PMA)を作成する必要がある。PMA の2016年40号の第5条を参照すると、宗教的節度の強化に関する規則は、これが宗教大臣の権限に基づく要件であるという理由の1つに基づいて制定することがでる。さらに企画、編纂、規定、制定の段階を通過しなければならない。(第3条)。

宗教的節度の強化を制度化するための枠組みを読みやすくするために、節度の原則、プログラム、戦略、達成目標、指標、関与するセクター、および宗教的節度のタイミングを含む図表の形でスキームを作成する必要があり、実装する必要がある。このスキームは、草の根レベルで宗教的節度を強化する政策を「運用」する際に、宗教省内のすべてのユニット/作業ユニットを促進する。

最後に、宗教共同体は、宗教的節度を強化するための政策、すなわち多様性の認識と市民としてのサービス

の遂行を強化するための政策を発行するための対象となる必要がある。この政策は、いかなる名においても、特に宗教の名において、差別の慣行を排除しなければならない。

D. 2020-2024のRPJMにおける宗教的節度の統合化

宗教的節度を強化する取り組みにおける 3 番目の戦略は、国家中期開発計画 (RPJMN) 2020-2024 における宗教的節度の策定の統合に向けて取り組むことだ。

この構造戦略は、宗教学者、ヒューマニスト、学者、ミレニアル世代の代表者によって策定されたジャカルタ議事録のメッセージの一部でもあり、穏健な宗教強化運動を主導するためには、宗教省が主流として具体的な措置を講じる必要がある。この使命は、社会や国家の領域における排他的なものは言うまでもなく、儀式や形式的な側面だけでなく、宗教を精神性と道徳のガイドとしての役割に戻すことだ。

この構造的戦略は、これまでに取られた他のステップを補完および強化するために実行される。つまり、コミュニティグループ間の会合スペースを促進し、特に若い世代の間で宗教間対話の形で、包括的な価値と寛容を強化する。

宗教的節度を RPJMN 2020 2024 に統合することで、宗教の調和を維持するという主な使命を遂行する宗教省の立場が強化される。宗教的節度が国家政策の方向性の一部になった場合、宗教省は、穏健で実質的で包括的で寛容な宗教的価値観を内面化し、広めるためにその資源を動員するための政治的および法的根拠を持っている。

もちろん、これらの努力は、読書リテラシーの強化、教育者と教育スタッフの能力の向上、宗教教育機関のカリキュラム及び宗教大衆組織の強化、ならびに普遍的で創造的な文化メディアおよびフレンドリーなテクノロジーを通じて宗教を説明する機会を増やすことによって行う必要がある。この取り組みは、よく計画的で成熟した文化戦略と相乗的に実施する。特に、宗教省の役割は、宗教生活の自由に関する憲法を支持するための保証を提供する上で、国家の存在を強調するために非常に重要だ。

2020-2024 RPJMN における宗教的節度の統合による強化努力を実現するために、2019 年 1 月以降、2020-2024 RPJMN の一部として、宗教省は、提案される宗教的節度の概念の定式化を最終決定するために、いくつかのフォーカス グループ ディスカッション (FGD) を開催した。作成された定式化は、国家開発計画省/国家開発計画庁 (PPN/Bappenas) RI によって編集された RPJMN テクノクラティック ドラフト 20202024 と調和させる必要がある。

Bappenas ドラフトでは、RPJMN 2020 2024 のメインテーマは、「繁栄し、公平で、持続可能な高所得のインドネシア」だ。大きなテーマのビジョンを実現するために、2020 年から 2024 年までの RPJMN におけるメインストリーム化の 5 つの側面、すなわち、1) ジェンダー平等、2) ガバナンス、3) 持続可能な開発、4) 社会文化資本、およびデジタルトランスフォーメーションの開発。メインストリーム化の 5 つの側面は、独立性の構

築、正義の確保、持続可能性の維持という3つの開発原則の原則によって実現される。

では、2020-2024 RPJMN の主流化の5つの側面における宗教的節度の位置付けはどこにあるのだろうか？当初、宗教省は、宗教的節度を主流化された側面の6番目に追加することを提案した。これは、インドネシアの発展の文脈では、宗教はインドネシアの人間開発における主な視点として、地域社会の生活のあらゆる側面から切り離すことができなかったためだ。

ただし、RPJMN の主流の1つになるようにアイデアを含めるプロセスには、他の省庁や機関が関与する必要がある、また2020-2024 RPJMN の決定が急務のことで、この期間には宗教的節度はいずれかの強化プログラムの1つに含まれる。しかし、これは宗教的節度の主流化が停止したことを意味するものではありません。宗教的節度を主流化するための実質的な努力が続いているためです。RPJMN Technocratic 案の文脈では、その位置はまだ主流化の側面としてではなく、強化するという立場にある。

さらに、RPJMN 2020-2024 での宗教的節度の位置を答えるには、上記の5つの優先順位が再び7つの国家優先順位 (PN) に引き下げられることを事前に知る必要がある。

1. 質の高い成長に向けた経済の回復力の強化;
2. 不平等を減らし、公平性を確保するための分野を開発する。
3. 人材の質と競争力を高める。

4. 精神革命と文化的発展。
5. 経済発展と基本サービスを支えるインフラを強化 する。
6. 環境を構築し、災害に対する回復力と気候変動を 高める。
7. 国防法と治安政治の安定と公共サービスの変革を 強化する。

この文脈において、宗教的節度は、第4番目の国家的優先事項、すなわち精神革命と文化的発展を実現するための政策の方向性の1つとして位置づけられている。宗教省と Bappenas が関与した議論では、2020 年から 2024 年の RPJMN における宗教的節度の強化は、2015 年から 2019 年の RPJMN の前回の評価で生じた戦略的問題の1つになるが「宗教に対する理解と実践の欠如」であったことは非常に重要だと考えられる。穏健さ全体として精神革命と文化開発プログラムの枠組みとして機能する6つの戦略的問題がある。

この文脈において、宗教的節度は、第4の国家的優先事項、すなわち精神革命と文化的発展を実現するための政策の方向性の1つとして位置づけられている。宗教省と Bappenas が関与した議論で、前回の 2015-2019 RPJMN 評価で明らかになった戦略的問題の1つは、「宗教的調和の強化に関して、寛容な宗教的価値観の理解及び適度で、実質的で、包括的に実践するのが依然として不足している」。したがって、2020 年から 2024 年までの RPJMN で宗教的節度を強化することは非常に重要であると考えられている。全体として、精神革命と文

化開発プログラムの枠組みとして機能する 戦略的問題が 6 つある。

1. 文化的回復力が弱く、文化的権利の保護が低い。
2. 人格教育、人格、市民権、国籍がまだ安定していない。
3. インドネシア文化の振興はまだ最適ではない。
4. 宗教的調和を強化するための適度で、実質的で、包括的で、寛容な宗教的価値観の理解と実践が依然として不足している。
5. 国家の性格の発展における家族の役割はまだ最適ではない、及び
6. リテラシー、イノベーション、クリエイティビティ の文化は依然として低い。

この戦略的問題の枠組みまたは背景は、2020 年から 2024 年までの次の 5 年間に精神革命と文化開発の分野での方向性と政策を策定する際に、すべての省庁と機関によって考慮される。もちろん、宗教省は、その任務と機能に応じて、宗教分野の戦略的問題に対応する最前線（主導的な部門）になる。

上記で定式化された戦略的問題は、少なくとも今後 5 年間の政府の政策の方向性を決定するために検討される。2019 年 6 月 25 日に Bappenas および他の省庁/機関と提示され、議論されたとき、精神革命と文化開発のための国家優先プログラムを実現するために取られる政府政策の 4 つの方向性がある。

この戦略的枠組みまたは背景は、2020 年から 2024 年までの今後 5 年間の精神革命と文化開発の分野における方向性と政策を定式化する際に、すべての省庁および機関によって考慮される。もちろん、その任務と機能に応じて、宗教省は宗教分野の戦略的問題に対応する上で最前線（主導的な部門）になる。

上記で定式化された戦略的問題は、少なくとも今後 5 年間の政府の政策の方向性を決定するために検討されます。2019 年 6 月 25 日に Bappenas および他の省庁/機関と提示されたこと及び議論されたとき、精神革命と文化開発のための国家優先プログラムを実現するために取られる政府政策の 4 つの方向性がある。

1. 精神革命とパンチャシラのイデオロギーの育成により、先進的で近代的で特色ある国家の文化的回復力と精神性を強化する。
2. アイデンティティを強化するための文化の促進と保存、人々の福利を向上させ、世界文明の発展の方向性に影響を与える。
3. 寛容、調和、社会的調和を強化するための中道の宗教的見解、態度、実践の基盤として、宗教的中庸を強化する。
4. 識字能力、革新性、創造性の文化を向上させ、知識、革新性、創造性、人格の社会を実現する。

上記の思考の枠組みと政策の方向性の策定に注意を払うことで、宗教的節度が優先プログラム (PP) の 1 つであるため、2020-2024 RPJMN のテクノクラティック

ドラフトで戦略的な位置を占めていることが保証される。これは、国家優先事項（PN）の達成を直接的または間接的に支援するために、宗教的節度が政府によって構造的かつ体系的に組織された優先プログラムであることを意味する。さらに自己認識、相互協力、寛容、繁栄、高潔なインドネシア人の人間性の発達を実現するためである。

宗教的節度のビジョンは、礼拝目的だけでなく社会的利益のための経済的目標のバランスを強調するため、非常に関連性がある。

もちろん、優先プログラムの定式化は、優先活動（KP）の定式化に落とし込まれなければ意味がない。宗教的節度も同様。宗教的節度のビジョンは、RPJMN 2020-2024 のテクノクラティック設計の優先プログラムの1つになって

いるが、省庁や機関、特に宗教省は、優先活動強化がなければ戦略計画を策定するのが困難になる。宗教的節度は「家」として、すべての派生プログラムと予算の命名法をカバーできる。

したがって、RPJMN Technocratic Draft 2020-2024 では、実施計画と優先プログラムとしての宗教的節度の強化をより詳細に、5つの優先活動（KP）に減らした。

1. 中道宗教の視点、態度、実践を強化する。
2. 調和と宗教団体調和を強化する。
3. 宗教的および文化的関係を強化する。
4. 宗教生活サービスの質を向上させる。
5. 経済と宗教資源の発展。

上記の優先活動は、非常に重要で意義深いであると考えられるいくつかの国家優先プロジェクト（ProPN）にさらに詳しく説明されている。Technocratic Draft RPJMN 2020-2024 では、策定された 5 つの優先活動のそれぞれに対する国家優先プロジェクトは次のとおりである。

KP.1: 中道宗教の視点、態度、実践を強化し、4 つの ProPNs に減らした。

1. 平和と人民の利益のための宗教放送の発展;
2. カリキュラムの開発、教材とプロセス、教師の教育と教育スタッフ、教師の採用など、適度な視点で教育システムを強化する。
3. 寛容な宗教的象徴の中心としての礼拝所の管理。
4. 文化、宗教、民族グループを超えた若世代、学生、若者の間のアイデアや考え方の交換のための公共スペースの利用。

KP.2: 調和と宗教団体調和の強化は、次の 3 つの ProPNs に削減される。

1. 市民のおよび宗教的権利を確保するための宗教団体の保護。
2. 宗教機関、社会宗教組織、宗教指導者、地域社会指導者の、国家の団結と誠実さの接着剤としての役割を強化する。
3. 宗教調和フォーラム（FKUB）を強化し、社会的連帯、寛容、相互協力を構築する。

KP.3: 宗教的および文化的関係を強化する。3つのProPNに削減した。つまり:

1. 地元の文化を尊重する。
2. 宗教を息づく文化財の開発。
3. 宗教的観光の促進。

KP.4: 宗教生活サービスの質を向上させる。4つのProPNに削減した。つまり:

1. ハラル製品保証の実施を強化する;
2. ハッジとウムラの実施の質を向上させる。
3. 宗教サービスの円滑化を促進する。
4. 結婚・家庭指導サービスの充実。

KP.5: 経済と宗教資源の開発。3つのProPNに削減された。つまり:

1. 宗教的社会資金のエンパワーメント;
2. 人民経済制度の発展。
3. メッカ巡礼資金の専門的、透明性、説明責任のある管理。

宗教経済制度の発展という文脈において、宗教的節度のビジョンは、今後5年間の政府の経済予測と統合するために非常に戦略的である。この点で、政府は、国家経済成長の促進を促進するために、2019-2024年インドネシア シャリア経済マスタープラン (MESI) を開始した。もちろん、このMESIの実装は、シャリア金融セクターの継続的な成長が実体セクターの成長に直接的かつ重要な影響を与えるように、シャリアに基づく経済システムの統合として他のさまざまなセクターを巻き込むこ

とにより、実装作業プログラムに縮小する必要がある。この場合、宗教的節度のビジョンは、宗教的目的だけでなく社会的利益のためにも経済的目標のバランスを強調するため、非常に関連性が大事である。

MESI 2019-2024の発足に加えて、国民の経済制度の発展に引き続き関連し、大統領はPPハラル製品保証（JPH）にも署名した。つまり、ハラル産業の発展は、イスラムの経済的シェアを高めるための取り組みの不可欠な部分になっているということだ。政府は、現在世界のトレンドとなっているハラル産業において、インドネシアが最大のプレーヤーとして台頭することを望んでいる。それと同時に、インドネシアは世界最大のイスラム教徒人口を抱えているが、シャリア経済の株は少ないという皮肉を侵食している。

上記のような政府の将来の経済予測を考慮すると、宗教的節度の強化は非常に重要になる。なぜなら、経済主体が穏健で、包括的で、開かれていなければ、人々の経済の発展に対する政府の真剣さは逆効果になるからである。経済は確かに成長するだろうが、それは特定のグループに蓄積され、一般の人々の福祉に向けられていない。

さらに、強化し続けることが非常に重要な他の優先活動（KP）は、専門的で透明性があり説明責任のある方法でメッカ巡礼資金を管理することに関連するものである。政府は、メッカ巡礼財務管理庁（BPKH）の運営により、この取り組みを開始した。ハッジ資金は、安全で生産的な手段を通じて最適化されているため、インフレによって価値が損なわれることはなく、より大きな価値の

利益を提供できる。その結果は、巡礼者に経済的な負担をかけることなく、巡礼の実施におけるサービスを改善するのに役立つ。

このようなメッカ巡礼資金の最適化は、メッカ巡礼資金の生産性を高めたいという願望である一方で、人々の信頼資金を維持するための慎重な態度との間のバランスを強調する中道の宗教的コミットメント (wasathiyah) の一形態である。

したがって、「精神革命と文化的発展」の分野における国家優先事項 (PN) の精緻化が、優先プログラム (PP) として宗教的節度を強化していることを一緒に理解することが重要である。優先活動 (KP)、および最後に、3つの国家優先プロジェクト (ProPN) が選択された。これらはすべて、計画と予算編成文書の間の連続性を維持することおよび国家優先目標の達成を管理するための取り組みであることを目的としていた。つまり、国家目標を達成するための努力として、宗教的節度を絶対的な戦略に強化する必要がある。

それゆえ、その実施において、省庁、特に2020-2024 RPJMN で策定された宗教節度に関連する宗教省の戦略計画 (Renstra) は、PN、PP、KP、および ProPN の論理から逸脱してはいけなない。この記事の終わりの時点で、宗教省の戦略計画2020-2024自体が策定され、ビジョンの策定とともに何度も議論されてきた。

E. 宗教省の戦略計画

宗教的節度の方針を2020-2024年のRPJMNに統合することの結果の1つは、宗教省が戦略計画を策定する必

要性がある。それに沿っており、RPJMNの予備草案で策定された優先活動とプログラムハウスが用意することができる。これは、国家開発計画制度に関する2004年法律第25号の規定により、省庁や機関の指導者はその任務と機能に従って、戦略計画の草案を作成することが義務付けられている。

宗教省戦略計画2020-2024の起草は、戦略計画は国家予算（APBN）を使用する省庁および機関の基礎を形成する公式の計画文書であるため、今後5年間の宗教的中庸の方針の実施を監督する上で極めて重要だ。

以前、宗教省の戦略計画に「中庸」という言葉が直接含まれたことはなかった。2014－2019年の戦略計画の方針は次のように述べている：主権を持ち、独立し、相互力に基づく個性を持つインドネシアを実現する枠組みの中で、宗教的に従順で、調和的で、知性があり、繁栄しているインドネシア社会を実行すること。

戦略計画は、大統領の優先プログラムを達成するために、果たすべき国家目標計画によって補完される省の方針の精緻化であるため、2020－2024年の宗教省戦略計画がその派生プログラムを反映していない場合、宗教的中庸の方針を2020－2024年のRPJMNに統合することの成功は無効になる。

この本が書かれたとき、宗教省の戦略計画の起草チームは、「敬虔で、中庸で、賢く優秀なインドネシア人」であるという2020－2024年の宗教省戦略計画の方針の結論に達していた。Permen PPN/Bappenas No. 5 2014の第3条に規定されているように、K/L戦略計画を起草する過程には準備、検討、調整、決意などの

4つの段階が必要だ。準備の段階では、戦力計画の草案が作成されたが、それはまだ指標的なものであり、方針が策定されている。

方針の策定から、「中庸」という言葉を4つのキーワードの一つとすることで、宗教的中庸の精神が明確に表れている。さらに、宗教的に従順で、利口で、優れていることも含まれている。次に、4つの方針は大統領の州政府の組織を応援するために、宗教の分野で政府業務を遂行する宗教省の任務と機能に応じたプログラムと活動が再び組み込まれる必要がある。毎年のプログラムと活動の形態は突然変わるが、宗教省の全体的なプログラムと活動は、サービス、教育、研究、擁護、識字、国民経済、行政、及び宗教のデータの統合の要素を含めなければならない。

例として宗教的従順の方針は、識字率の向上、教育、擁護、と2020-2024年テクノクラティックRPJMNの草案に書いてあるように、中庸で、不可欠で、包括的で、寛容な宗教教えの理解の内面化というプログラムを含むことができる。中庸の視点からの宗教的従順は、礼拝所の開発と管理に関するプログラムを組み込むことができる。本質的で実質的に強調された宗教的従順の中庸の視点から、礼拝所の増加が宗教の調和を乱してはならない。もちろん、建設が適用される手順と規定に従っていることに注意している。

礼拝活動の管理も同じく、中庸の視点は、宗教講師が宗教生活と規範と倫理に違反しないための制限となる役目もある。これに関連して、2017年に宗教大臣が礼拝所での講義に関する9つの招待を行ったことは、実

施をさらに強化する上で重要なものとなった。宗教的中庸の観点9つの招待とは、礼拝所での宗教講義が条件を満たさなければならないための一種のガイド：

1. 宗教がある主目的を理解し、献身的に取り組んでいる講師による講義、つまり人間の孫権を守り、人類の存在と平和を維持すること。
2. 十分な宗教知識で説明され、宗教の主な教えに基づいている。
3. 宗教で禁止されている悪口や屈辱、またはヘイトスピーチを含まず、品位と適切さの程度で丁寧な文章で伝える。
4. 教育的なニュアンスがあり、精神的、知的、感情的、多文化的な啓発の資料が含まれている。資料は、改善、自己能力の構築、コミュニティのエンパワメント、道義的改善、礼拝の質の向上、環境保全、国家の団結、社会福祉と正義に繋がるアドバイス、動機、知識の形で優先されている。
5. 伝える資料は、PANCASILA、インドネシアの1945年憲法、インドネシア共和国、多様性における統一など、インドネシア国民の4つコンセンサスと矛盾しないこと。
6. 伝える資料は、紛争を引き起こしたり、調和を乱したり、国籍を損なう可能性のあるSARA（民族、宗教、人類、あるグループ）を含まない。
7. 伝える資料は信念および崇拝の実践に対する屈辱、冒涇、と嫌がらせを含まないこと。また

は、差別的、威圧的、暴動、および破壊的な行動を起こすための挑発も禁止。

8. 伝える資料は実地的な政治キャンペーン、またはビジネス広告を含まないこと。
9. 宗教の放送と礼拝の使用に関して適用されるルールを守る。

宗教的従順は、ユニットの主なタスクと機能に従って、宗教のためのコミュニティガイダンス (BIMAS) の総局 (DITJEN) によって実行されるミッションの1つである。宗教省には、イスラム教、キリスト教、カトリック、ヒンズー教、仏教の5つの宗教コミュニティガイダンスの総局がある。この総局はいくつかの局を監督する階層の1つのユニットである。5つの総局の内、総局の名前に類似点が1つある。それは、宗教情報総局であり、宗教指導と奉仕の質を向上させるという主なタスクと機能はほぼ同様。

包括的で適度な多様性は、調和のとれたインドネシアを構築するために重要であり、多様性を尊重する。したがって、宗教的指導とサービスの質を向上させるための取り組みに、中庸の観点を含めることは宗教コミュニティガイダンスの総局に記載しなければならない。

宗教的中庸の方針は、作業プログラムに記載された使命が達成できること。作業プログラムは、宗教省/宗教機関 (RKAKL) の予算作業計画にも入れる。したがって、RKAKLはその環境における省庁の活動、または作業プログラムを含む予算計画である。それは1会計年度における政府作業計画と宗教省の戦略計画、およびそれらを実施するための必要な予算の分割である。

技術的にRKAKLの文書には、活動の名前、必要な予算、作業の段階、および宗教的中庸プログラムによって達成される成果が含まれている。それゆえに、コミュニティガイダンス総局のRKAKLには、宗教的指導とサービスに宗教的中庸プログラムのあることが明確に読み取られ、適度な宗教的多様性を提供することを目的とした活動であることが明らかになった。それが宗教的従順であることの方針の説明だ。

次に、宗教的中庸の文脈においてスマートで優れた方針は、イスラム教育総局によって、幼児教育(PAUD)から高等教育までのレベルで教育を強化するためのプログラムという意味もある。国家宗教大学(PTKN)の文脈で宗教的中庸の方針は、学術、研究、社会奉仕の側面から始めて、宗教的中庸の方針を高等教育のTRIDHARMAに明示すべきだ。また、優れた方針は各PTKNキャンパスがその専門性や特徴を構築するためのチャンスであり、ほかのキャンパスと競争力を高めることができる。

PTKNキャンパス、特にPTKIN（国立イスラム教大学）は宗教学と一般科学の統合を開拓することによって、宗教的中庸の視点に関連する優れた独特の研究力を持たなければならない。または、何百年も前にインドネシアでイスラム文明の長い歴史を通じて生み出された古典的な工芸品の一次資料などを詳しく調べて、資本化しようとする。これらの一次資料源は他国が所有していないため、競争力を構築するための専門分野となる可能性もある。

教育機関は、宗教的中庸の観点からカリキュラムや教材を強化することにより、宗教的中庸の実施と強化を主導しなければならない。宗教省はすべてのカリキュラムが国立でも私立でも宗教省の管轄下にあることと宗教的中庸の価値観が含まれていることを保証しなければならない。学習教材、特に社会的、政治的、宗教的な側面を持つ科目は可能な限り宗教的中庸についての洞察を持たなければならない。

それと同じように、国家へのコミットメント、寛容反急進主義の精神を強化するために書籍、写真、視聴覚などの形を問わず学習教材を確保する必要がある。子供の学習の源となり得るソーシャルメディアコンテンツも、宗教的中庸のある内容で複製する必要もある。

カリキュラムに加えて、教育経路における宗教的中庸の方針を強化することは、教育と学習プロセスにおいて実際に重要な要素である教師と講師も対象とする必要がある。教師または講師、知識に関する情報を提供し、学生に道徳的価値を教え込む人からだ。この教師と講師は宗教的な資料を持っている人だけでなく、すべての人も一コスだ。彼らは宗教的中庸の観点を持つべきだ。教師と講師はPANCASILAに反対し、不寛容の思いを植え付け、暴力を正当化するなどをすることは禁止されている。

次に、優れた方針は個人の質と競争力、及び教育機関の環境を強化するためのプログラムを意味することもある。教育環境の狭義は教育機関があるところ、また教育環境の広義はすなわち学生の視点と行動に影響を与える可能性がある社会環境である。

教育機関のキャンパス環境は中庸の洞察を反映していることが必須。例えば、キャンパス内の人々の交流の管理や礼拝所の管理など。学校やキャンパスでの活動は宗教的中庸を監督ために動員されなければならない。

環境の広義とは教育機関の学生に確実に影響を与える社会で成長し、発展してきた中庸の性格を可能な限り損なうことなく、「様々な経路による情報を含む」生活の雰囲気を作り出すという意味もある。

宗教的中庸の原動力となる教育機関には、イスラム寄宿学校 (PESANTREN)、イスラム評議会 (MAJELIS TAKLIM)、教会学校、ヒンドゥ学校などを含む公式及び非公式の教育機関だ。学校は、様々な違いに対する生徒の共感性を広める適切な手段になる。対話室を開いて、宗教は憎しみでなく愛を伝えるものであり、人の差を気にせずという学校制度もある。

急進主義と不寛容が学校の環境にどのように浸透するかについては、主に3つ扉があることは調査で説明されているため、重要なことだ。一つ目は課外活動。二番目は学習過程における教師の役割。三番目は学校への急進主義の侵入を制御するポリシーがまだ弱い。そのため、上記の3つの項目を強化する必要がある。

これまでのところ、宗教省のイスラム教育総局であるイスラム教育総局は教師を訓練して、イスラム教の文脈における宗教的中庸の変革のための管理機関となるように様々な動力をしてきた。それは認知的、感情的、および運動的領域の発達を通じて、批判的で、内容的で、オープンで、寛容な理解をもたらす。これはrahmatan lil alamin (ISRA)のイスラム教の方針として、穏健で実質

的で包括的なイスラム教の宗教的価値観を発展させることによって実現される。このようなプログラムは他の宗教局によって採用および開発される可能性がある。

宗教的中庸の制度化と実施には、宗教省の研究開発局からのサポートが必要。宗教省の業績のサポートにより国家開発を遂行するためのサポート機関としての戦略的機能を有する。それは研究開発サービスの提供と教育と訓練による宗教的人材 (HR) の充実である。

この立場は国家開発方針が、研究開発と人材の質の開発を位置付けていることを考えていると、開発方針の実現を成功させるための基礎として非常に戦略的だ。この役割を踏まえると、研究開発局と宗教省の役割はますます重要かつ明確になる。具体的には、宗教のサブシステムの一部として、宗教データと情報を入手できるようにする。それは研究の結果に基づく宗教開発政策を実現し、教育を通じて宗教省の質の高いリソースを利用できるようにするという文脈である。

宗教的中庸を強化するためのポリシーを応援するにあたり、研究開発及び訓練期間、次のようないくつかのプログラムと活動を手配することができる。

- a. 研究開発の分野では宗教的中庸の一形態として能動的に寛容な態度をとることを研究する必要がある。この研究は絆の調和の源として証明される地元の知恵を探究する研究から始まる。地元の知恵に関する多くの研究が行われてきたが、非常に広く文化的に豊かなインドネシアの地理的領域にはまだ十分に探究されていない潜在的な知恵がある。「宗教に中立」である地元の知恵の戦略的性質は様々な宗

教的教えの出会いの場になる。地元の知恵における「宗教的中立性」は信仰者の宗教的中庸が含まれていることを証明している。この研究の結果は政策立案者が宗教的中庸を平準化するための政策を策定する際の基礎として、重要な貢献を示すものである(証拠に基づく意思決定)。地元の知恵の問題に加えて、研究を実施できる宗教的中庸に関するほかの多くの問題がある。例えば、宗教的中庸のエンパワーメントの中心としての礼拝所、穏健派の宗教講義に関する問題など。

- b. その後、研究データは様々なドキュメントに展開され、公開テストに合格、ガイドライン、学術テキスト、モノグラフ、及びそのほかの形式として使用できるようになる。開発される可能性のある活動には次のようなものがある：普及員と説教者のための穏健な宗教講義のガイドライン、様々な中庸のエンパワーメントセンターのモスク、宗教的中庸に基づく社会宗教的対立の解決のガイドライン、宗教的中庸に基づく結婚勧告など。
- c. 教育の分野では機能的な教育と訓練を実施することができ、その結果インドネシアの宗教的中庸が強化される。機能教育訓練は宗教省内のASN(公務員)およびNon ASN(公務員以外)、並びに研究者、Widyaiswara(公務員の一つ)、Penghulu(宗教的に結婚させる人)、普及員、調和をもたらす人、モスクの管理員、FKUB(宗教コミュニケーション組織)の管理者など、宗教省の仕事のパートナーを対象としている。教育訓練の参加者の宗教的中庸に

対する感性と意識の構築は教育訓練の資料と方法によって介入することができる。

- d. 入社前教育訓練とリーダーシップ教育訓練(DIKLAT PIM)の両方で伝えられた資料と適用された方法の両方を通じて、教育訓練参加者の共感性を高めることが重要だ。

それは、2020-2024 RPJPNへの統合と宗教省の戦略計画の準備という形で、宗教的中庸を強化及び実施するための戦略である。これはすべて、法的保護を提供するために行われ、特に宗教省は宗教の調和、社会生活の調和、宗教紛争予防を管理するためのプログラムを自由に策定することができる。そうすると、インドネシア国家の完全性を維持するための信仰者間の出会いの場を見つけることができる。

また、宗教的中庸を強化するための政策目標は、宗教の一部だけでなく、すべての宗教共同体であることも忘れてはならない。これは政府が宗教開発プログラム、礼拝活動及び宗教教育を通じて実施するものである。したがって、宗教的中庸を強化する政策の性質は公共政策である。つまり、宗教的中庸を強化するための公共政策は公共の利益のために実施されるすべての政府の規制及び行動として定義される。

政府によって発行された政策と宗教的中庸は目的がある。宗教的中庸を強化するという観点から公共政策を策定する目的は、基本的に宗教社会に秩序を作り、信仰の自由を行使する際の信仰者の権利を保護し、宗教生活に調和をもたらし、宗教者の福祉を実現することである。

* * * * *

エピローグ

すでに述べたように、宗教的節度に関するこの本は、宗教の本質の1つ、つまり穏健さまたは中道の立場について説明するために生まれた。また、この本は、宗教的節度とは何かを知るためのすべての関係者の参考になることも期待されている。特にインドネシアの生活の統治において、宗教的節度が重要なのはなぜですか?では、宗教的中庸はどのように実施されるべきだろうか。

特にインドネシアの人々の宗教生活の複雑さは、非常に多元的で多文化的であり、これもまた複雑な宗教現象の誕生を引き起こした。一方では極度のリベラル派がおり、他方では極度の保守派が宗教実践に携わっている。主流化する物語のコントラがなければ、宗教における保守主義、過激主義、自由主義は真実と見なすことができる。実際は、非常に明確に議論されているように、さまざまな宗教の教えの本質は節度であり、人間の尊厳と尊厳を守る努力をより強調している。

宗教的節度には、全人類に平和をもたらすという使命がある。宗教におけるリベラルな姿勢の出現は、極端な保守的な反応を引き起こし、同様に、超保守的な態度は、宗教の名の下に、ヘイトスピーチ、敵意、不寛容、過激主義、暴力、さらにはテロリズムの誕生につながる

こともよくある。これは明らかに平和を脅かし、調和を損ない、私たちの団結を引き裂いた。宗教的節度は、私たちが直面している2つの陣営における極端な宗教問題の解決策になると期待されている。

宗教的節度を強化することは、個人が個人的に行うだけでは十分ではなく、国によってさえ、組織的かつ制度的に計画しなければならない。国家は、健全な公共空間の創造を促進し、宗教間のコミュニティの相互作用と信念を生み出すために存在しなければならない。反対に、公共の場で適用および施行される特定の宗教的感情を伴う規制や規制を生み出してはいけな。制限ではなく、促進する。

インドネシアは、人々の多様性と多様性を管理する上で、最高の経験（ベスト プラクティス）を持っていることが証明されている。いまだに散発的に発生する摩擦や対立は別として、インドネシアの調和と寛容は、同じ宗教的複雑さに直面している他の国よりもはるかに進んでいる。文化に適応し、現地の文化に適応する宗教的価値観、現地の知恵の豊富な多様性、慎重な伝統、インドネシアの人々が何世代にもわたって受け継いできた相互の文化文化は、文化、民族、宗教の点で多様なコミュニティの結束を生み出すのに非常に役立つ。インドネシアは、宗教的節度を実践する上で世界にインスピレーションを与えるべきである。

デジタル時代とソーシャルメディアでは、インドネシア社会の社会的結束は課題に直面している。フィルタリングされていない情報の洪水と、宗教的知識を含む即時の知識の急速な内部化は、団結と織り込まれた国籍の

要塞をしばしば混乱させる。大衆は、最初にモデレートして真実を追跡することなく、到着したニュースを簡単に正当化できる。宗教的中庸の精神は、我々の視点、態度、行動をまとめる際に、常にバランスが取れていて公平であるように私たちを鼓舞する。

パンチャシラのイデオロギー及び、多様性を維持し、多様性を大切にし、文化に適応し、その人々の団結と誠実さを保護するという使命を持つスローガン *Bhinneka Tunggal Ika*のおかげで、宗教的節度のビジョンは、他の国よりもインドネシアで肥沃に成長し、繁栄することができる。1945年6月1日のパンチャシラ生まれの演説で、インドネシア共和国の初代大統領ブンカルノは次のように述べた。

「インドネシア国は、誰もが自由に神を礼拝できる国であるべきです。すべての人は文化的に神を認めるべきだ。つまり、「宗教的エゴイズム」はないようにする。そしてインドネシアは神様のいる国であるべきだ。倫理的な方法で、イスラム教とキリスト教の両方の宗教を実施しよう。倫理的な方法とは何か？これはお互いに尊重し合うことである」。

国家の文脈における穏健さの精神は、多様性の国籍の確立のために戦うことでもあるため、すべての宗教コミュニティが宗教的節度を強化するというコミットメントを持っている場合、ブンカルノの理想を実現することができる。(Ahmad Suaedy、「イスラムとビネカの市民権」、コンパス新聞17/05/2018)。ビンネカ市民権というのは、国家は個人的な権利だけでなく、さまざま

な伝統や信念に対する集団的な権利にも基づいて、すべての市民に差別とわず平等な権利を与える。

この本全体の議論は、何を、なぜ、どのように宗教的節度戦略を強化するかに関連する概念的な全体像を提供することに重点を置いている。運用設計は、説明した概念を実際に実装できるように、目的、ターゲット、および成功の指標を備えた個別の実用的なモジュールに縮小する必要がある。

しかし、最も重要なことは、州レベルでの制度化などを通じて、宗教的節度を強化するための適切な機運が現在見出されていることだ。私たちはこの勢いを利用しなければならない。チャンスはしばしば2度と来ない。

もちろん、宗教的節度を強化する努力は、国、個人、コミュニティ、宗教指導者、文化人、学者、ミレニアル世代、メディアとの私たちの義務であり、調和と平和な宗教生活と宗教生活で社交的とキャンペーン団結している。

実際、宗教の名の下に行われた暴力には女性も関与していることを念頭に置いて、女性の関与は宗教的節度を強化する取り組みにおいても非常に重要だ。女性は被害者になるだけでなく、暴力の加害者になることもある。

しかし同時に、暴力的なイデオロギーの拡散を防ぐために、家庭内に節度の種を蒔く主役にもなり得る。極端なイデオロギーを防ぐために穏健さの考え方を広める努力は、家族から始めればさらに効果的かもしれない。社会的相互作用の最小単位として、家族は楽しい方法で道徳的なメッセージを一貫して伝えやすいからだ。

このように、宗教的節度の強化は、国家政策を通じて構造的に十分に追求されていないことは明らかで、非常に重要であり、間違いなく根付いているのは、それを人々の文化的運動にすることである。インドネシアは大きくて多様な国であり、その多様性と全体性は、1つまたは2つの当事者によって維持することはできない。宗教的節度は我々のものでなければならない。

参考文献

- Direktorat Jenderal Bimas Kristen Kementerian Agama RI. 2019. *Mozaik Moderasi Beragama dalam Perspektif Kristen*. Jakarta: Gunung Mulia.
- Fauzi, Ihsan Ali dan Dyah Ayu Kartika. 2008. *Keluar dari Ekstremisme: Delapan Kisah “Hijrah” dari Kekerasan Menuju Binadamai*. Jakarta: PUSAD Paramadina.
- Gunawan, Wawan, dkk (ed). 2015. *Fikih Kebinekaan, Pandangan Islam Indonesia tentang Umat, Kewargaan, dan Kepemimpinan Non Muslim*. Jakarta: Maarif Institut dan Mizan.
- Hanafi, Muchlis (ed). 2017. *Moderasi Islam*. Jakarta: Lajnah Pentashihan Mushaf Alquran, Badan Litbang dan Diklat Kementerian Agama RI.
- Hefner, Robert W. 2014. Negara Mengelola Keragaman: Kajian Mengenai Kebebasan Beragama di Indonesia” dalam Robert W. Hefner dan Ihsan Ali Fauzi (eds), *Mengelola Keragaman dan Kebebasan Beragama di Indonesia: Sejarah, Teori dan Advokasi*. Program Studi Agama dan Lintas Budaya (Center for Religious and Cross-Cultural Studies/ CRCS) Sekolah Pascasarjana, Universitas Gadjah Mada.

- Kamali, Mohammad Hasyim, 2015. *The Middle Path of Moderation in Islam, the Qur'anic Principle of Wasathiyah*. Oxford: Oxford University Press.
- Kasali, Rhenald. 2017. *Disruption*. Jakarta: Gramedia Pustaka Utama.
- Laporan Tahunan Kehidupan Keagamaan, 2016. “Meneguhkan Komitmen Pemeliharaan Kerukunan Umat Beragama.” Puslitbang Kehidupan Keagamaan Badan Litbang dan Diklat Kementerian Agama.
- Laporan Tahunan Kehidupan Keagamaan, 2017. Puslitbang Bimas Agama dan Layanan Keagamaan, Badan Litbang dan Diklat Kementerian Agama.
- Latif, Yudi 2014. “Revitalisasi Pancasila di Tengah Dua Fundamentalisme” dalam Komaruddin Hidayat (ed.). *Kontroversi Khilafah: Islam, Negara dan Pancasila*. Bandung: Mizan.
- Panggabean, Rizal dan Ihsan Ali Fauzi. 2010. “Dari Riset Perang ke Riset Bina Damai: Mengapresiasi Sumbangan Abu Nimer” dalam Muhammed AbuNimer. *Nirkekerasan dan Bina-Damai dalam Islam: Teori dan Praktik*. Jakarta Pustaka Alvabet, pp. xixxiii.
- Reychler, Luc. 2006. “Challenges of Peace Research.” *International Journal of Peace Studies*, Volume 11, number 1, Spring/Sumer, 2006.
- Ropi, Ismatu. 2017. *Religion and Regulation in Indonesia*. London: Palgrave Macmilan.

- Sendana, Uung. 2018. *Tian dan Sheng dalam Penafsiran Rohaniawan dan Cendekiawan Matakin dan Pengamat Budaya Tionghoa di Indonesia*. Jakarta: Gerbang Kebajikan Ru.
- Shihab, M. Quraish. 2019. *Wasathiyah Wawasan Islam tentang Moderasi Beragama*. Jakarta: Lentera Hati.
- Si Shu (Kitab yang Empat) Kitab Suci Agama Khonghucu. 2016. Jakarta: Kementerian Agama RI.
- Sila, Muhammad Adlin. 2017. “Kerukunan Umat Beragama di Indonesia: Mengelola Keragaman dari Dalam” dalam Ihsan Ali Fauzi, Zainal Abidin Bagir dan Irsyad Rafsadi (eds). *Kebebasan, Toleransi dan Terorisme: Riset dan Kebijakan Agama di Indonesia*. Jakarta: PUSAD Paramadina.
- Suharto, Babun, et.al. 2019. *Moderasi Beragama: Dari Indonesia untuk Dunia*. Yogyakarta: LKiS.
- Suparlan. 2002. “Menuju Masyarakat Indonesia yang Multi kultura” dalam *Jurnal Antropologi Indonesia* 69.
- Suprpto. 2013. *Semerbak Dupa di Pulau Seribu Masjid: Kontestasi, Integrasi, dan Resolusi Konflik Hindu-Islam*. Jakarta: Prenadamedia.
- Syafruddin, Didin dan Ismatu Ropi. 2018. *GEN Z: Kegagalan Identitas Keagamaan*. Jakarta: PPIM UIN Jakarta.
- Tim Penyusun. 2018. *Ensiklopedia Mengenal Lebih Dekat Ragam Agama dan Kepercayaan di Indonesia*. Jakarta: Ekspose.

